しゃくでば！

レルバル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
しゃくでば！

【Ｎコード】
Ｎ２０２１Ｐ

【作者名】
レルバル

【あらすじ】
俺の名前は永久波音。
大塔高校一年Ｄ組、一六才。
ただ平和に毎日過ごしていたい。
それだけだった。
でもそんな日々は唐突に終わりを告げる。
そう……あいつだ。
あいつが来てからだ。

壊れる日常。
崩れる普遍。

さて……。
あなたはこのハードな日常。
体験したいですか？
それとも……やめておきますか？

ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ３３３０ｌ／
↑本編です。
こちらは外伝となっております。
別にこちら単体で読んでもおｋですが
本編に比べてのキャラ崩壊が楽しいと思いますので……。

第零話（前書き）

この物語、『しゃくでば！』は

『怪盗な季節☆』

ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ３３３０ｌ／

の外伝的立ち居地にあります。
このままでも楽しめますが本編を読んでいるとギャップでさらに楽しめると思います。
本編では出来なかったこと
普段ははっちゃけないあのキャラまでがはっちゃけちゃいます。

それではちょっと違う『怪盗な季節☆』をお楽しみください。

もう一回宣伝ですが本編は
こちらです。
ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ３３３０ｌ／

それでは……この世界の幕を開けちゃってくださいな！

第零話

俺の名前は永久波音。
え？知らない？
一見様は本編を見ろぃ！
これからお送りする一回だけで完結ほのぼのギャグコメディ「しゃくでば！」は
長編「怪盗な季節☆」とは一切関係ありません（たぶんな！）
ので、キャラが壊れていても気にしないコト。
そう例え俺が女になっていたとしてもな！
ではいきます。
後戻りは出来ません、準備はいいか？
よくなくても行くけど。

大塔高校一年Ｄ組みちょー平和（当社比）
俺ももちろんちょー平和にすごしていたいんだけど……

「おはようしゃく～波音～！」

こいつのせいで平和が壊れました。

「あ～のど乾いたしゃく～。
波音、一緒に買いに行くしゃく～」

これで最近知り合ったばかりである。
なれなれしいにも程がある。
伏せいていた顔を上げるとシルクハット、長髪、細い目そしてもっとも特徴的な部分。

こいつのまがまがしく太陽光を反射していると～っても長いアゴ。
一言で言うならキ・モ・イ。
おいアゴでつつくなキモサ五〇％ＵＰだ。
ってか何でこんなになれなれしいんだよ。
あっち行けよ、こっち見んな。

「早く行くしゃくよ～、僕はもう死にそうしゃく～！！」

どんどんだん！！
どたばた暴れる。
ウザイ、あと人の机叩くな。
このウゼェ男の名前は灼場山美鶴。
しゃくを語尾につける変で変でもう臨界点突破寸前まで一瞬でかっ飛ばせるほどの男だ。

「こら！そこのアゴ！波音にからむな！」

シエラが俺を助けようと助け舟を出してくれた。

「うるさいしゃく！！僕が何をしようが女のお前には関係ないしゃく！
あっち行った！しっしっ！！あっかんべーしゃく！！」

あー、こいつ馬鹿だ。
死んだな。
しかもこの歳でアッカンベーかよ。
シエラが何か知らないで（※ベルカ世界連邦帝国の最終兵器です）
そんなことを言う男…いや漢、美鶴。
お前は今輝いているぞ！今だけ！
さぁこの勇者をたたえようではないか！

ほらみんな拍手！！

「あぁ！？
ちょっとこっち来いや、カス！」

――Ｓｏｕｎｄ　ｏｎｌｙ――

「死にさらせぇ！このアゴがぁ！！床地獄！！」

ドカ！バキ！グショ！！ギリギリギリ……

じゃ”ぁ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”
”ぐっ！！
あ”っ！
あ”ぁ”ぁ”ぁ”ぁ”あ”あ”あ”ぁ”ぁ”……

――Ｓｏｕｎｄ　ｏｎｌｙ　ｅｎｄ――

「今日も平和だなぁ……」

俺は窓の外のすずめを見た。
可愛いと思った。

ＥＮＤ　つづくかもー

毎週金曜日更新だよー
みんな来てね☆

第零話（後書き）

ありがとうございました。
本編と比べてどうでしたか？

こんなのも悪くないなーと。
そう思っていただけるとありがたいのですが・・・

本編の世界観が壊れた！死ね！
って思われたらスイマセン。
謝ります、ごめんなさい。

（ツンデレだということを祈ります）

でも一度はやってみたかったんです、外伝。
なんだかんだでココまで読んでいただきありがとうございました。

愛してます↑

しゃくでば！　アゴとなみおと

あー数学って何でこんなに暇なんだろうな。

つんつん

ん？

なんだ、美鶴か。

アゴでつつくな。

「なんだよ……

アゴでつつくなっつったろうが」

ばちん！ばちん！

こいつっ！！

知り合ったばっかりの俺にウインクで伝えてきているだと！？

ひょっとしてこいつはギャグでやっているのか！？

と、とりあえず無視しよう。

うん、それがいい、そうしよう。

つんっつんっ

「……」

つんっ！つんっ！

「……」

つんつんつんつんつんつんつん！！！

「こら！そこ二人！何してる！？」

「しゃくっ！？」

「僕ぁ被害者ですっ！！」

怒られた＞＜

○第二幕○

つん　ＴＵＮ　つん　ＴＵＮ

「わかったからつつくなよ！
何だよ？」

ばちん！ばちん！
ウインクきめぇ。

「いや、全然わかんねぇから」

「……」

ムカツク。
なんだよ、その
『何こいつ？んなこともわかんねぇのかよ、ちっ』見たいな顔は。

「ちゃんと言葉で言えよ」

「耳貸すしゃく」

「お前の口臭いからそこで言え」

すると美鶴は俺にずずいっと近づいてきて

「消しゴムしゃく」

一言放った。

「……は？」

「け・し・ゴ・ム・しゃくっ！！」

「そこぉ！！またかぁ！！」

「しゃくっ！？」

「僕は違うんです！
僕は！！」

また怒られた＞＜。

○第三幕○

つつつつつつつつつつ
イラって来た。

「いい加減やめろよ！消しゴムだろ！？
消しゴム出せばいいんだろ！？ちょっと待ってろ！！」

あの野朗……マジでむかついた。

「ほれ」

「わーいしゃく！
……ん？」

＞ｉ１７２０３＿２３４０＜

「何しゃくっ！？
これはっ！？」

「うっせぇー……お前が悪いんだよ」

つつつつつつつつつつ

END　つづくかもー

しゃくでば！　アゴとなみおと（後書き）

お読みいただきありがとうございました。
かっ飛ばしていきましたが大丈夫でしょうか（何が

本編読まなくとも分かるように話は構成してありますが……。
読まれたほうが面白いと思われます（推測です

では、ありがとうございました！

「パンツ見せるしゃくー！」

あぁ、今日も美鶴の野朗が猛威を奮ってやがる。
なんていうか、もう大丈夫とかそんな問題じゃないと思い始めた。

「ほれほれー！
しゃくぅー！！」

いつもならここでシエラかメイナが美鶴をぶち殺すのだが
あいにく今日は二人とも今流行のインフルエンザでダウンしている。
なんか代わりの人物が来るとか言っていたが、こいつを止めれるのは
はお前らぐらいだろ常識的に考えて。

「ペロリンしゃくぅ～！
しゃくふふふぅぅふふ～！」

うっは、ウゼェ。

～上空一万メートル～

「うん、一目でわかりました。
アレがキモくてウザくてアゴがとんがりコーンで存在自体がセクハラ以外の何者でもない
妖怪モドキ――ですか。
シエラ姉様に消せと言われても仕方ないですね……」

少女はそういってスクリーンをチラ見した。

「これ以上見たらおかしくなりそうなので面倒ですが私が消し去ります」

～地上～

「今日はむかつく二人もいないし、僕の時代しゃくぅ～」

「おい、その辺でやめておいたほうが……」

「うるさいしゃく！！
僕の邪魔をするなしゃく！！」

いらっ。

「おー！
楽しそうなことやってるデッパねぇ～！！
俺も混ぜるデッパ！！」

げぇ、出刃先輩！？
美鶴と双璧をなす（いい意味で）人物が来やがったかっ！！
そうこのお方は出刃猛（でばたける）。
美鶴と（以下略

「さぁ、スカートしゃくぅ～～♪」

「でっぱっぱぱぱぱ！！」（不憫すぎる笑い声）

『ターゲット二人を攻撃軸線に捕捉。
自動光学追尾装置にリンク開始……完了。

下部三番砲台に超光エネルギーの移行を開始』

「ピンクしゃくぅ～！！！」

「キャー！！」

「おぉ～、でっぱぁ～！」

だめだ、こいつら早く何とかしないと。

『光波共震砲発射体制に移行。
機関停止、自動照準装置起動。
目標への精密計測開始。
右六八・二五度、俯角四八・一九五度。自動照準装置にリンク完了。
発射装置オールグリーン、超光エネルギー充填率八十％……八十二％』

「今日はブルーしゃくねぇ！？」

「いい色、センスでっぱ！」

「しくしくしく……」

女の子泣いてるし……。
いくらなんでもやりすぎじゃ……。

『九十……九十二……九十四……
最終安全装置解除。
超光エネルギー第三砲塔第一、第二砲身への移行を開始』

「スカートをめくるのが男の本能しゃくぅ！！」

いや、それを仁王立ちで言うなよ。

仁王に失礼だろ。

『消え去ってください』

「次にいくｓ……」

その光景はすさまじいものだった。

上からオレンジの光りが降ってきたと思ったら美鶴と出刃先輩が吹き飛んだ。

「しゃくしゃいき～ん！！」

アンパン野朗にやられたバイキン男みたいな悲鳴をあげて。

うん、文字通り跡形も無く。

自分でも何を言っているのか意味が分からないんだが……。

ん？なんか暗いな。

空を見上げた俺の目が点になるのが自分でもわかった。

でっかい、戦艦が浮いていた。

赤い色に塗られた艦底。

下しか見えないがとにかくすごい数の砲台が並んでいる。

かぞえきれねぇし、ハリネズミだぜ、あれ。

ふっと頬に風を感じ頭を下げると俺の目の前には十四歳ほどの女の子が立ってた。

きゃしゃでくりっとした青い目。

少し赤みを帯びたほっぺた、茶色の腰まである長い髪。

中学校二年生に見えるほど幼い顔立ち。

びっくりした。
ってか何者だよこいつ。
身長低いし。
パッと見百四五センチぐらいだ。

「ターゲットの破壊を確認しました」

いや、お前誰だよ。

「あなたが永久波音君ですね、はじめまして。
私は空月・N・「蒼。詳しくは↓ｈｔｔｐ：／／ｕｎｓｕｎｇｔｗｉｌｉｇｈｔ．ｂｌｏｇ６３．ｆｃ２．ｃｏｍ／ｂｌｏｇ－ｅｎｔｒｙ－２２５．ｈｔｍｌ
蒼とよんでください」

＞ｉ１７２０６－２３４０＜

「シエラが言っていたのはこの人だったのか」

なるほどな。

「まだだ……まだ終わってないしゃ……く……」

パチン！（蒼が指を鳴らした音」

ズギャァ！！（レーザーが降ってきて美鶴が再び消し飛んだ音）

蒼が俺に微笑む。
にっこりと、無垢で無邪気な笑顔で。
こいつには勝てねぇなぁと思わされた瞬間だった。

～後日談～

「ま……だ終わってない……し……」

パチン！

ドガガガガガ！！！！

ぴゅー（地下から水が噴出してきた）

シエラよりもこいつ鬼かもしんねぇ……

「でっｐ……」

ズガン！！

容赦なさすぎるだろ、おい。

ってか、コレって「しゃくでば！」なのか？

大丈夫、ちゃんと続くよっ！！

美鶴復活完了した様子だ。

「僕は……僕達は……こんなガキに負けてられないんしゃくぅぅぅうううう！！！！」

「（カチーン）」

あぁ、蒼からなにやらオーラが……。
だがそれに勝るほどのオーラが美鶴からにじみ出ているだと！？

「出刃先輩、僕らは……僕らはまだ戦えるしゃくっ！！！」

「でばぁ！！」

「全国のスカートメクラーに届けるしゃくっ！！この思いをっ！！」

「そして全国のパンツ好きに届けるデッパ！！
俺達の！！熱きこの魂！！血潮！！
そして後世に伝えるデッパ！！
俺達のこの終焉の世を駆けめぐった戦記をッッ！！」

（元ネタ不明）

いや、それらは届けちゃ駄目だろ。

「僕らは！！しゃくでばしゃくっ！！
二人合わせてしゃくでばしゃくっ！！」

意味分からん。

「しゃくでば究極奥技！！
東にミニスカがあればめくりぃいぃぃいい！！」

「西にビキニがあれば網膜に焼きつけぇえぇ！！」

「南にロリあればこの腕で抱きしめぇえええ！！」

ここでちょっと蒼がたじろく。
そして胸をふにふにしてガッツポーズ。
お前もお前で何がしたいんだ。
よくわからん。

「北にめがねっ娘あればその唇をうばうぅぅうううう！！」

「「東西南北！！
　ファイナルシャクデバアタアァアアアアアアックゥ！！！
しゃくっ！！デッパ！！」」

二人の燃える拳がゴウッ！！と蒼に襲い掛かる。
あーびっくりマーク多いなぁ。

「くらうしゃくぅうううう！！！僕達のッッ！！！！」

「最！！！高！！！級！！！の奥技ヲォォオオオオオオオオオオッ！！！」

その瞬間辺りが真っ白になった。
ＨＥＮＴＡＩ×ＨＥＮＴＡＩ　ＶＳ　超空要塞戦艦ネメシエル　との対決。
結果はどうなったのだろうか。
ただ俺が覚えているのは蒼があきれてため息をついていたことぐらいか。

（翌日）

生徒指導部の先生、桐梨が出席表を読み上げる。

「灼場山～。
ん？今日も休みか？」

俺の隣の席は今日も空いたままだ。
シエラやメイナがどかどかと自らの教科書などをおいて植民地化しているが……。

「そうか、コレだったんだね。
あいつの価値は……」

シエラが美鶴の机をぽんと叩いて言う。
そんな子供を慰めるような目で言わないでください。

一方蒼の方と言えば……

「詩乃姉様、テレビ見てもいい？」

「んー？全然構わんよー」

『いきなり出てきてゴメーン♪
まことにスイマメーン♪』

「あ、まだこの芸人いたんだ……」

「いたねぇ、こんなやつも。
もうほとんどみないけどねぇ。
あ、ご飯だぞそろそろ。
テレビ消しな、蒼」

「はい、詩乃姉様っ！」

詩乃の家に住まわせてもらっているようだ。
なぜか蒼は詩乃によくなついてる。
なぜなんだろうな、不思議。
妹的存在が出来た詩乃もまんざらではない様子。
ほほえましいぞ、この野朗っ！
蒼の頭を詩乃がなでなでしてにっこりと蒼が嬉しそうに笑うところとか超絵になるしな。
二人の笑顔がまぶしいのである。
俺も妹的存在が欲しいといえば欲しいが
さすがに家の真上に戦艦がこられては迷惑だな、うん。

詩乃の寛大さに拍手！

オマケとして美鶴も見ておこうか。

「……」

ピクッ……ピクッ……

絶対安静状態らしい。

ちなみに出刃先輩も隣でピクピクしている。

結果は見てのとおり、ＨＥＮＴＡＩ×ＨＥＮＴＡＩの完敗。

あなおそろしや、蒼よ……。

まぁ、これぱしゃくでば！なんだなぁ。

そうだ、これぞいつものしゃくでば！だ、と実感しながら

俺は臭い保健のおっさんの授業中に眠りについた。

ＥＮＤ　つづくかも～

Ｐ．Ｓ

！マークが多いのは仕様ですっ！！！↑こらｗ

Ｓｈａｃｋ　ＤＥＢＡ！　Ｍｉｓｓｉｏｎ３　『Ｓｕｐｅｒ　Ｈｉｇｈ　Ａｉｒ

本編にも出ていない、新キャラ。
空月・Ｎ・蒼です。
彼女、可愛いでしょ？
正直一番好きなキャラです。
（個人的にですが）

それではありがとうございました。
しーゆーねくすとふらいでーい！

しゃくでぱ！　けーたいでんわ

「波音！波音！！」

つつつつつつつつつつ！！
まぁたつついてきやがる、アゴで。
うぜぇー。

「ッてぇな！！
だからなんだよそのつつき方は！！
やめろって言ってんだろうが！！」

「しゃくぅ……」

「んな顔すんなよ、きもいッから。
で、何？」

疲れる。

「フッフッフ……しゃくぅ……」

うぜぇーーーっ。

「さっさと言えよ、うっとおしい」

「じゃじぁ～ん！」

そういうと美鶴はポッケから四角い何かを取り出した。
何だアレ？

「携帯しゃくよ〜、波音遅れてるしゃくぅ〜」

「携帯って……ブッ！！」

「しゃく？」

「ブハハハハハ！！な、なんだよその携帯！！
いまどきアンテナがついてるとかお前は明治かってぇの！！」

「何しゃく？何もおかしくないしゃく！！しかも！！
これにはカメラがついてるんしゃくよ！！すごいしゃく！！！ありえないしゃく！！」

「ナハハハハハ！！はっ、腹がッ！！」

「何しゃく？信じられないしゃく？
だったら証拠見せてやるしゃくよ！？
ためしにシエラとか蒼とかを……」

あーまたこのオチか。
しかしいまだにこんなもの売ってんだなぁ。
アンテナですって、奥さん。
まぁー古いわねぇ。

「おっ！
あの娘きゃわいいしゃくぅ〜♪」

パシャッ！！

「おっ！！
あの娘もしゃくよ？」

パシャッ！！

「あのメガネもいいしゃくねぇ～！」

パシャパシャ！！

とりまくる美鶴。
狂ったように。
それはもうなんと言えばいいのか。
カメラを持って白鳥の舞でも披露しているみたいだったぜ。

「お、おいそろそろやめておいたほうが……
って、聞いてねぇ。
目がハートマークだ、新しいなその表情」

パシャパシャパシャパシャ！！
ん、あの制服は……。
俺逃げとこっと。

「しゃく？
おまわりさんしゃく。
今日もお仕事ごくろうさｍ」

「君、ちょっと署まで来てくれるかね？
そこの女子高校生から通報があったんだ」

「しゃく！？しゃくっ！？

波音、助け……っていないしゃくよぉ！！！」

じゃぁぁあああああああっぁあああ！！！！

～第二幕～

「というわけでしゃくほうされたしゃく～！」

変なところ強調するな。
ギャグだとしても全然面白くない。

「と、いうわけでメールしようしゃく～！！」

どういうわけだよ。
嫌だよ、めんどくせぇ。
ありえないぐらいにめんどくせぇ。

「なにがというわけなのかは知らんがメールなんてしたくねぇ。
メール返すのだりぃんだよ」

「じゃあ一応メアドって言うのだけでも交換するしゃくよ？」

……。
あ、いいこと思いついた。

「あー！
やっべぇ、やっべぇ！！
俺携帯わすれたわーーー！！
あっはっは、すまんなー！じゃまた明日なぁー！！」

よし。

「……」

う……。
なんだろ、この目つき。
いやだ、怖いわ。

「持ってるしゃくね……。
尻ポケット……」

びくっ。

「いただきしゃくっ！」

「ちょ、おま！！
取るなよ！！！」

パパピピパピパピパピ！！！

「超はえぇ！！
何だこいつは！？

まさか一晩でマスターしたというのかよ！？」

ってかかえせぇえええ！！

「完了しゃく♪」

あぁ……。

最悪だ。

おめでとう！

波音は美鶴のメアド・電話番号を入手した！！

体力が五十下がった！！

やる気が一万二千下がった！！

鬱が百二十上がった！！

「チャンスXしゃくっ！！」が身についた！！

そして――

こんばんわしゃくぅ～♪

波音は元気しゃく？

僕は元気しゃくよぉ～。

じゃばいばいしゃ～くぅ～。

（＋うざい＆カラーで動く顔文字）

こんなメールが一日に五十通も送られてくるのである。
着信拒否が効かない、しかも。
正直死にたい。
受信フォルダがこいつのメールで一杯だ。

ってか、メールでも語尾に「しゃく」つけるのかよ……。

つづくかも～

しゃくでぱ！　けーたいでんわ（後書き）

ありがとうございました。
全国の美鶴さんすいません。

正直もっとうんことかそういう名前にしとけばよかったと思ってます。

しゃくでば！　独眼龍は伊達じゃねぇよ

あぁる日の午後ぉ、一人の少年の断末魔がこだまする。

「ぎに〝ゃ〝あ〝あ〝あ〝ぁぁぁあ！！！
じゃぐふっぅぅぅぅぅ……」

まーたやってるよ。
こりないねぇ。

「うぅ……
最近のシエラはやりすぎしゃくぅ……。
どうにかできないしゃくか……」

お前が行動を自重すれば言いだけの話なんだがな。
一生懸命に考えていた美鶴の頭の上に！マークが浮かぶ。

「そうしゃく！
シエラを洗脳して僕に服従させればいいんしゃく！
そうすればもう僕に暴力をふるわなくなるし
あわよくば……ふふふ……しゃくぅ……」

あの顔きめぇ。
一体全体何を考えたらそんな顔になるんだ。

「ぐへへへへ……
しゃくぅぅぅぅ……」

だらだらだらと何か顎から出てるし。

『説明しよう！
この液体は美鶴汁と言って、美鶴の顎の先端部から興奮時に放出されるのである！
あと臭い！かなり臭い！！』

「よーし！
さっそくあの人にシエラを洗脳する方法を聞くしゃくよ！！
きっと何かを知っているしゃく！！」

～～翌日～～

「と、いうわけでシエラを洗脳する方法を教えて欲しいしゃく」

美鶴が頼み込むその相手は……

「（えーと、それって本人の僕に聞いてもいいものなのかなぁ……。
あ、いいこと思いついた。）
ずばり、好感度だね！
好感度をＭＡＸにして彼女にして油断している隙にあぁん……
となるワケ！」

あぁんの所詳しく頼んでもいいですかね？
っと、いかんいかん。
このままでは美鶴と同じ思考回路だ。
それだけは控えねばっ！

「なーるほどしゃくっ！
流石シエラしゃくぅぅぅ！！……ん？
シエラにシエラ……？」

「ほら！はやく好感度上げないと！
とりあえずジュースでも買ってきんしゃい！！」

「わ、わかったしゃく！」

・・・・・

「買ってきたしゃく！」

「こんなクソ暑い日にお汁粉なんて飲めるかぁぁ！！」

ゴッ！（ジュースが美鶴の顎に衝突した音）

「ひでぶっ！！しゃくっ！！」

教室にすげぇ響いたな今の音。
見ている側としてもかなりシュールな感じだったぞ。

・・・

・　・

「買ってきたしゃく！！」

「よしチャントミンティアサイダー期間限定うすしお味だな。
好感度×０．１％ＵＰだ！」

下がってる、下がってる。
かなりすごい勢いで下がってるそれ。

「わーい！！しゃく！！」

うは、気がつけよ。

「次！
靴磨き！！」

「はいしゃく！！」

それを見ていた俺――波音は親友の仁に話しかける。

「なぁ、仁……。
あれどう思うよ？」

「犬」

「だよなぁ」

やっぱりそうだよな、うん。

わんころ美鶴だな。

『宿題丸写し！』

『代わりに掃除！』

『三回回ってワン！』

『ハトのモノマネ！（元〇山総理乙）』

『桐梨（生徒指導部所属）になれなれしく接する！』

「お前……灼場山……後で生徒指導室こいやぁあぁ！！！
その脳みそに刻み込んでやる……
真の規則ってもんをなぁああ！！！」

「ひぃいいいいい！！！
しゃぁぁあああああくぅぅうう！！！」

『堂々と男子トイレの個室を使う！』

『校長室に入って校長に「はげざまぁｗｗｗ」と言って帰る！』

『女子更衣室に乱入！』

「きゃぁあぁぁああ！！！」

おー女子の悲鳴だ。
また美鶴何かしたんだろうな。

アホだな。
真性のアホだな。
直しようが無いほどのアホだな。

「ちっ……違うんしゃく！！
　コレにはワケがのぶおッ！！」

誰だよ。
のぶお？

そして警察へ。

「僕は無実しゃくぅぅうううう！！！！！！！」

「あー楽しかった。
　やっぱりこやって楽しむのは大切だよね」

満面の笑みを浮かべるシエラ。

「お前……」

それはやりすぎなんじゃ……と思うが反論することが出来ない俺がいた。

だって美鶴だし？

！

つづけぇぇえええええ！！！！

だめにきまってんだろうがぁあああ！！

しゃくでば！　独眼龍は伊達じゃねぇよ（後書き）

メリークリスマス！
聖なる夜にこんなもん見せてすいません！

美鶴なぐってさっぱりしてください！

それでは！

しゃくでば！　君の顔になにかついてるとってやらない脂でてかってできもいか

ある日俺はシエラに良いことを教えてやった。
ウィキ〇ディアで駄洒落と調べてみろと。
そこで見つけたものが案外面白かったらしく

「明日学校で試す！」

といって笑顔になっていた。
最高の笑顔だった。
マジで最高の笑顔だった。
そして次の日の一年D組。
シエラがつかつかと美鶴につめよった。

「な、何しゃく？
ぼ、ぼ、僕は何もしてないしゃくよ！？
女子のスカートもまだめくってないし縦笛に泥をつけたり
事故を装って胸をもんだり……
ま、まだそんなことはしてないしゃくよ！？」

「私の縦笛に泥を塗ったのはてめぇだったのかぁ！！」

メイナが切れた。

（しばらくお待ちください）

「ぎゃぁああ！！
痛いしゃくぅふあぁあああ！！
あ”あ”ぁあああああ！！！」

（しばらくお待ちください（汗））

「この野朗っ！！
死ね、おら、ボケ！！蛆虫！！」

（重ね重ねお待ちください）

「ひ、ひどいしゃく……」

「もう二度とするなよ、この障害が」

「うぅ……」

（ＯＫです）

「で、シエラは僕に何の用しゃく？
あ、もしかして奴隷にしてほしいしゃく？
なら全然いいしゃくよぉ～！！
あふふしゃくふふふぅふ～～！
さぁ、さっそく僕をあが……」

「君の顔なんかいもみたい」

！？

ざわ……ざわ……
クラス中に動揺が広がった。

「ぼ、僕の顔を何回も見たいしゃくか！？
シエラが僕にそんなことを言ってくれるなんて……

僕は今、人生で最高潮の嬉しさしゃく！！」

「君の顔なんかいもみたい」

「あぁ、心に響くようしゃく～！
ときめくしゃく～～！
ヘッヘー、僕はリア充しゃく～！！」

「君の顔なんかいもみたい」

「けへへー
もっと言って欲しいしゃくよ～～！
ほれほれ～～～！！」

「君の顔……」

壊れたレコーダーかお前は。
わざと声のトーン変えてないだろ。
ようやくメイナがココで気がついたようだ。

「ねぇ、波音、これって……」

「あぁ、お前の思ってるとおりだ」

～解説～

×「君の顔何回も見たい」

○「君の顔なんか芋みたい」

以上、かなりＩＱが高い問題でした。
正解者はいるかな？

「な、なぁ、美鶴……
ちょっと聞くでっぱ」

出刃先輩乙。
真実を伝えてやってくれ。

「何しゃくぅ！？
非リア充の出刃先輩～？
僕は今最高の幸せを噛み締めてるんしゃくよ？
邪魔をしないでほしいしゃくふぅうう～」

きめぇ顔だ。

「くっ……
た、正しくは君の顔なんか芋みたい……じゃないでっぱ？」

「そ、そんなわけないしゃく！
さてはねたんでいるんしゃくね！？
そんな嫌な男だとは思わなかったしゃく！！
ね、シエラ？」

「出刃君正解だ。
誰がてめぇのきたねぇ顔を何回も見たがるんだよ、ボケ」

「そ、そんな……しゃく」

絶望の美鶴の背中はなぜか小さく見えた。
あいしゅうがどよどよと漂っている。

「ははっ！さつまいも美鶴ってわけね。
シエラがそんなこと言うわけナイト思ったよ！」

メイナが美鶴の心をえぐるようにせせら笑う。

「うわぁぁんしゃくぅう！！
シエラの馬鹿しゃくっ！！！！」

美鶴がシエラに殴りかかった！

「僕の必殺技をくらうしゃく！！
トルネードアゴリアルクロｓ　グゲア”ァ”ーー！！！
ア”あ”あ”ぁ”あ”あ”あ”あ”ぁ”……」

今日も良い天気だなぁ。
お、カラス。

アホーアホー

ギリギリギリ……

つづくかも～

「言えよ……言ってみろよォ……
トルネードアゴリアルクロ……何だってぇ？」

「クロ……シュ……マテ……リア……ルガン……」

メキッ！

「あぅぅううん……しゃくぅ……」

つづくかも～

しゃくでば！　君の顔になにかついてるとってやらない脂でてかってきもいお

あけましておめでとうございます！
本年もこのアホな作品をよろしくお願いします。

ん・・・？
あれ？
明けてない？

しゃくでば！　隠密機動部隊（笑）

「そうしゃく！
シエラの暴力をやめさせるかつ僕のしもべにさせる方法を思いついたしゃく！
しゃくふふふぅ～～～。
シエラの部屋に侵入して奴の弱みを握ってやるしゃくぅ～～（↑エロ同人誌の見すぎ）」

……はじまったか。

・　・　・

ＰＬＬ　ＰＬＬ

「こちら美鶴しゃく！
出刃先輩、聞えてるしゃく？」

「あぁ、ばっちりでっぱ！
そっちの状況は常にこっちの世界地図でマークしてるから大丈夫でっぱ！」

「よ～し、早速侵入しゃくぅ～☆」

そろりそろりとドアを開ける美鶴。
バイオかよ、こえぇよ。

「お前のやることは一つ。
その部屋から某最終兵器シエラ・Ｆ・Ｄの弱みを握ることでっぱ。
まず左スティックで移動、それから――」

ゲームかよ。

「ふむふむ、なるほどしゃく～♪」

うなずいている場合かよ。
後ろ、後ろ！

「貴様ぁ……
こんな所で長々と何をしてる……？」

ラスボス出てきたー！
ゲーム初版なのにラスボス出てきたー！

「！」

「鼠のように逃げおおせるか、この場で死ぬかどちらか選べ侵入者」

シエラの究極の選択！

「しゃぁあぁぁぁぁぁぁ……」

０．２秒後時間切れにより美鶴死亡。

せめて選ぶ時間ぐらい与えてやれよ……。

つづくかもー

つづきますー

「蒼……僕は疲れたから今日は任せて良いか？」

「はい、分かりました、シエラ姉様」

いつのまにやらそばに立っていた蒼にバトンタッチしたシエラ。
ゆっくり休んでくれよな。

「ちょおま！
待つしゃくよ！！
僕はシエラと戦う（？）ために来たのに何で蒼が出て来るしゃくか！？」

首をかしげて考える蒼。
しばらく考えて出した答えは

「大自然の摂理……ですかね」

超不確定的要素じゃねぇか。

でもよかったな美鶴！
ラスボスから一つ繰り下がったぞ！
シエラとあまり大差はないけど！

「あなたの死に場所はココです！
ココです、ここなんですっ！」

「しゃうぅぅぅ！？」

「一瞬で終わります、耐えないほうが身のためですよ……？」

「ひ、ひとまず逃げるしゃくっ……！」

逃げられない……▽

「今死んでください！
すぐに死んでください！
骨まで砕けてくださいっ！」

ドズギャ！！ザジュ！！ズガガガ！！！

あ、屋根……。
屋根壊すなよ……。
穴から見える超空要塞戦艦。
美鶴を見事に射抜く光の矢。

「じゃぁ”ぁあ”あぁ！！
痛い、痛いじゃぐぅぅぅう！！」

「死ぬのか！！」

ズゴッ！

「消えるのか！！」

ガゴギッ！！

「土下座してまで生き延びるのかっ！！
選んでくださいっ！！！」

「――――――――ッ！！！」

美鶴は体中に風穴を作って倒れた。
不思議なことに血は出なかった。
これもギャグがなしえる業なのか……。

「き、今日の……あ、蒼……はシ……エラ並に……よ……う……しゃが……な……いしゃ……く」

「どうしたんですか……？
シエラ姉様の弱みを握るんじゃなかったんですか……？」

腕を組んでため息を出す、超空要塞戦艦少女――空月・Ｎ・蒼。
実際彼女暇してたらしい。
その暇つぶしになると喜んでいたのだが思っていた以上に手ごたえがなかったようだ。

「き、聞いてたしゃくっ！？
くっならば死んでもらうしかないしゃくっ！！」

どこから取り出したのか美鶴の右腕にはＲＰＧがっ！
噴煙を残して美鶴の痛恨の一撃が蒼へと向かう！

「……邪魔です」

空から降ってきた機銃の赤い矢がＲＰＧの弾頭をぶち抜き爆発させる！
なんだあの命中率。
そして部屋の中がめちゃくちゃだよ、もう！

「うわぁぁもう駄目しゃくっ！！
せめてレーション（食い物、超まずい）で体力回復を――」

ごそごそとポケットを探る美鶴。

「アイテムなんて使うんじゃないです！！」

あ、阻止された。

「しゃくぅっ！？」

「アイテム使うなんて人間……いや屑の中の屑ですね。
光波共震機銃発射準備……
出力３２０％――目標指定、五秒後に攻撃開始。
自動追尾装置にセット完了――発射！」

ネメシエルの下部から火を吹いた沢山の機銃が美鶴に突き刺さりまくった。
顎に穴が開く、開く、開く。
見てるこっちが痛い。

「しゃくぅぅぅぅぅぅぅ……」

ＧＡＭＥ　ＯＶＥＲ

「美鶴、どうしたでっぱ！？
応答するでっぱ！！
美鶴！！美鶴ぅぅぅぅぅ……」

・　・　・

「うわぁ、死にたくないしゃくっ！！」

何やってんだ、あいつ。
桐梨の社会の時間に立ち上がるなよ。
授業中だってのに大声で叫びやがって……。

「……」

生徒全員が美鶴に痛い視線を送る。

「……」

桐梨が美鶴に自分の授業を邪魔された怒りと憎しみの視線を送る。

「あれ……夢だったしゃく……？
よかったしゃく……」

「よくないな。
さぁ、これから悪夢の始まりだ」

がっちりと桐梨に腕を掴まれる美鶴。

「しゃくっ！？」

「さぁ、生徒指導室に行こうか……？
みんなは自習な。
灼場山は今から……ふふっ……」

しゃぁぁぁぁぁぁぁぁ～～～～～～～

つづくかもー

しゃくでば！　隠密機動部隊（笑）（後書き）

改めてあけましておめでとうございます。
今年もどうかよろしくお願い申し上げます。

さて、どうでしょうか、この元ねたお分かりになったお方いらっしゃいますかね？
メタルギアなんですが・・・どうでしょうか？

それでは、よんでいただきありがとうございました。

しゃくでば！　お見舞い日和

桐梨が言う。

「灼場山～？
あ今日はインフルエンザで休みか。
てめぇらクソガキも気をつけろよ～？」

あぁ、あいつ休みか。
今日は良い日になりそうだな。
シエラがこれ以上ない満面の笑みを浮かべているよ。
幸せなんだな、俺もだ。

（帰宅後）

「あーあ。
この時間おもしれぇ番組やってねぇなぁ。
最近ＴＶカスばっかりだ」

番組表をぺらぺらめくりながら呟く。

『止めて、恋の抑止力！（コール音）』

「ん？メールか……。
げっ、美鶴からかよ！？」

液晶には『顎』と書かれた差出人の名前が。

《お見舞いにくるしゃく！》

何で命令形なんだよ。
ってかお見舞いは命令されていくもんじゃないだろ。
そしてめんどくさいからヤダ。

「だが、断る……っと」

はい送信。

『止めて、恋の抑止力！（コール音）』

《もういいしゃくもん！
ぶぅーだ！》

だから可愛くないって。
ってかいつもより素直で安心した。
インフルエンザすげぇ。

「あっ、今日は
『探偵ミチコ　妻強奪殺人事件　～血塗られた婚姻届～』がやる日じゃん！
絶対に見なきゃ！！」

俺が今面白くない番組ばっか、ＴＶカスって言ったそばからシエラがどう考えてもドロドロな気配の番組を見ようと思い立ったようだ。
やめとけって。

「おぉっと、私のズゥンビ無双？タイムの邪魔をする気なのかい？」

メイナがゲーム機を持って配線を始めていた。

それをシエラが見て

「姉さんもうそれクリアしたじゃんか」

と一言。

「ナイフだけでやるのよ、ナイフだけで。
最高難易度エクセレントでやるのよ」

「でも僕はＴＶが……」

「やるっての？」

「えぇ、いいぞ？
かかってこいよ、プロトタイプ」

「ばっ、馬鹿にしたわね！？」

最終兵器が意外な事で喧嘩してるぞ。
でもこの二人が喧嘩すると地球がやばいからこの辺で止めておくか。

「おいおいお前ら……。
んなことでいちいち喧嘩するなよ……」

ガチャ……。
ギィィィィィィ……。

「！？」

俺達三人の頭の上にビックリマークとなんかうねうねマークが浮か

ぶ。
クオーテンションマークだっけ、忘れた。
ヒタッヒタッヒタッ……。
「お、お見舞いされにきたしゃくぅぅぅぅ……。
じゅるるっ……ずずーっ！
ウヴェックシャッ！！しゃくぅ……」
俺達三人ポカーンとしているしか出来なかった。
・　・　・
「えっといいか？
それお見舞いもクソもないんだぞ？
ただ単にウイルスばら撒きに来ただけなんだぞ？
犯罪なんだぞ？
バイオテロなんだぞ？
分かる？意味分かるかな？」
「じゅるるっ！じゅるるるっ！！
う”ぅ～……げほっ……。
ちょっと何言ってるのかわからないじゃぐぅ……」
今俺日本語で言ったよな？
全部日本語だったよな？
「嫌しゃくっ！！

僕はお見舞いしてもらうまで帰らないしゃくっ！！」

「はぁ……」

シエラが両腕を前に組んでため息をつく。
美鶴がぶるぶると鼻水などを飛ばしながら顔を振る。

「うわっ！ちょっと！！鼻水とか唾飛ばさないでよ！！
移ったらどうするつもりなの！？」

メイナが目の前にイージスを張ってガードする。
俺にはしてくれなかった。
唾液がメイナをそれて後ろの壁を直撃する。
イージスは物体の軌道を逸らして自分を守るという盾なんだが
後でそこを消毒しなきゃいけないだろ、手間を増やすな。

「ってかお前さ……。
お見舞いってどういう意味か分かってるわけ？」

俺は半ば呆れながら美鶴に尋ねる。

「もちろんのもちもちろんしゃくっ！！
きゃぅわいいおにゃのこが特盛りのフルーツを持ってきてずぅーっと
つきっきりで看病してくれるんしゃくっ♪
つぅいどぅにぃ♪

熱を出すために僕の（あぁんっ……／／／）を（あぁんっ……／／／）して
さらには（あぁんっ……／／／）で（あぁんっ……／／／）され

ちゃって
　挙句のはてには（あぁんっ……／／／）の（あぁんっ……／／／）して（あぁんっ……／／／）

なーんてことをしてもらうんしゃくぅ♪
じゅるるっ……ずずーーっ……しゃくぅ……」

念のためにモザイク→（あぁんっ……／／／）をかけておきました。ね、モザイク→（あぁんっ……／／／）の部分に何か言葉を入れてね。
美鶴にきもいことを言わせて見るって遊びもできると思うからね。
暇だと思う人は一度やってみるといいと思うぜ。

両腕を前に組んでそれを聞いていたシエラ。
いい加減に我慢ができなくなったらしく……

「ねぇ波音……。
僕もう限界なんけれど」

再びため息交じりでこう呟いた。

「あぁ……やっちゃっていいぞ。
手袋ちゃんとつけてアルコール消毒しろよ？」

（しばらくお待ちください）

「やめてしゃく！！
お願いしゃグシャッ

「僕は病人しゃメショ

「じゃぐっ！！ドゴッ

シエラの鉄槌が美鶴を射抜く。

「二度とくんな！！」

俺達は三人で美鶴のケツを蹴って家から追い出した。

めでたしだな。

This story continues.

しゃくでば！　お見舞い日和（後書き）

いいですか、バイオテロだけは駄目ですよ＞＜
リアルバイオハザードですからね。

インフルエンザにかかった場合はおとなしくお家で寝ていてください。
そして早く治してたくさん遊んでください。

以上です！

しゃくでば！　お見舞い日和後日談

キーンコーンカーンコーン……

「顎が休んで今日で七日目か……」

シエラが空の実鶴の机を肘を付いてみながらぼやく。

「もっとながびかねぇかな……」

平和な日々すばらしいし。

人の不幸を祈っているのもどうかと思うがそれぐらい美鶴はうぜぇ。

ぼーっと教室のドアを眺めるとガラッと勢いよくドアが放たれ

例の細長い顎を持つシュルエットが入ってきた。

「あー来ちまったか……」

・　・　・

なんだか今日の実鶴はとっても不機嫌の様子。

鞄を机に放り投げた後おれの席の上に……

そう机の上にだぜ？

机の上にう○こ座り――もといヤンキー座り（本人は少なくともそのつもりらしい）。

もうアホかと、馬鹿かと。

なんなのかと、死ぬのかと。

そして独り言を言うように呟く。

「あー……インフルエンザつらかったしゃくぅ～……。
誰かさんがお見舞いに来てくれればもぉっと早く
もぉっっと早く治ったかもしれないんしゃくがねぇ～……」

キッ（笑）！！と俺達をにらみつける美鶴。
やめろ。
リアルで怖いからってかシエラ寝てるよ？
てか何でにらむんだよ。
悪いのは明らかにそっちだっただろ？と言いたかったが
美鶴が言えない、いや言わせない空気をかもし出していた。
早く俺の机からどけ。
あーもう後で薄く切ってもらおう、シエラに。

「あーあの時誰かさんが優しく看病でもしてくれれば
もうすぅぐに治ったかもしれないしゃくがねぇ～。
まぁ誰かとはあえていわないしゃくけどぉ～」

といいながらメイナに顔をぐりぐりと押し付ける美鶴。

「あぅ……近い、近い……」

メイナはかろうじてノートでガードしている。
誰がどう見てもセクハラだろ、これ。
そして美鶴はそんな最終兵器の片割れを見て調子に乗ったのか

「おい起きろしゃく」

ガンッ！

あのシエラの机を――。
シエラが寝ているのにもかかわらずに下から上へと蹴り上げたのだ。

「痛っ!?
な……何?」

そして二人の目が合う。

「お前も悪いんしゃくよ?
いやいっちばんっ悪いしゃく!!
か弱い病人を殴ったり蹴ったり……。
少しは人情ってもんがないんしゃくか!?
大体お前はいつもいつも――」

ガッ!!
美鶴の襟首を掴むシエラ。
にっこり笑った顔が怖い。

「あのね……ここじゃちょっとアレだからね……?
屋上で話そ?ね?いいよね?」

オーラが……。
物凄い殺気をまとったオーラが……。
シエラから……シエラから……。
そのオーラを読み取れないKY(もはや死語)美鶴。
強気でシエラに挑みかかる。

「はぁ!?
今すぐココで土下座して僕の下僕にゲボアッ!!

「え？
ホント？いいの！？やった♪ホラ！早く行こう！！」

ずるずるずるずる……。
あー美鶴死んだな。
ここから先は皆さんの思ったとおりさ。

「あまり調子にのってっと俺のレーザーでてめぇのケツにファックしてやるぞ？
あぁ！？」

「しゃくっ……」

しゃぁぁぁぁあああああああああああああ……

ＥＮＤ　つづくかもー

しゃくでば！　お見舞い日和後日談（後書き）

ありがとうございました。
もし、今宵、」皆様の夢の中に美鶴が出てきたらぼこぼこにしてあげるとよろしいですよ。

美鶴もきっと喜びます。

しゃくでば！　ちょっとエッチなしゃくでば☆

「しゃくふふふぅ～♪しゃくふふふぅ～～♪」

ゴキンッ！！

「頼むから静かにしてくれ……」

シエラが美鶴を殴った後頭を抑える。

「だってしゃくぅ～♪待ちきれないんしゃくよぉ～♪」

殴られた痛みを感じないほど興奮してんのか。

この馬鹿は。

「何が？」

シエラが覚悟を決めたように美鶴に話しかける。

早く黙って欲しくてたまらないようだ。

「もうこのしゃくでば！もネットに公開されているしゃくね！

ということはもうすぐエロ同人誌が出てもおかしくないはずしゃくぅ～♪」

「でるわけないでしょ……。

全然有名じゃないんだしさ……」

「出るしゃくっ！！絶対！！コレまでの作品でエロ同人誌が出なかった作品はないんしゃくっ！！」

「人の話聞け……」

「というわけで！！
エロ同人誌を描く人が困らないようにカップリングを決めておくしゃくぅ～♪」

そんなもん描く人の自由だろうが。
ちなみに今回俺――波音の出番はないようだ。
な、泣いてなんかいないんだからなっ！！

「というわけでシエラ！！！」

するとシエラは死ぬ直前のヒロインが主人公に優しく……
優しく話しかけるような笑みで

「僕が良いっていうと思う……？」

「もちろんのろんしゃ――」

「ねぇよ！！」

「ひぃぃぃぃぃぃぃっ！！
しゃくっぅぅぅぅぅ！！！！」

美鶴大脱走。

・　・　・

・　・

「メイナー！！」

「……何よ？」

「（省略）というわけなんしゃく！！
お願いしゃ――」

「チッ」

「……しゃく……？」

「……」

「……しゃ……」

「……」

沈黙が痛い。

「……と、とりあえず……
逃げるしゃくっ！！！！」

「詩乃ー！！」

「なんだよ、うっせぇなぁ、クソ顎」

詩乃怖い。

蒼の保護者の詩乃怖い。

「（省略）というわけなんしゃく！！
お願いしゃ――」（コピペ）

「Ｇｅｔ　Ｌｏｓｔ！！（消えうせろ）」

「ひぃぃぃぃやぁぁぁぁあああああああしゃくぅぅぅぅ！！！」

・　・　・　・　・

「こうなったら……最終手段しゃくっ！！！」

おうおう。
最終手段早くないですか。
というかこの作品ってそんなに女キャラ少なかったっけ……。
ちょっとしょぼん。

『ベルカ第一超空制圧艦隊日本帝国本部へ接続します』

「蒼ーー！！（省略）というわけなんしゃく！！
お願いしゃくぅぅぅ！！！
もう君しかいないんしゃくぅぅぅぅぅ！！！！」（途中コピペ）

「えー」

「お願いしゃくぅぅうううう！！！！」

「っていうか……私まだ十四歳なんですけど……」

ロリコンだな。

これでＯＫとかいったら完璧なまでにロリコンだな。

「全然ＯＫしゃくよ！！！
ちょっと今から来て欲しいしゃくぅぅうううう！！！！！」

「分かりましたよー。
だるいですが仕方ないですねぇ……」

え……。

ま、まじで……？

蒼や……こんな奴にやられていいのか……？

「しゃくっ♪しゃくっ♪」

うぜぇ。

ん……？

空が暗い……というか……紫の光が……。

「しゃくっ？
お！！蒼ー！！こっちしゃ――」

バキバキバキッ！！！！

ズズズズグシャッ！！！！！！！

うわっ！？
校舎がっ！！！
ネメシエルが校舎の上に降りてきて美鶴がっ！！
美鶴がっ！！

「しゃ」

しゃあぁあああ　すら言えずに終わった！！
美鶴が二千五百万トンの重さの戦艦に潰されて終わった！！
久しぶりじゃないか、このすがすがしい終わり方。

「こちらベルカ第一超空制圧艦隊旗艦ネメシエル所属の蒼中将です。
作戦完了。
ターゲットの削除に成功しました。
これより帰還します」

こうして今回も無事に平和が守られたのであった。

――――☆アフターすとーりー☆――――

「エロ同人誌でたぞーお前の」

お、俺の出番あった！
それはおいといて俺の右手の先で異様なオーラを出している一冊の本がある。

「やったしゃくっ！！早くみせるしゃくっ！！！」

・

・　・

「出刃先輩とのＢＬ同人誌だ」

「しかも顎超美形……」

シエラとメイナが笑いをこらえながらパラパラと同人誌をめくる。

「つまりはお前の容貌を誰も認めてないってことだな」

俺のとどめの言葉。

「うぅぅうう……。
しゃぁ嗚呼アアアあああああああぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

ＥＮＤ　つづくかも～

←ちなみに美鶴はこんな感じです。

＞ｉ１７３９１―２３４０＜

しゃくでば！　ちょっとエッチなしゃくでば☆（後書き）

ありがとうございました。
美鶴はじめて顔を出しますかね。
どうです？
とんがっているでしょう？

ふふふっ。

しゃくでぼ！　スコーンで頭をスコーン

「あー、数学の時間はあいからわずねみぃなぁ……」

うつらうつらと睡魔と格闘する今日この頃。

隣の実鶴は既に睡魔に完敗している。

「しかも下敷き敷いて寝るなよ。

……なんか俺の机への橋みたいになってるし……。

気味が悪いったらありゃしない」

しかしこのとき永久波音はさらに気味の悪いことに遭遇することになるとは……。

このときまだ誰も気がついていなかった。

「しゃくぅぅぅん……」

でろでろでろ……

「うっげ……よだれたらしてやがる……。

ん？よだれが下敷きを伝って……」

俺の机に領海侵犯。

「――――――――――――ッ！！！！！」（声にならない声）

そしてことごとく美鶴のよだれに侵食される俺の教科書たち。

「て……てんめぇ……」

俺はきちんと抗議&行動に出ることにする。
怒りをこめたシャーペンで美鶴の顎におもっきりブッ刺した。

ブズッ!!ブズッ……ブズッ……ブズッ……（エコー）

「んにぃぃぃぃぃぃぃぃしゃぁああっ!!!!!!!!!!」

同時にチャイムがなった。

・　・　・

「おい!テメェのよだれのせいで俺の机とノートと教科書がぐっちゃぐちゃだろっ!!」

「えー?僕が悪いんしゃくぅ……?」

美鶴はまだ寝ぼけているらしい。
余計に腹がたつ。

「ったりめぇだろ!!
良いからこの机何とかしろカス」

「わかったしゃくょぅ……んもぅ……」

すると美鶴は
ジュルン、ヂュルルル!!と音をたてて……
お、俺の机の上の……

唾液を……
――――ッ！！

「ホラ、これでいいしゃくね」

仕上げにペロペロと俺の机と教科書とノートを舐め回す美鶴。

「おい、シエラ。
俺の机うすく切ってくれ」

「え？
ここで兵器の力使っていいの？」

「非常事態だ。
早くしろ」

「わかったよ……ってこの机臭い！
何があったの！？」

「このクソおろかでう○こな馬鹿顎のせいだよ」

「ま　た　お　前　か。
ってう”っ……」

目は半分白目。
口はポカーン。
そしてよだれがだらぁり。
Ｒ１８規制の実鶴の顔がそこにあった。

「今切るよ。

薄くね」

シエラの右腕が光の刀になり机をうすーく切断する。

「よーし、この切れ端で目を覚ましてやるしよう。
お前の罪はこの板ですべて裁いてやる！」

スコーン！！

「じゃぐっ！！」

殴ってやった。
角で。
微妙に丸いこの角で。
すると

「もう～いったいなぁ。
何するんだよ、波音～」

「「しゃくじゃなくなった！？」」

あ、俺とシエラ被った。

「んぐぅ……」

そしてまた眠りやがった。
ワレリアヌス。
好奇心って大事だと思うんだ。
だ・か・らもう一回殴ってみた。

スコーン！！

「ＳＨＡＷ！！」

変な鳴き声。

「……ってぇなぁ。
おい波音、俺がお前に何かしたか？
ってしたなぁーすまんな！」

「「性格まで変わってる！？」

また被った。
もう一回……ぐらいいいよね？

スコーン！！

「痛いではないかでござるか！！」

はいイミフ。

スコーン！！

「やっぱり痛いにゃぁー……」

きめぇ。

スコーン！！

「その辺にしときなぁ！！」

傭兵みたいでなんかイイ。

スコーン！！

「……」

無言の実鶴も……また……。

ふむ。

スコーン！！

「……」

スコーン！！

「……」

スコーン！！

もうやめて！！

美鶴のライフはゼロよっ！！！！

ＴＳＵ☆ＤＵ☆ＫＵ？

しゃくでば！　スコーンで頭をスコーン（後書き）

ありがとうございました。
今回美鶴ちょっとばかしキモかったですね。

なぐっていいですよ、許可します！
それでは～

しゃくでぱ！　ぱ～や～よいこだねんねしな～♪

「うぅ～ん……」

駄目だ。
眠れない。
夕方コーヒーを飲みすぎたのがいけなかったのか？
何度寝返りをうっても

ゴロンゴロンゴロンゴロンゴロンゴロ……

ガチャッ

「うるさい」

扉が半開きになってシエラが顔をのぞかせた。

「き、聞えてたのかよ。
……寝れないんだよ、仕方ないだろう？」

「え？そうなの？なら僕が一肌脱いであげるよ（性的な意味ではない）
とりあえず電気消すよ」

「へ？」

疑問に思っている俺を横目に電気をパチッと消すシエラ。
そしてシエラは俺の枕元の隣で何か囁いた。

「ジェットストリーム……」

「へ？」

「ジェットストリーム……」

まさかこの展開は……。

「ジェットストリーム……キィィィィン……。
チャーラーチャラララチャーラー♪
遠い地平線が消えて深々とした夜の闇に心を休めるとき……。
はるか雲海の上を音も無く……」

飛び起きた。

「なんでジェットストリームなんだよ！」

（ジェットストリームって何？と思った方はＦＭラジオで夜の十二時になるまでお待ちください。
ニコニコなどで探してみたのですがなかったので……。
すいません。）

「こら波音、おとなしく寝てなさい！」

「あ、すまん。
なんかツッコミ癖が付いてしまってな。
あの美鶴のせいで……。・。・（ノД`）・。・。」

「はるか雲海の（中略）皆様の夜間飛行のお相手のパイロットは
私、Ｆ．Ｄ．シエラです」

はいよく出来ました。

「えーとどれにしようかな……」

そして流すＣＤをあさるシエラ。
ちゃんと眠気を誘うのを頼む。

ピッ！

『Ｈｅｌｐ！！Ｈｅｌｐ！！（ビートルズのアレ）』

「あ、間違えた」

「寝れるかぁあああああああああああああああああっ！！！！！！！！」

・　・　・

「やっぱり絵本だよ、絵本！！
絵本読むの聞いていれば寝れるはず！！」

「じ、じゃぁ頼むぜ？」

「任せろｂ（ぐっ」

あぁ女の子（最終兵器だけど）に絵本を読んでもらいながら寝れるなんて……。

結構幸せ者なんだなぁ、俺。

「むかーしむかし、あるところにシンデレラという少女がいました」

シンデレラか。

なつかしいなぁ……。

「（中略）

この中にガラスの靴をはける人はおりませんかー？

すると長女が『あたしよ、あたし！』といいながら勢いよくガラスの靴をはきました。

しかしかかとが入りません。

『ちょっと待ってください』とお母さん。

長女をつれて奥へ……。

『あんたはガラスの靴をはいてあの王子と結婚するんだよ！

そんなかかと切り落としちまいな！！』

ザシュッ……。

『ぎゃぁぁあああぁあっ！！』」

「おいちょっと色々と待てや」

「えー？

ココからが良い所なのにー！」

「大体それシンデレラじゃねェだろうが！！

何？『本当は怖いグリム童話』ですか？」

「僕はこういうほうが寝れるかとおもっｔ「お前に合わせるなぁぁ

ああああ！！！」

・・・

「ゲームしてやる！」

「あーそれバイオ……」

「ぎゃぁあああああっ！！」

・・・

「ＤＶＤだ、ＤＶＤ！！」

「バカ殿が入ってるよ」

「余計に寝れんわ！」

・・・

「運動してつかれて寝てやる！」

「そーれえいっ！」

バキッ！

「ちょ……そこ……ちが……。
関節……か……か……バキッて……イッタヨ……」

・　・　・

チュンチュン……チチチ……

「あ……朝だ……」

「朝だね……」

「なんか良い感じに眠気が……」

「ぼ、僕も……」

ガクッ……。

☆――あふたーすとーりー――☆

「二人とも？
今日は学校なんだけど……」

「今日は休む……」

「僕も……」

「な、何があったの？
部屋といい……目の下の隈といい……」

メイナ意味が分からず混乱。

つぷぷ

しゃくでぱ！　ぼ～や～よいこだねんねしな～♪（後書き）

ありがとうございました。
ジェットストリームしってるお方いますか？

夜十二時からやるラジオなのですが・・・。
分からなかったらごめんなさい。

それでは

しゃくでば！　羞恥心　～鬼灯家の場合～

『太郎さん……わたし……妊娠しちゃってるの……』

『嘘よっ！！
　このクソ尼！！いつ私の太郎さんを……』

こういうのは俺苦手なんだがな……。
ナレーションとして一応の役目だけは果たしておかないと。

「やっぱりローマの夜よりこういうドロドロした昼ドラがいいですよねー」

蒼がテレビをつつきながら隣にいる詩乃に笑顔で振り向く。

「あぁ、イケメンだけじゃさっぱり売れないからなー」

詩乃はポッキー片手にマンガを読破中。
周りにベルリンの壁のようにマンガがつまれている。

「というか詩乃姉様、この部屋冷房効いてなくないですか……？」

「そういえば何か暑いなぁって思ってたんだよね。
　壊れてんのかなぁ……？」

そして詩乃はヴィンヴィン怪しい音を上げているエアコンの元へと近づいた。
しかし……

「あづいじゃぐぅ～～……」

もうこの語尾で分かるだろう。
そう我らが美鶴である。

「わわっ！！どうしてここにいるんですか！？」

「おっと、ストップ蒼落ち着け。
ネメシエルの砲台をこの部屋に向けるのだけはやめろ」

「――ッ！
うっかりしてました……」

窓の外には『超空要塞戦艦ネメシエル』の莫大な数の砲門がこちらをにらみつけていた。
蒼……お前……もしかして力制御できてないのか？
そんなことはどうでもいいとして
蒼の隣にいきなりテレポーテーションしてきたかのように美鶴がいた。

「どうしてって前回僕の出番がなかったからしゃく！！
全然なかったからしゃく！！」

「もしかして、前回と全然かけました？」

「違うしゃくよ！！もう！！
それはさておき、もう僕は決めたんしゃく。
無理にでも登場して出番を増やしてやるしゃく！！」

美鶴は唾を飛ばして猛主張。

顔がウザイ。

「こんな出番に必死な主人公見たことないですよ……」

「出て行けって言っても無理しゃくょっ！！
意地でも出て行かないしゃくっ！！」

ぷんぷんしゃくっとか言いながらドスンと部屋の真ん中に胡坐をかいて座る顎。

「あー……こりゃ修理屋呼ばないとだめかなぁ……。
蒼ー、電話しといてくれる？」

「あ、はーい」

とことこと電話のところに歩いていく。
その後ろに

「大体この作品の主人公は僕なんしゃくよ？
僕を出さないほうがそもそもこの作品に対する冒涜だとおもうんしゃくよ！
あとお前らガードが固すぎなんしゃく！！
少しはパンチラだのブラだの読者サービスを……」

「ちょっと！！」「しゃくっ！？」

「電話するから静かにしていてくれませんか？」

「あ……はいしゃく」

あまりの迫力に押し黙ってしまった。
珍しいな。

「あ、すいません。
えあーこんでんしょな？の修理を頼みたいんですが……」

エアーコンディショナーっていえないんだな、蒼。
まぁ仕方ないっちゃ仕方ないか。
戦艦として生きてきたんだもんな。（ほろり）

「……」

「はい、はい、分かりました」

「……しゃくっ……」

「あぁ、それで構わないです。
はい、ではお願いしまーす」

ガチャッ。
蒼が電話機を静かにおいた瞬間再び美鶴が口をしゃくしゃくと開いた。

「終わったしゃく？
なら続きを――」

意気揚々としている美鶴を蹴り上げるかのようにしゃべろうとする美鶴を無視して
蒼はポッキーをかじっている詩乃の元へ全速前進。

「詩乃姉様、修理の人が来るまで一時間はかかるそうですよー…」

「あちゃー困ったな。
これは最終兵器の扇風機を使うしかないみたいだね」

「あ、私取って来ますね♪」

「え？いいの？
じゃあよろしく頼むわ。
場所は……」

「な、何か気まずくなってきたしゃくぅ……。
で、でも！
僕はそれでもめげないしゃくよぉ！！」

そして鼻歌を歌っている蒼の元へと駆けた。

・　・　・

「えーっと、この下の……」

「そもそも主人公というものは作品の中で中心的な存在で……」

「あ！あった！」

ごそごそしている蒼に後ろから話しかけているが華麗にスルーされている。

「毎回必ず登場していなくてはいけないものなんしゃくよ！」

それはちょっと違うんじゃなかろうか。

「ちょっと！
　そこ邪魔です！！」

蒼が右手を鉄砲の形にして美鶴に向けると壁に小さな穴を開けて赤いレーザーが美鶴の額をぶち抜いた。

「じゃがっ！！」

でこからぴゅーと血を吹いてどさっと倒れる。

「まったくもうッ……」

そして扇風機をもって押入れを後にする蒼を見て美鶴は額にバッテンの絆創膏を貼りながら考えた。

「なんだか……すごいむなしいし恥ずかしいし気まずくなってきたしゃくぅ……」

そして脳裏によみがえる彼女の言葉。

『ちょっと！！
　そこ邪魔です！！』

「うぅ……うぅぅう……」

しゃぁぁぁあああああああああ……

たったったったっ（走り去る音）

ちゅぢゅきゅかも～

しゃくでば！　羞恥心　～鬼灯家の場合～（後書き）

別に続きません（キリッ

ご愛読感謝感謝です。

ありがとうございました。

しゃくでば！　羞恥心　～永久家の場合～

「あ～、メイナ。
ご飯お代わりよろしく」

「はい」

「お～さんきゅ」

ここ俺、永久家ではいつもどおりの夕食をとっていた。
肉を頬張り、ＴＶを眺める。

「僕もお代わりしゃくっ！」

「ブフォ！？」

いつもどおりじゃなかった。
美鶴だよ……おいおいおいおいおいおいおいおいおい。

「な……なんで……ゲホッ！
お前が……ゲホゲホッ！！
ここにいるんだってゲフホァッ！」

水！
水！！

「僕、この頃出番がないしゃく……。
だからっ！！」

バンっと机を叩く。

「ちょっと！
机叩かないでよ！
壊れやすいんだから」

シエラが美鶴を睨みつける。

「あ、ごめんしゃく…じゃなくてっ！！
僕は決めたんしゃくっ！！
無理にでも登場して出番を増やしてやるしゃくッ！！」

「……は？」

何言ってるんだこいつ。

「とめても無駄しゃくよ？
僕のこの硬い硬い決心は誰にもまけないしゃくっ！！」

「……は？」

マジで大丈夫かこいつ。
それにそんなこと言ってるとシエラ辺りが……。

『フ〇タくぅ～ん、どうだいぃ、今夜ぁ？
や・ら・な・い・か？』

『えぇっ！？
ア〇ゴくーん？
そ……それはボクに妻子がいることを知っていてのことかぃ！？』

「ナハハハハッ！！！」

「っておい！
美鶴を追い出すなり蹴りだすなりぶっ飛ばすなり
レーザーで蒲焼にするなりなんかしろよ！」

「もぅ、僕今日疲れちった」

「ホラホラ、波音も一緒に見ようよ！
サ○エさんＶＳア○ゴさんだよ！！」

Ｗｈａｔ？
なんだよそれ最近のサ○エさんおかしくね？

『マ○オさんは……渡さないっ！！』

『フハハハハ！！おぉもしろぉぃ！！
何秒間耐えれるか数えてやろぉぅ……』

『サ○エスパーク！！』　『ぬぅるぃわぁぁあぁぁ！！！』

「「おぉぉぉおお！！」

最終兵器姉妹の趣味がだんだん分からなくなってきた。
というかココまで突っ込みどころ満載だと
逆にどこから突っ込めば良いのか分からない。
俺もう突っ込み放棄してもいいだろうか。

「あ、あのーしゃく……」

『ぶるぁぁぁぁあぁあああ！！！』

『これが……愛の力よっ！！』

「あー！今週のサ〇エさんも面白かったー！」

メイナが目に涙をためながら欠伸をして伸びる。

「終わったしゃく？
なら話をーーーー」

「あ！そだ！
お隣の田所さんからとうもろこし御裾分けしてもらったんだ」

ごそごそと倉庫から沢山のとうもろこしを引っ張り出してきて新聞紙をごそごそする。

「え？まじ？」

とうもろこしかぁ。
久方だな。

「わー♪
はやく蒸かそうよ！」

メイナの目が既にとうもろこしな件。

「（くっ……今回はそうは行かないしゃくっ！！
奴らの行動に溶け込んでやるしゃくッ！！）」

とうもろこしは醤油をつけて焼くのが定番だ。
まぁ蒸かしてもいいんだが。
甘いしうまい。
最高だよな、とうもろこし。

「僕も欲しいしゃくー♪」

「……は？
ないよ？」

シエラの声つめたっ！

「……え？しゃく……」

「当たり前じゃん。
これは僕と姉さんと波音にくれたものなんだから。
部外者であるお前にはなくて当然」

「しゃ……しゃ……」

お。
泣くぞ、泣くぞ。

しゃぁぁあぁぁあぁぁぁぁ……

タッタッタッ……

ってかこの落ち久しぶりだな。
やっぱりこの落ち最高。

「ホント綺麗に涙流れるねぇ……」

メイナ、とうもろこしはまだ焼けてないぞ。
置け。

～☆あふたーすとーりー☆～

「あ、一個あまった」

「あ、私はいらないから」

シエラのとうもろこしをじっと見つめる俺。

「……やるか？」

マンガの悪役のような顔をして捨て台詞を吐く。

「……いいよ？」

バカめ、承諾したときがお前の運のつきだ。

「「せーのっ！」

「じゃんけん！！」

「ぽん！！」

「ひゃあぁぁ！！
負けたぁぁっ！！
僕がっ……負けたッ……！」

「ノリが悪かったなぁ……（キラーン）」

「うぅ……なんでチョキなんて出したんだろう……」

『来週もまた見てくださいねー♪
じゃん！けん！ぽん！！』

「あ、波音！
サ○エさんに勝ったからそれ僕の！！」

「なんでそうなる！！」

『うふふふふ♪』

シエラとサ○エさんの声が重なって……

「こえぇぇよっ！！」

続くかも～

しゃくでば！　羞恥心　～永久家の場合～（後書き）

あじゃしたー！
いやねぇ。
ご飯中にどうなの、美鶴って。
頭痛くなるわ、ほんと。
なんだろうな、あいつは。

ふと疑問に思ふ。

「お前って体操服もってんのか？」

「フッ！
持ってるしゃくよ？」

えっ。

「な、なんだ。
いつものその変な紳士服着てるから持ってないかと思ったぜ。
次は都合よく体育だし」

えっと三時間目……。
うん体育だ。
だりぃなぁおい。

「ちなみにしゃく。
この紳士服は僕のポゥリスィーしゃくっ！！」

「るっさい！！
唾こっちに飛ばすな、カス！」

おぉ、レーザーが頭を正確に射抜いたぞ。
流石だな、シエラ。

「死ぬ……しゃく……」

「人として死んどけ」

・　・　・

ピーン！

「ヤバイ、なんだこの気配は。
波音気をつけて！」

俺の前に右腕を張るシエラ。
なんだ、何があるってんだ？

「シエラ落ち着け。
なんだ、何があるんだ？」

「あ……この方向はグラウンド……。
次の波音達の体育の場所だ」

なん……だと？

「は？
んな所にヤバイ気配のやつが？」

「大丈夫。
あなたは死なないわ。
僕が守るもの」

「それ本物に言われてみたかったわ」

ペチィン！

「いっつっ！」

背中に完璧に跡できたはず……。

赤い跡が……。

・　・　・

「！？

人が倒れてる！？

おい！！大丈夫か！！」

シエラと玄関で別れたのはいいとして

一人になった瞬間とっても不安になってきた。

あーやだなー。

ネメシエルとかあったらそれに乗りたい気分だ。

そう思いながら倒れている男子生徒に駆け寄る。

「おい！

しっかりしろ！！

おいっ！！」

「あ……ああ……」

声かすれてるじゃんよー。

なんなんだよー。

「……すまねぇ……。
俺はもう……ここまでのようだ……」

おう。

「いや、いやあんた初対面ですよね？
同じクラスだとしても」

「くっ……娘に……人目だけでも……。
あ、会いたかっ……た……ガハッ！！」

「いや、あんた高校生だしその歳で子供いたら問題だよ！
ってか何血ぃ吐いてんだよ！！」

持ち前のつっこみ気質が……。

「ヤツは……やべぇ。
に、人間を……超越……してやがっ……ハァハァ……るぜっ！！」

「何？
そんなにやばいの？」

「腕がなるぜぇ……」

うわっシエラいつのまに湧き出てきた。
気がつかなかったぞい。

「愛国者……は……らりるれ……ろ……」

わけわからん。
特に最後。
最後の言葉を娘にするべきだったんとちゃいまっか。

「とりあえず行けば分かるでしょ！
ほら行くよ！」

「胃が……重い……」

・　・　・

「な……！？
あれは……？」

そうヤバイ気配……。
その中心に美鶴が立っていた。
体操服の姿で。
体操服の姿で。
体操服の姿で！？

「ってその体操服は違うだろぉおぉおぉお！！！」

そう美鶴の体操服は学校のものではない。
美鶴の半袖のシャツには『１－Ｄ　灼場山』と書かれており
下半身はブルマで『１－Ｄ　みつる』と書かれていた。

「あかん。

もう突っ込みきれん。
シエラ！
なんとかならな……」

振り向いた俺は目を疑った。
俺の脳はおかしくなってしまったというのか。
なんとシエラの頭から湯気とパイプのポッポーという音が出ていた。
そしてそのままの姿勢で……。

「ガガガ……初期化を実行しています……」

バタン。

「Ｎｏｏｏｏｏｏｏｏ！！
シメ役が倒れたぁぁぁ！？
ってか美鶴！！
なんだよ、その変態的コスプレ！！
キモ男の女装を超えてるぞ！！！」

「何しゃく！！
これは僕のポリシーしゃくっ！！
それに見ろしゃくっ！！
こいつらは僕の魅力に耐え切れずに倒れたしゃくッ！！
どぅしぁく？
これが僕の力なんしゃくよぉ？」

ガンジーでも助走つけて蹴りいれるレベル。
きめぇの領域を超えている。
そうだな。
牛乳とオレンジジュース混ぜるだろ？

そしたら玉が出来るんだ。
それなんでか知ってるか？
それは牛乳の蛋白質が……。

「波音聞いてるしゃく？」

牛乳の蛋白質が……。

「波音？
おーいしゃくっ！
ほれほれ、ブルマしゃくよ？」

ぎ、牛乳の……。

「波音も僕の魅力に耐え切れずに倒れるしゃくかぁ？
そのおにゃのこのように？」

ぎ、ぎゅ……。

チッ（舌打ち）

「今回ばかりはもう無理。
俺限界」

「しゃく？」

「行くぞ？
お祈りは終わったか？」

「しゃくっ！！

何するしゃ……」

しゃぁぁあああぁぁああああぁぁぁぁ……

「よっわっ！」

俺、五秒でパーフェクト勝利。

続くかもー

しゃくでば！　は？至高はブルマだろＪＫ（後書き）

お食事中の方がいらっしゃったらごめんなさい。
えぇ、本当に。

ね、気持ち悪いのをお見せしてしまいましたね。
愛国者はらりるれろは某ステルスゲームです。
金属の歯車さんです。

それでは、どうもありがとうございました。

しゃくでぱ！　れっつにゃんにゃん大作戦！

とある日の放課後……。

「シエラッ！！
　コレをよく見るしゃくっ！！」

美鶴が手にコインを持ってまたまた仁王立ちをしていた。

「ん？」

もすもすとパンをかじっていたシエラが仕方無しに美鶴を見る。
そのシエラをドヤ顔で見下ろした後

ピーン……、くるくる……、パシッ！！

「裏しゃく？
　表しゃく？」

拳を突き出してふんぬと鼻息を吐いた。

「表」

再びもすもすとパンをかじりだすシエラに一言。
お前今見てなかっただろ、やる気ないだろ。

「ざぁんねぇんでしたっ♪
　裏しゃぁぁくっ♪」

「わかったからそのドナルドがキチガイになったみたいな顔やめて」

「しゃくぅ……」

うわ落ち込んだ。
こいつも落ち込むのか。

・　・　・

「とゆーわけで、シエラには罰げぇむをうけてもらうしゃくぅ☆」

何この立ち直りの早さ。
→では・三つで表してたけど目の前だと約2秒で立ち直ったからな、こいつ。

「はぁ？」

「今から語尾に　にゃあをつけるしゃくぅ♪
さっそくスタートしゃくぅっ♪」

うわーひくわーみたいな顔をしてかじり終えたパンのゴミを放り投げる。
そのままため息を一つついて

「あ……あー……やればいいんだろ？
やれば……【にゃあ】」

！？

教室が静まり返った。

「おい……いま猫の鳴き声しなかったか？」

同級生が次第に騒ぎ始める。

「えー！？どこどこ！？」

「学校の中に入ってきたんじゃね？
俺猫アレルギーだから意味ないけど」

「探そ探そ！
ねこちゃ～ん♪」

「おい、波音！
手伝えよ、探すの」

「眠いから却下」

こいつ……こんなに猫の鳴き声うまかったのか？
俺も目の前にシエラがいなかったら完璧に同級生と一緒に探してるぞ、猫。

「んんんもぅっ！！！
そんなんじゃないしゃくよっ！！
今から僕がお手本みせたるしゃくっ！！」

すると美鶴はポケットから猫耳を取り出しつけた。
猫のような座り方をした後

「んにゃ～んしゃくぅんにゃぁ～んしゃくぅ♪
ご主人様ぁ私に何か出来ることはありますかにゃあしゃくぅ？
にゃぁんしゃくぅ☆
あっ、そ、そんなところ触っちゃだめですにゃぁしゃくぅ♪
あ……あんしゃ（ピーーーーーーーーーー）
（ピーーーーーーーーーー）
（ピーーーーーーーーーー）」

おうふっ。
ナレーターの俺でもこれは無理逃げる。
じゃ！

「どうしゃく？
これがお手本しゃくっ！！
さぁシエラも……」

和気藹々として振り返った美鶴の目には誰一人いない教室が残っていた。
みんなさっさと帰ったようだ。（一部トイレ）
しかも教室の隅には哀愁漂うＢＧＭを流しているラジカセが……。
誰かがセットしたようだ。
このクラスの奴ら段々分かってきたな。

「うぅっ……うぅぅ……しゃくっ……しゃくぅぅぅぅ……。
うぅ……うぅぅ……」

えーと、とりあえずこれ以上続けても何もなさそうなので……。

つづくかも～

バリッ（紙が破れた音）

「まだおわってないしゃくっ！！
まだオチてないしゃくっ！！！」

しつけぇｗｗｗ
十分にオチついてる。
大丈夫、心配するな。

「とにかく……今回は何とかしてこの僕がこの話をオチさせてやるしゃくっ！！」

まだ無駄なことを……。

「う～ん……しゃくぅ……」

手を組んで目をつぶって考え始める美鶴。
無駄だろ、絶対に。

・　・　・

（二十分後）

「んぐぉぉぉぁぉ……」

もしもーし。

「ハッ！！
ね、寝てなんてないしゃくよっ！！
今ひらめいたしゃくっ！！」

ほう……なら見せてもらうか？

「了解しゃくっ！！」

アンテナ付き携帯を取り出して通話ボタンを押した。

ＰＬＬ……ＰＬＬ……ＰＬＬ……

「蒼ー！実はつづくかもー（強制終了）

「ん……？
今何か聞えたような……」

しゃくでぼ！　れっつにゃんにゃん大作戦！（後書き）

なぁボブ、教えてくれよ
ＨＡＨＡＨＡどうしたんだい、ねしゃ君
どうして美鶴はこうきもいんだい？
ＨＡＨＡＨＡＨＡそんなことも分からないのかい？
そうなんだ、分からないんだ。
俺もしらねェよ。
ですよね。

ありがとうございました。

しゃくでぱ！　家族っていいね、いいねっ！！

「波音～！
　いっしょに帰ろうしゃくー♪」

だりい。

「だが断る。
　悪いな」

鞄を持ち上げさっさと帰る――もとい逃げる準備をする俺。
その俺の後ろでなにやら金属音が……。

「？」

なんだ、なんかどこからか悲しい音楽が……。

『あーあぁぁーるーるーるー♪』

「しゃくしゃくしゃくしゃく……」

な、泣いてる……。
泣いてるぞ、美鶴が。
仕方ねェな。

「だー！分かった、分かった。
　一緒に帰るから教室の隅で哀愁誘う曲流しながら体操座りで落ち込むなって！
　ようは一緒に帰ればいいんだろう？

分かった、帰る、帰るよ」

「ホントしゃくっ！？
わーいしゃくぅ～♪
わーいしゃくぅっ☆」

うぜぇ……。

・　・　・

「……」

視線を感じる。

「……しゃく……」

「……」

「……しゃくっ……♪」

「な、何見てんだよ……」

熱い（暑い？）視線に耐えることが出来ずにとうとう話しかけてしまう俺。
なんと哀れな俺。

「うふっ♪
しゃくっ♪」

ぞくっとした。
近年稀に見るぞくっとくるレベルＭＡＸだ。

「ひぃぃっ！」

声も漏れた。
これは仕方ないだろう。

「波音が隣にいてくれるだけでし・あ・わ・せしゃくっ☆」

帰りたい！！
マジで帰りたい！！
ダッシュさせろ、ダッシュで帰らさせろ！！
かえってあいつらの顔が拝みたい！！

・　・　・

「おっ♪俺の家こっちだからな！じゃぁなー♪」

やった！！
帰れる！！
この拷問的時間からようやく開放されるっ！！
きゃっほうぅ！！

がしっ。

「なん……だと？」

美鶴が俺の……。
俺の制服を掴んで……る……。
うわああっ。

「僕の家に来るしゃくっ！！」

「は？何言ってんだ。
もう夕方だし宿題もしなきゃいｋ」

『るーるーるーあーあーああー♪』

「わかったわかった……」

何、俺何か悪いことしましたか神様。
昨日柿ピーのピリ辛の方のヤツだけくってピーナッツだけ残してシエラ半泣きにさせたからか？

・　・　・

「ついたしゃくっ！！」

あーうん。
なるほど。
河原に黄色い色が剥げ落ちたテントがそこにあった。
中をちらっと覗くと

「くさっ！

コノヘヤニオウヨ！？」

美鶴汁の臭いだ。
美鶴汁って説明しましたよね、そういえば。
したっけ？
してないか。
仕方ない、説明しようかな。
美鶴汁ってのはな、あれだ。
分かるだろ？
何か美鶴が興奮すると顎からにゅるにゅると噴出される謎の液体Ｘだ。
分かる？
それの臭いがするんだ、このテント。
つまり美鶴がこのテントで興奮してたってことに……。

「ってかなんだこのエロ本の山は……」

そこら辺に捨ててある昔のエロ本の山がそこにあった。
どれもずいぶんぬれて……ん？

「そうか、美鶴汁は読みどおりこのためか。
ッておい、美鶴。
なんで布団二つも引いてるんだよ」

「今日は二人で泊まるしゃくっ♪」

は？
え……。

「い、いやだぁあああっ！！！！」

俺は走った。
ひたすら走った。
待つしゃくっ！！とか聞えてきたけど無視した！
なんだよあいつ。
だんだんホモになってきてないか？

「友達ってのはお泊り会とかするもんじゃないんしゃくかぁあぁあ！？」

・　・　・

家のドアを思いっきりキックして転がり込んだ。
外れたドアを立て直して鍵をかける。

「はぁ……はぁ……」

夏というのもあってか体中から汗が。

「あ、お帰りー波音。
どしたの？
汗だくだくでぜぇぜぇ言ってるし」

し、シエラだ。
我が家だ！

「お……おぉ……」

我が家だ。
家族だ……みんながいる……。

「やっぱり我が家は最高だよぅ！！
うぇーーん！！」

涙が出てきた。
シエラに抱きついた。

「ふぇっ！？
ホント何があったの！？
と、とりあえずよーしよーし……」

・　・　・

河原に焚き火の音が響く。

「今日も一人で焼き魚しゃくか……。
はぁ……」

美鶴は魚の内臓を取らずにかじりついた。
ただ取り方が分からないからしい。

「今日の魚はしょっぱいしゃくぅ……。
な、泣いてなんか……っ！
泣いてなんかいないんしゃくからねっ！！」

『あーあーあぁあ～♪

るーるるーるるーるーー♪』

つづくかも～

しゃくでば！　家族っていいね、いいねっ！！（後書き）

美鶴っ！
がんばれっ（ぐっ

ありがとうございました。

しゃくでば！　お誕生日

「三月二十六日は何の日かわかるしゃく？」

のんびりしたお昼休み。
美鶴が教壇の上でクラス全員に呼び掛けた。
クラス中が静まる。

「帝国憲法記念日？」

シエラがメロンパンの空き袋ゴミ箱に
丸め捨てながら答えた。

「違うしゃくっ！」

「じゃああれ？
あれでしょ、あれ」

「そうそう。
よく考えるしゃく」

三月二十六日って明日だよな？
何の日？

「海の日？」

「そんだけ考えてそれしゃくかぁ！？
三月って言ってるしゃく！」

え、海の日違うのか。
じゃあわかんね。

「だぁぁれもわからないしゃくかぁ！？」

ふんぬと鼻の穴を広げつつ美鶴はクラスを見下ろした。
知らんもんは知らんもん。

「仕方ない、答えしゃく……。
三月二十六日。
３２６。
美鶴しゃく」

はぁ。

「で？」

シエラはどーでもいいと言ったように
野菜ジュースをすすった。
俺はお茶でご飯を流し込んだ。

「つまり明日は僕の誕生日なんしゃくよ！」

はぁ。

「……で？」

俺は美鶴に次を言うように促した。
どうぞ。
次、どうぞ。

「だから僕の家でお誕生日おめでとうパーティーを開くしゃくっ！
是非来てほしいしゃくっ！
特に波音は絶対に」

持ってたアリル特性お弁当を落としそうになった。
な、なんだってー！
クラス全員のドンマイという目哀れみの目が痛い。
名指しかよ。

「パーティーに参加するのは自由しゃく！
ただし条件があるしゃく！」

条件？
どーせろくでもないんだろ。
パンツ見せろとか。
美鶴がまともな条件を提示するわけがない。

「プレゼントを持って来てほしいしゃく！
波音はいいしゃくよ？」
いつもお世話になってるからしゃくっ！」

はぁそりゃありがとうね。
それに思った以上に当然の条件だった。
ほう。
いつに無く本気だというアピールか。

「明日は土曜日で学校は休み。
絶好のパーティー日和しゃく！
パーティーは夕方四時から始めるしゃくからそれまでに集まって

ほしいしゃくっ！
以上しゃくっ！」

・　・　・

「マジかよ……」

とぼとぼと坂道を歩いて帰る。

「ドンマイだねぇ」

詩乃が笑いながら俺の背中を叩いた。

「なぁ詩乃。
お前、行く？」

「面白そうだし行くこうかな」

詩乃はやんわり髪をいじりながら答えた。

「シエラとメイナは？」

俺と詩乃の後ろを歩く最終兵器姉妹に尋ねた。こいつらが行くわけない。
わけない。
わけないよ。

「私達は行くことにするわ」

メイナが頷きながら答えた。

「え？」

なんだ聞き間違いか。
うん、きっとそうだ。

「シエラ行くの？」

「行く」

シエラがこくんとメイナと同じように頷いた。
なんやねんもー！
いくんかい。

「わかった。
俺も覚悟決めた。
行くわ」

ため息のネタがまたひとつ増えた。

「なら私の家で会議だね」

詩乃が夕日に目を細目ながら言う。
何か企んでやがるなこいつ。

・　・　・

「蒼、ただいま～」

詩乃が玄関で靴を脱ぎ捨てる。

「詩乃姉様！
おかえりなさいっ！」

白いワンピースに身を包んだ蒼が詩乃に飛び付いた。
ワンコみたいで可愛い。

「ただいま、ただいま」

詩乃は蒼の頭を撫でながら俺達に

「入って入って」

そう言った。

「遠慮なく。
邪魔するぜー」

綺麗に靴を脱いで居間まで歩く。
ドアを開けるとなんともまぁ広い居間があった。

「皆さんお揃いでどうしたんですか？」

蒼が頭に？を浮かべながら聞いてくる。
とりあえず頭をなでなでしてこたつに入った。

「うぅー、やっぱりこれだねぇ」

メイナはこたつで丸くなる。
猫かって。
ぱたぱたとキッチンから人数分の紅茶とお菓子を持って来た蒼になんで来たのか説明する。

「なるほど。
つまり明日はクソ顎の誕生日なんですね」

「そそ」

少量の砂糖を入れ紅茶を啜る。
おいし。

「で、美鶴のプレゼントを考えるために集まったわけ」

シエラは紅茶の中にどばどば砂糖を突っ込みながら付け足した。
入れすぎだおまえ色変わってんじゃんほらもー。

「さって会議といきますか！」

詩乃はどこからかホワイトボードを引っ張り出してくるとマジックでかでかと

『美鶴をなんとしてでも喜ばしたろ企画』

とでっかく書いた。

「スペースなくね？」

「うん、私も今書いてから思った。
とにかく誕生日ぐらいはあの美鶴といえど祝ったらなきゃ可哀想。
いつものスカート捲りとかの悪事は許して真剣にプレゼントを考えようと思う次第。
議長であり最終決定者、そして最高権力者は私鬼灯詩乃が承ります」

色々と総舐めすんな。
まぁとりあえず俺はプレゼントいいらしいから
お前らでがんばって考えてくれたまえ。
俺は机に突っ伏した。
眠い。
ほっぺたを肘に乗せてだらけた姿勢で会議を眺める。

「喜ばす……ねぇ。
私あんまりいい思い出ないんだよねぇ……」

メイナが頭に手を押さえながらぼやく。
俺もない。

「で――――」

お、議長にして最高権力者の意見か。

「――何から話す？」

ちょ、おま。
考えとけ。

「シエラ何か意見ない？」

「ぼ、僕！？
えーと……ない」

「メイナは？」

「ないわ」

「あ、蒼……」

「私……えーと……。
ごめんなさい姉様」

「……」

難航してますな。

「は、波音！
あんたはないわけ！？」

「何で俺に降るんだよそこで。
えー？
プレゼントだろ？
喜ばすには美鶴の好きな物あげればいいんじゃねぇの？
心を込めたもの渡せば美鶴も喜んでくれるだろ。
別に美鶴が好きなものじゃないとしても」

「ということだ。
各自行動開始！」

会議短っ！！

「美鶴の好きな物……。
エロ本？」

シエラ落ち着け、落ち着くんだ。
そっち方向に広げるのはまずい。

「私何にしようかなっ♪」

メイナは案外余裕なんだな。
期待だ。

「カップヌードルとかでいいか」

ひでぇ。
詩乃さんそれはひでぇっす。

「ミサイル？」

蒼……。
お前もう……。
なんていえばいいんだよ……。
この後俺達は詩乃の家に泊まりこみ
明日のプレゼントを考えたのであった。
ついでに愚痴らしてもらう。
俺寝るとき廊下だった。
寒い中毛布一枚しか貰えずいくら床暖房だからってひどすぎる。

「何か危なくない？」

メイナめぇ……。

「あー確かに。
昔からの付き合いから考えると
こいつこんな顔して案外すけべえだからね」

詩乃も詩乃だ。
ひどい。

「蒼もいることだし。
波音ごめんね☆
今日は廊下で寝てね☆」

うぅうう……。
これも美鶴のせいだっ！

・　・　・

（翌日午後四時）

「今日は集まってくれてありがとうしゃくっっ！！」

マイクを握り小指を立てながら美鶴がはしゃぐ。
頭には変なキラキラした帽子を被ってるし
『俺が主役』と書いてあるたすきをかけている。
のりのりじゃな。

美鶴のお義母さんが

「皆プレゼントを持ってきてくれるし……。
本当にごめんなさいね、みなさん。
美鶴がわがまま言ったみたいで……」

俺達に頭を下げた。

「いえいえ。
美鶴君の誕生日なので。
だいじょうぶですよ、おばさん」

「じゃあ私は引っ込みます。
美鶴をどうかよろしくお願いするわね」

「はい」

美鶴のお義母さんは目にきらりと嬉し涙を光らせながら部屋から出て行った。

「今日は……
波音とシエラとメイナと詩乃と蒼と出刃先輩があつまってくれたしゃくね！？
本当に本当にありがとうしゃくっ！！
早速プレゼントを開けようと思うしゃくっ！！」

美鶴は目の前に積まれた俺達のプレゼントに手を伸ばした。
俺達って言ったけど俺のは入ってないぞ。

「この赤色の箱は誰しゃく？」

「あ、それ僕だ」

「シエラしゃくか！！
うわぁありがとうしゃくっ！！」

美鶴は本当に満面の笑みでシエラのプレゼントのリボンを解いた。

「案外軽いしゃくねぇ……。
おーぷんざせさみーしゃくっ！！」

赤い箱が美鶴の手により開けられる。
中にはきらっと輝く……百円玉が……。

「な、なぁんしゃくかこれ……」

「ん？
百円。
ジュースでも買って」

美鶴の笑み率ががくんと下がった。

「百円って……。
だ、だいじょうぶしゃく！
まだたくさんプレゼントは残っているしゃくからね！
シエラありがとうしゃくっ！
次行くしゃくっ！！」

「別にいい、お礼なんて」

確かにお礼に値することなんてお前してないもんな、シエラさんや。
ちなみに俺が寝ている間に詩乃達はプレゼントを包んだみたいで
中身は一切知らないんだ。
だから俺も少しわくわくしてたりする。
美鶴はシエラからのプレゼントを横に奥と
白い長方形の箱に手を伸ばした。

「あ、それ私のだ」

メイナだ。
結構でかいな。

「おっ、重たいしゃくっ！
これは期待できそうしゃくっ！！
ではおーぷんざせさみーしゃくっ！！」

包み紙をビリビリと破り中をのぞく。
おぉ、ロールケーキか。

「うわぁっ、おいしそうしゃくっ！！
メイナありがとうしゃくっ！！」

「メイナさん特製のスーパーあまあまロールケーキだよ。
賞味期限近いから早く食べてね」

おい今何つった。
メイナさん『特製』って言わなかったか？

「め、メイナが作ったんしゃくか？」

「そうだよ？
がんばったんだからちゃんと食べてね☆」

満面の笑み。

「そ、そうしゃく……か。
あ、ありがとうしゃく……」

美鶴死亡のお知らせ。
メイナ、お前はそろそろ自分の料理が
殺人兵器だということを自覚したほうが良いかもしれない。

「つ、次は……」

「あ、私のだ」

紫の箱。
そこに綺麗な色のリボンが付いている。

「詩乃しゃくか！
よかったしゃくっ！！」

「なにそれ、どういう意味？」

シエラが食いつく。

「い、いや深い意味は……。
とにかくおぷせさしゃくっ！！」

美鶴はわくわくした顔でリボンを解く。

そして箱の蓋を開けた。

「な……」

そして箱を見て絶句してしまった。

何何？

何が入ってたんだ？

俺は横から覗き見した。

「ぶふっ！」

草ってお前、石ってお前。

そして落ち込みまくる美鶴。

気の毒すぎてかける言葉が見つからない。

「美鶴が喜ぶかなーって。
悪意はないよ♪」

いや嘘付け！

お前悪意の塊じゃねーかよこれ！！

「まぁ美鶴落ち込むなでっぱ。
俺のプレゼントを開けてみるでっぱ」

出刃先輩ちーす。

久しぶりの出番おめでとうございます。

「せ、先輩っ――！

おーぷんざせさ――おぉぉおおおしゃく！！！！！」

「最高峰のものでっぱ。
喜んでもらえると嬉しいでっぱ」

美鶴が神々しい光とともにケバイピンクの箱から取り出したもの。
十八歳にならないと買えない薄くて高い本だ。

『堕ちた巨乳美人教師』

oh……。

「先輩……」

「美鶴……」

きらきらきらきらきら。
薔薇ぶわわっ。

「本当にありがとうしゃくっ……」

キラキラシャボン追加。

「全然いいでっぱ……。
喜んでくれてうれしいでっぱ……」

あははうふふモード突入。

「蒼、見ちゃ駄目だからね」

目をつぶった詩乃が蒼の目を後ろから押さえる。
シエラとメイナも目と耳を塞いでいる。

俺も目をつぶりたいけど物語のナレーション的立ち居地だから見なきゃいけない。
誰か代われごるぁ。

「先輩ーーー！！
大好きしゃくぅぅぅぅぅっ！！！」

うっぷ、はきそう。
美鶴抱きつくし、先輩に。
先輩は先輩で美鶴受け入れるし。
もうやだこいつら二人。
もうプレゼントは全部か……ん？

「おい、美鶴後一個残ってるぞ」

あはうふモードの美鶴を蹴っ飛ばして現実に引き戻す。

「本当しゃくね？
青色だし蒼からのプレゼントしゃくね」

腰を抑えながら美鶴は蒼のプレゼントに手をかけた。

「さ、開けるしゃくよ。
蒼ありがとうしゃく！」

「けっこう作るの大変でした。
大事にしてくださいね？」

詩乃に目を塞がれながら蒼が美鶴に言った。

「オイお前らもういいぞ」

「あ、終わった？」

「おう」

「いっくしゃくよーっ！！
おぷせさっしゃくっ！！！」

……？

どしたの、美鶴。

固まって。

「あ、蒼何しゃくかコレ」

「何って……。
見て分かりませんか？」

どら。

横から覗く。

「ほーいいじゃん、美鶴。
よかったじゃん」

「ずぇえんずぇんよくないしゃくっ！！
なんしゃくかこれぇえっ！！！」

美鶴は箱から蒼のプレゼントを引っ張り出すと高々と掲げた。

「何って百万円程度たまる貯金箱ですよ。
ダンボールから作った」

「ちょ、貯金……。
しゃ……」

しゃぁあああああああああああああ……。

「さいころよりもこっちの方が良いと思ったんですが……」

蒼、お前……。
でも手作りじゃん。
よかったな、美鶴。

「僕はもっと……もっと……」

しゃぁあんしゃぁあああ！！！

とりあえずお誕生日おめでと美鶴。

つづくかも～

しゃくでば！　お誕生日（後書き）

お誕生日おめでとです、美鶴。
いつもいぢめてごめんね☆

しゃくでば！　ゆでたまごの点数

キーン、コーン、カーン、コーン……。

「こないだの中間考査の結果を配布する。
赤点（四十点以下）なぞ取る不届き者は生徒指導室に来るように」

そう、確かに担任の桐梨は美鶴を見ながら行っていた。
だが本人は……。

「……」ボケー

だめだ、こいつ。
まったく次元が違うところにいってやがる。

「鈴木……杉田……高森……永久……」

桐梨から受け取ったテスト。
６５というなんともいかめしい文字が……。
まぁ赤点じゃないからよしとしようか。
ん、なんで美鶴あんなに喜んでるんだ？

「おい、美鶴、お前なんてんだっｔ！？」

「波音、波音ー！！
〇がついてるしゃくよー！！」

あぁ……名前の隣の〇は……。

・
（数分後）
・

「しゃくしゃくしゃくしゃくしゃく……」

「おい、こいつ人間やめたの？」

大きく８２と書かれた成績表を隠すそぶりも無く美鶴を指差すシエラは
心なしか唇の横にうっすらとした笑いを貼り付けている気がした。

「いや、普通に泣いてるんだろ？
しくしくの所をしゃくしゃく言ってるだけで」

てかなんだよこのテンションのギャップ。

「何？
テストで悪い点でも取ったの？
お前が泣くなんて珍しいこともあるもんだね～。
見せてみな」

ほれと手を突き出すシエラに

「しゃくぅん」

美鶴変な声で拒否。

「あー変な声出すな、きもいから」

ひでぇ。

「どれどれ、ほらっ……貸せって……！！
笑わないから、どーせ１０とか２０なんぶははははは！！！！」

せーだいに笑いやがったよこのひと、血も涙もない。
美鶴はと言えば

「……」

悲しい音楽を流してもいいぐらいの質量のオーラを出してやがるぜ。

「シエラも～ん、助けてほしいしゃく～……。
このままじゃどこにもいけないしゃくよぉ～……」

どこもアウトだと思います。

「またやっちゃったのかい、みつるくん」

何！？
今回のシエラはノりが良いようだ。
紳士的だ、運がよかったな。

「勉強が簡単に出来るようになる道具出してほしいしゃく～！」

「仕方ないな」

そしてごそごそと胸↑注目から出したのは

「アンキペーパー☆」

おぉ！
紙だ、ただの。
「コレに覚えたいことを書き込んで食べればどんなことも覚えられるんだ！
（ボソッ）気持ちだけ」
「わーいしゃくー！！
早速やってみるしゃく～！！」
おい、お前最後の一言聞えてなかったのか？
「しゃむしゃむしゃむしゃむ……」
「むしゃむしゃだろ……」
呆れて突っ込む気力もうせた。
・　・　・
（翌日）
ぎゅるる～。
「うぅぅ……おなか壊したしゃくぅぅ……。
一体何がいけなかったんしゃくぅ？
Ｔｅｓｔ　Ｓｉｅｒｒａ　ｐａｐｅｒ……。

ＡＨＨＨ

「おい、なんか騒がしくなってきたぞ？」

「ん？
別にいいんじゃないの？
僕に被害はないわけだし」

「……とりあえず言っておこう。
平和だなー」

「おいっ！！
出て来いやゴラァ！！」

「ひぃぃぃっ！！
やめてしゃくぅぅぅっ……！！！」

「おいっ、１０円貸せよ」

「ほらよ～、汚すなよ？」

「おっし！！」

ガチャガチャ……。

「ひぃっ！！
な、何してるしゃくっ……！？」

カチッ（鍵が開いた音）

ギィィィィ……！

しゃぁあああああああああああああああああああああ……

つづくかもー

しゃくでば！　ゆでたまごの点数（後書き）

どうもありがとうございました。
いやはやね。
ゆでたまごの点数ね。

ありますよ、僕も。
数学で。
えぇ、あれは勘弁して欲しいです。
特にベクトルらへん。

ここまで読んでいただきありがとうございました。

しゃくでぱ！　こんぱくとでぃすく

「波音、波音！！」

つんつんと後ろから突付いてくる男。
正直言って毎回の事ながら感情が高ぶるのは紛れもない事実。
触って欲しくない。

「突付くなって！
で、何？」

「付き合ってほしいしゃく♪」

……は？
……は？
……はぁ？

「……」

「んもぅ♪違うしゃくよぉん♪
冗談しゃくぅぅん♪」

こいつに冗談を言われるとバカにされた気になる。
というかバカにされてる。
絶対そうだ。

「ちょっと殴らせろ」

「しゃく？」

めきっ

・　・　・

「なんだよ、買い物かよ……。
それならそうと早く言えよな。
てっきり……まったく……」

「ひゃふぅ……」

美鶴が痛むであろう赤くはれたほっぺたを撫でながら鳴く。
バカにした代償だ。

「で、何買うんだ？」

田舎の電気街は都会に比べでかい店が多数並ぶことが多い。
デカイ分、距離が小さいからすぐ出てしまうしなんていっても品数が少ない。
人も少ない。
人ごみが嫌いな俺には良い場所だと思う。

「しぃでぃってのが買って見たいしゃく！！」

しぃでぃ――ＣＤ？
は？
コンパクトディスク？

「今の時代は携帯小型オーディオプレイヤーじゃね？」

「何しゃく？
それ？」

ググレ、カス。

「あーもうお前と話すのが疲れる……。
まぁＣＤはいいとして誰のＣＤなんだ？」

「今流行のあのアイドルしゃくよぉん♪」

あまりテレビ見ないから分からん。
聞いたことがあるのはＡ○Ｂ４８ぐらいである。
にしてもテンション高いな。
うざさに磨きがかかっている。

「あぁ～？
あー、Ａ○Ｂ４８か？」

多分これでＦＡ。
ファイナルアンサーだろ。

「ちっがうしゃくよぉん！！
もう！それいつの時代のアイドルしゃくかぁ？」

なう。
現在です。
現在なう。

「波音は流行に疎いしゃくね？
しゃくふふふぅ～☆こ・た・えはぁ☆
ミニ〇ニしゃくよぉっ♪」

……。

「ちょっとニ、三発殴らせろ」

バキッ（ぐー）
パァン（パー）
グサッ（ちょき）

「んきゃぁあぁぁぁっ！！
目がぁっ！！
目がしゃくぅぅぅぅ！！！！」

「しまった、第二関節まで行っちまった。
まーいいや、美鶴だし」

・　・　・

ふと疑問。
こいつ金もってるのか？
母ちゃんがいるってのは聞いたことがないんだが……。

「てか、お前金持ってるわけ？」

腰に手を当て頭を撫でて。

キラーンと歯を光らせる。
そのしぐさの一つ一つに俺の怒りゲージがまた貯まり始める。

「当然しゃくっ！！
この前お義母さんから一万円もらったんしゃくよぉ～♪」

いるのかー母ちゃん。

「そらぁ裕福なこって……」

「あ、しぃでぃ屋さんについたしゃくっ！！
ミニ〇ニどこしゃく～！？」

「自分で探せ……」

早足で俺の視界から早速消えた美鶴に向かって呟く。

「もう俺帰っていいか？」

・　・　・

見事迷子になりました（美鶴が）

「美鶴ー！美鶴！！
くそっ、あいつどこ行きやがった」

きょろきょろ辺りを見渡す。
高い本棚のおかげで見えないしあのシルクハットの影も見えない。

あいつの影を俺が見逃すはずが……。
ん？
アダルトコーナー？
……。
ちらっとだけ覗いてみるか。
絶対にいる気がする。

「お客さん、困ります！
ココは十八歳未満の方は立ち入り禁止となっておりまして――」

「うるさいしゃくっ！！！
僕の精神年齢は既に十八歳を超えてじゃぐっ！！」

後ろからとび蹴りをかました。
困惑している店員さんにごめんなさいしないとね。

「ども、お騒がせしました」

倒れている美鶴の首根っこを掴み引きずりその場を後にした。

・　・　・

「ったく、このダラズがっ！！
もうさっさとそのミニ〇ニのＣＤレジに持ってけ！！」

隅っこに正座させて説教開始。

「常識の範囲で……どーたらこーたら。

分かったか？
分かったら早く帰るぞ。
かえってゲームしたいし」

「わかったしゃくよぉ……」

・　・　・

「一二六〇円になりまーす」

「フッ、コレをくれてやるしゃく。
一万円しゃくよぉ？」

「（なにこいつうぜぇ）はい、いちま……って！！お客さん！！
コレ千円ですよ？」

なにやらもめてるなーと思って読書コーナーから戻ってきたら……。
また美鶴か。

「しゃくっ！？
そんなはずないしゃくっ！！
福沢が千円で野口が一万円のはずしゃくっ！！」

その知識はどこから来たのやら。
泉のように間違った知識が湧き出してるな。

「逆……なんですけど……。
で、残りの二百六十円を……」

ぴくぴくと頬を引きつらせなんとか笑顔の対応を維持している店員さんは正直すごいと思う。
忍耐力が人よりも強いのだろうか。

「はぁ？
あるわけないしゃく。
コレが一万円だと思ったしゃくから」

「（何をえらそうにいってんだ、この顎……）
ではこのＣＤは戻しておきますね？」

美鶴の手からＣＤをもぎ取りもとの場所へ戻そうとしている。
あきらめろ、美鶴。

「嫌しゃくぅっ！！
真〇たんは僕のモノしゃくっ！」

バカ野朗！
何やってんだ！！
美鶴は店員の手からＣＤを奪ったかと思うと
次の瞬間ダッシュで入り口へと走り出したのだ。

「あっ！！
ちょ……ま、万引きだー！！」

こんな正々堂々とした万引きが他にあろうか。
でも一つ。
万引きは犯罪です。
絶対にしたらあきません。

「うわ……俺もう帰ろう……」

・　・　・

「ねー、波音。
なんであの顎テレビに出てるの？」

晩御飯の時間に流れたニュースに美鶴の顔が映る。
モザイクなどがかかっているが顎のおかげですべては台無しである。
もう少しがんばれよ。

『なお、少年Sは
ぼくはまりたんのためにやったんしゃく。
何も悪くないしゃ……ぷっ！
あ、し、失礼しました』

「今のは仕方ないよな……」

ＥＮＤ　つづくかもしれませんね。

しゃくでぱ！　こんぱくとでぃすく（後書き）

どうも、ありがとうございました。
ね。
美鶴さんったらあらあら・・・ですよね。
今頃かよってね。

それでは、ありがとうございました。

しゃくでば！　気持ちのいいお目覚めをあなたに

「五……四……三……」

俺は今夢の中なのだ。
果てしなくいい気持ちなのだ。
ＺＺｚｚ…。

「ピピピッ！アサデス！アサデス！ピピピッ！ピピピッ！アサデス！アサデス！」

Ｚｚ…。
すやすやなのだ。
快眠なのだ。

「ありゃぁ…起きないねぇ…」

残念ながら今日は俺を叩き起こすことはできない。
昨日の朝俺が

「頼むから穏便に起こしてくれ…」

と流石の最終兵器ですら同情せざるをえないような顔で頼んだからだ。
しかし、不器用な彼女…メイナ・スタート・デリートはそれが出来ずに悩んでいた。
カチカチと時計が秒を刻む音のみが過ぎていく。

「どうしたもんかねぇ…ってか最終兵器の私にこんなこと頼む方が

どーかしてるとしか…！」

何かしら閃いた用だ。
きらんとメイナの顔が輝いた。

「波音、大好きしゃくぅ～☆
波音、大好きでっぱ…
また会えたね、マイハニー♪」

俺の耳元に急接近してきやがったかと思うと
メイナはぼそぼそと俺にそう囁きやがったのである。
俺の夢の中に嫌な空気が流れはじめたとは露知らず
少し離れるとのんびりと肘をついて俺の様子を見はじめた。

（俺の夢の中）

「波音、大好きしゃくぅ～☆」

み、美鶴？

「波音、大好きでっぱ…」

で、出刃先輩？
なんだあんたらは。
人の夢の中にまで侵略するとかありえｎ

「また会えたね、マイハニー♪」

「出たぁぁぁああ！」

「どうしたのさ、怯えちゃって？マイハニーらしくないなぁっ♪」

セ、セズク・ＫＴ・ナスカルークさんじゃないですか。
最終兵器モドキでガチホモ。
こっち来んな候補Ｎｏ．３。
Ｎｏ．１は当然美鶴。

「な、なんでお前らいるんだよ！」

キョドった俺ににこりと爽やかに微笑みセズクが答えた。

「そりゃぁ、勿論波音がいる所ならどこまでも…」

う、嬉しくねぇー！

「ちょっと何言ってるしゃくぅ？波音はう〝おくのものしゃくよ？」

「いいや、俺のでっぱ！」

お、おいやめろ。
男だろお前らは！

「ん……？
何だ、貴様らは？」

セズクが爽やかな笑顔から殺気を孕んだ狼の目になる。

み、美鶴、先輩逃げて！

「しゃくっ！？波音は渡さないしゃくっ！！」

「いーや、俺のモノだでっぱ！」

あぁお前らセズクさんに油を注ぐなー！

「あぁ？
誰が決めたんだそんな戯れ言」

もう知らない。
好きにやって。

「そこをどきな」

「どかないしゃくっ！」

「同じくでっぱっ！！」

ああ、あぁぁ。
夢の中なのに、こんなのいやぁ…。

「なら消すまでだ」

セズクの腕が銃に変わった。
痛いほどの殺気が身に染み込んでくる。
もう駄目だ、この二人終わった。

（現実世界）

「う〝…や、やめ…」

「おっ、おっ？
もう少しで起きるんじゃないかなぁ？」

「何やってんの、姉さん？」

（再び夢の中）

「食らえしゃくっ！美鶴汁！」

うわっ、臭っ！

「デヴァーンナッコゥ！！」

二人の凄まじい攻撃がセズクに向かう。
それを……セズクは

「甘い」

防壁のようなものを展開して防いだ。

反則……だな。

「しゃくっ！？」

「でばっ！？」

防壁を左手のひと振りで解除すると二人の体を地面に叩きつけた。
反動ではねあがる二人の体。そこへ

「フィニッシュだな？」

二人の首にナイフに変えた両腕を……振り下ろした。
ごとんと落ちる二つの首。
セズクは腕についた血を払いおとし、頬についた血が……涙みたいに……。

「さぁ、行こうか、マイハニー？」

先ほどと全く変わらない笑顔で俺に微笑み腕を引っ張る。

「は！？
ど、どこへ！？」

「ふふふっ…♪」

「ちょっ、やめろっ！！離せ、離してくれっ！！」

ずるずると引っ張られる俺の目に映ったもの。
首が無いにも関わらず二人の……。

「まぁぁつしゃぁぁぁくぅぅぅ……」

「まぁぁぁてぇぇぇでっぱぁぁぁ……」

「いやぁぁぁぁぁ！
首無しまで襲ってくんなぁぁぁぁぁあ！！
シエラ！メイナ！蒼ぉ！！助けてくれ！！」

（現実世界）

「ぇぇえぇぇ、ボンバーヘェェェッド！！！」

「あっ！お目覚めだねぇ？おはよー」

「はぁ……はぁ……」

あ、悪夢だった。
お目覚めも最悪。

「ぉぉ、すんごい汗……」

パジャマが透けるぐらい大量に汗をかいていた。着替えないと風邪を引くにちがいない。
それよりも…。
俺は楽しそうに笑っているメイナを睨み付けた。

「メイナ……お前か……」
「最高のお目覚めだったでしょ？」
この尼ぁ……。
「今から一ヶ月、ゴミ、風呂、洗濯、掃除全部やれ」
メイナの微笑をそれは完璧にぶっとばした。
絶対に許さない。
「そ、そんなぁ～」
「姉さん、ドンマイ」
☆あふたーすとーりー☆
「おはようしゃくぅ、波音っ！」
……。
そっぽを向く。
「な、なぁんで無視するしゃくかぁ！！」
内心ため息日和。
「すまん……今日はお前の顔マジで見たくない……」

「なぁんでしゃくぅ？
なぁんでしゃくぅっ！？」

「お願いだからついてこないでぇぇぇ！！」

「波音っ！……行っちゃったしゃくぅ……」

ゆらりと街角に濃い影がひとつ。
言わずともわかるだろう？

「あの顎……マイハニーに……」

つづくかもぉ

しゃくでぱ！　気持ちのいいお目覚めをあなたに（後書き）

ありがとうございました。
いやはや夢というのは本当にカオスなものです。
皆さん、夢の中で銃とかに撃たれたことあります？
あれなんかリアルな感じで超嫌なんですよね。
じんわり痛いし。

それではありがとうございました。

大体そのとき寝ながらわき腹打ってたりしますよね。
ベットの端とかに。

しゃくでば！　美鶴＋メイナのからあげ＝みつる！！

お昼休みのことだ。

「でさー、その時仁がさぁ……」

楽しくくっちゃべっていた時だ。
俺の机を掴む手があった。

「ひぃっ！？」

あまりにその演出が不気味だったせいで悲鳴を上げる俺。

「ん？
　ゾンビか？」

お弁当を机の上においてシエラが覗き込んだ。

「ぼ……ヴぉくしゃくよ……ひゅー……ひゅー……」

美鶴だった。
ただでさえ細い体はさらに細くなりもう死にそうである。
別に死んでもいいんだけどね。

「ど……どうしたの？
　今にも死にそうじゃない！！」

メイナが駆け寄る。
あらやさしい。

「お……おなかがすいたしゃくぅぅ……」

なんだ空腹なだけか。

心配して損した。

「大変！！

ホラ、今朝作った試作品、からあげよ！！！」

口に含んでいた米を吐き出した。

「げほっげほっ……」

というかむせた。

俺とシエラがごほごほと。

お前んな危険なもの作ってたのかっ！？

どうでもいいが最近メイナは料理の腕が上達した。

なんと爆発するタイミングが食べてから約十秒後になったのである。

「わーいしゃくっ♪

この際なんでもいいしゃくっ♪

いただきまーしゅしゃきゅっ☆むふっ」

「あっ……」

た、食べた……。

食べやがったよ……。

「……むっ！？

かっ、体が……というか顎が……あついじゃぐぅぅっ！！

あっ……あぁあああっ！！！」

ボコボコボコッ！！

「いやぁあああっ！！」

なんと美鶴の顎が皮膚丸ごと沸騰した水みたいになっていたのだ。
見ている俺がもうわけわかめ。
女子が悲鳴を上げている。
メイナ何をしたんだ？

「うぉべらっ！！」

そして大きく体を曲げた美鶴は口から何かを射出した。
白い……丸い……？
卵？
粘液と一緒に……卵？

「な、なんだこれ……。
何の卵だ――うわっ！？」

水を打ったように静かなクラスの中俺は勇気をだして卵に近寄った。
と思ったら跳ね飛ばされた。
美鶴に。

「あっー！！
卵しゃくぅーっ♪
僕の卵しゃくぅーっ！！」

スリスリ。

やめろその顔で目を閉じながらほおずりするな。
ってか、よくも俺を突き飛ばしてくれたな……？

「この卵ちゃんは僕が育てるしゃくよぉ！！
むふふふっしゃくぅ……」

……。

「とりあえずさっき突き飛ばしたお返しさせろ」

「へ？しゃく」

パンチ。
美鶴は二メートルちょい吹っ飛んで壁にへばりついた。

「姉さん……？
姉さーん、おーい……」

シエラがメイナの前で手をひらひらさせるが
あまりにもショックだったのかメイナは反応しない。
ぼーぜん状態。
無理もないか……。

・　・　・

（翌日）

「波音！！波音！！

もうすぐ生まれそうしゃくよぉっ！！」

あー？
朝一番からこいつは何言ってんだか。
頭いかれたのか？

「ってか、ソコで温めんなぁあああああああ！！！」

ソコ＝大事なところ。
まぁいわずがもがな。

「かわいそうだろ！！
出せよ！！！」

どーりで膨らみすぎだと思ったぜ。
どんだけでけぇんだとか思った。
シモネタはここまでにしとくぞ。
え、えっちなのはよくないからな。

「あぁん、そんなトコ触っちゃ駄目しゃ……」

「……」

「ごめんなさいしゃく……」

おや？

・　・　・

卵の様子が……。
動いてる……。

「ぷはぁ！
あー、苦しかった……」

……ん。
今晩のおかずはなんだっけなぁ。
シエラがつくったバルチャニムスかな？

「波音、帰ってきてー！」

シエラ、ゆするな。
もう俺は駄目かもしれないんだ。
何がなんだか。
産まれてすぐしゃべったし。

「で……僕のパパとママは……？」

卵から出てきた人間……だろうか？
小さな……そうだな、四歳ほどの子供がきょろきょろと周りを見渡す。
そして美鶴と目があう。

「……しゃく……」

「……」

しばしの沈黙。

「本当のパパとママはどこ……？」

「僕しゃｋ――」

「きゃぁあああああっ！！
かわいぃいいいいいっ！！！」

美鶴は女子郡に押しのけられ人ごみの中に埋もれた。

「うぇ？
あ、ちょっと！！
この下裸なんだけど……」

そして女子らにもみくちゃにされる美鶴の髪形を持った可愛い小児。
……ふむ。
もういいや、全部受け入れたわ。

「なぁ、名前何が良いと思う？」

「えっ、それ僕に聞いちゃうの？
……そうだな……『みつる』でいいんじゃないの？」

「みつるくーん！！
こっち向いてっ！！」

「みつるちゃーん、こっちおいでっ！！！」

「ほら、みつる君、高い高い！！」

あっという間にクラスの人気者か。

そして俺の隣でそれを見てわなわなと拳を振るわせる人物に声をかけた。

「もう俺もあいつ『みつる』でお前『顎』って呼ぶわ」

「みつるは僕しゃくぅぅぅぅっ！！！！」

しゃぁあああああああああああああああああああ……。

ＥＮＤ　つづくかもー

しゃくでば！　美鶴＋メイナのからあげ＝みつる！！（後書き）

まさかの新キャラ。
びっくりですよね。

前回のあらすじ。
美鶴が吐いた卵からみつるが生まれました。
終わり

「で……。
この子の預け先どうするんだ？」

俺の懸念ももっともだと思う。
どうするんだ、こいつ。
国籍とか細かいことはこの際考えないとして……。

「やっぱりパパと一緒の方がいいんじゃない？」

もう飽きたと、シエラが再びお弁当を頬張り始めた。

「パパねぇ……」

考えてみた。

パパ＝美鶴

ママ＝メイナの唐揚げ

「俺だったら三日で死にたくなる」

だろ？
仕方ないだろ？

「じゃあさ……」

シエラの提案。
なるほどな。

・　・　・

「はい、また家族が増えました！」

詩乃が手をパンと合わせてはしゃいだ。

「えとーみ、みつるです……」

うむ。
可愛いぞ。
それを見て蒼は

「か、かわいい……ですけど、何か不吉なシュルエットしてますね……。

とりあえずそのシルクハットと紳士服着替えましょうか！」

「えっ、な、何するの……？」

「波音、よろしく」

詩乃さん、俺ですか、こういうのは。
やっぱり、俺なんですか。

俺じゃないと駄目なんですか。

「えー……」

「男同士でしょ！
ほら！」

「波音さん、がんばって！」

しゃーねぇなぁ……。

「ほら、着替えるぞみつる」

・　・　・

その頃美鶴のテントでは。

「なんか……また僕は一人ぼっちになった気がするしゃくぅ……。
誰も僕を美鶴ってよんでくれなくなったし……。
あのガキのせいでますます僕の立場が無くなっていくしゃくぅ……。
もう……もうどうすれば良いんしゃくかぁ……？」

大きくため息をついて涙をこぼす。
服にしみがつくのを恐れたのかその涙をあわててハンカチでぬぐう。
見ているだけで哀愁さそうなんとやら。

「美鶴……おい、美鶴……」

その美鶴を呼び止める声があった。

「で、出刃先輩しゃくっ！？」

なつかしの美鶴の尊敬する先輩の姿ありけり。

「俺の家に……来るでっぱ？」

よかったなぁ、よかったなぁ、美鶴。

「あぁ……あぁぁ……。
出刃先輩大好きしゃくぅぅぅぅ！！」

寛大な出刃先輩の胸に飛び込もうとした。
だが現実は更に冷たい選択を美鶴に与えたのである。
そうそれは幻覚だったのだ。
あまりにもさびしかった美鶴の心が与えた一筋の
触れてしまうと消える希望だったのだ。

「うぅぅ……」

悔しさのあまり地面を爪で引っかく。

「しゃぁぁぁぁぁっ！！」

顔を涙でぐしゃぐしゃにしながら少年はある所へ駆け出した。

・　・

・

再び詩乃家。

「えっ、みつる君は顎とメイナ姉様の唐揚げが化学反応して産まれたんですか？」

「その通りだ。
実際に見た俺が言うんだから間違いない」

みつるの頭をなでながら答える。

「はのん兄ちゃん、くすぐったいよ」

かわいいなぁ、弟欲しいなぁ。

「私も見たしね。
なんともまぁ奇妙な気分だよ、うん」

「かわいいな、やっぱり。
俺弟欲しいなぁ」

なんでこんなに可愛いんだろう。
パパが顎だとは到底思えない。

「え、何波音？
弟欲しいの？
ならさ、私とがんばっちゃう？」

詩乃が自分のシャツの胸元を少し広げて……。

っておい。
ほっぺたが熱くなった。
……。

「……それじゃ子供になっちまうだろうが」

「だよねー、あははは」

そういう系のねたは苦手だからやめてけろ。

「？

詩乃姉様と、波音さんが何の話をしているのかさっぱり分かりませんが
みつる君はかわいそうに……。
でも大丈夫、私達がそんなつらい過去に負けないぐらいの素敵な思い出。
これから作ってあげますよ！」

蒼、目が星になってるぞ。
そんなに弟が欲しかったのか。

「蒼姉ちゃん……」

がしっっ！
変な家族愛がここに出来上がった。
わけあり姉弟か。

「にぎやかな家になったねぇ……。
で、波音私とがんばらないの？」

「がんばらねーからやめろって馬鹿」

・　・　・

ピンポーン♪

とある町のとある家。

といっても大塔高校がある市と変わる事はないぞ。

そこのチャイムがなった。

「はいー？」

ぱたぱたと手を拭きながらドアを開けるぱっと見て三十代ちょい過ぎの女性。

「美鶴！？」

「お義母さぁん、助けてくれしゃくぅ……」

「まぁまぁ、こんなに痩せて……。

ロクなもの食べてないんでしょう！？

とにかく上がりなさい！」

「しゃくぅ……」

・　・

えっ、なんだこの展開は。

・

「じゃぐじゃぐじゃぐじゃぐ（ガツガツガツ）
おぉいしぃしゃくっ！！
こんなにおいしい物生まれてはじめて食べた気がするしゃくぅ♪」

もりもりと次から次へと料理を平らげていく美鶴。
涙も止まらない。
嬉しくて嬉しくて止まらないのだろう。

「美鶴……」

「しゃく？」

「お母さんね、思ったの。
ただ厳しくしてちゃ駄目なんだって。
昔の私はお前にそのコンプレックスの顔に負けないぐらい偉い人になって……。
みんなに尊敬されるような人になって……。
お前に幸せになって欲しかったの。
だからあんなに勉強とかにしつこくこだわってた……。
でもそれはお前を傷つけるだけで、結局は家出させてしまった……。
こんなこと私もお前も望んでいなかった……。
そうでしょう？」

「しゃくぅ……」

重い……。
俺の……実況が入る隙がない……。

重いというか深い……。

「お義母さん……」

「美鶴……」

「しゃくぅぅぅっ！！！」

ガッシ！！

「お前と私は知はつながっていないけど……。
それでもお前は私の息子だからね……」

家族愛っていいもんだなぁ、おいおい。
泣けてきやがったぜ、（＊´∀｀）。

つづくよっ！多分

しゃくでば！ Can I have a heart of family

家族って本当にいいものですね。
今おかれている状況を再認識して
そう思いました。

うんうん。
いいもんだ。

しゃくでぼ！　シエラとでェとしゃくっ☆

シエラ下校中。

「さって、帰ったら何しようかな」

シエラは今回一人で帰っている。
授業を抜け出してきたのだ。
だがそのシエラの後ろについて歩くやつがいる。
当然美鶴である。
最初は偶然かと思っていたが……。

「（げっ、こっちみてる――……）」

どうやら目的はシエラにあるようだ。

「……な、なんだよ……。
せっかく抜け出してきたのに……」

ため息とともに教科書で殴り倒す準備。

「一緒に帰って欲しいしゃ　ばこーん

一瞬で殴り倒した。
ひどい。
別に良いけど。

「はぁ？
波音と一緒に帰れば良いでしょ……」

散らばった教科書を拾いながらシエラが冷たく突き放す。
拒絶されているというのに食い下がる美鶴！

「それが、波音用事があるとかでシエラと帰れって言われたんしゃくぅ……。
それにちょうどいいしゃくっ！！
お義母さんに見せる彼女のふりをしてもらうしゃくっ！！！」

「はぁ！？×２
いつ決まったんだよ！？」

「今朝に決まってるしゃく」

話がナレーターの俺でも付いていけんぞ。
なんだ？
美鶴アホなのか？

「な・に・が決まってるだよ……？
そんなに死にたいわけ……？」

「ひぃっしゃくぅっ！！
ごめんしゃくっ！！ごめんしゃくっ！！
そしてお願いしゃくっ、一生の！」

こんなところでつかうのか、最終奥義一生のお願い。
説明するまでもないが小学生などがよく使うおねだりのしかた。
一生のお願いとかいいながら何度も使う。

「はぁ……ま、後でなんとかするか……」

「ホントしゃく！？
わーい、しゃくっ！！わーいしゃくっ！！」

「……（殴りてぇ）
あ、ごめん、拳が勝手にッ！！」

ぐしゃっ。

「じゃぐぅっ！！」

・　・　・

「あー喉渇いたな」

夏だからな。
シエラは胸元をバタバタとさせた。
熱気が溜まるのだろうか。

「奇遇しゃくねぇ、僕もしゃく♪」

「お前と気が合うなんて今日は仏滅かな。
好きなもん変わりに買ってやるから金出せ」

「おっ、今日のシエラはやさしいしゃくねぇー☆」

えっと……？
やさしいか……？

ん、俺の日本語能力がおかしいだけなんか？

「僕はＭＡＸコーシーがいいしゃくっ！
はい、百二十円しゃくっ！」

「はいよ」

シエラは美鶴にもらった銀色と銅色の高価を自動販売機の中に放り込んだ。
そしてすかさず押す、アクエリウス。
皆大好きスポーツドリンクだ。

「あ、あのー……僕アクエリウスじゃなくてＭＡＸコーシーしゃく……」

それを無視してシエラはアクエリウスの缶の蓋をねじ取る。

「プッハー！
ん、あぁ、ＭＡＸコーシーとか言ってたな。
ほらよ」

そう言うと思いっきり拳を自動販売機に叩き込んだ。
何やってんだバカーっ！！
……と思ったらなんと見本のＭＡＸコーシーを
見本のＭＡＸコーシーを透明のプラスチックを割って取ったではないか。

「ほらよ」

それをにっこり微笑んで渡すシエラ。

「しゃくぅ……これＭＡＸコーシーじゃ……」

ブーブー文句をたれる美鶴（当然といっちゃ当然だが）だがシエラは歯牙にもかけないといった様子で

「なんだよ、ちゃんとＭＡＸコーシーって書いてあるだろ？文句あるのか？」

一喝。

「しゃくぅ……」

今回ばかりは美鶴が少し可哀想である。

・　・　・

「あ、お義母さんしゃく！！」

そんなことしているうちにシエラは美鶴の家までたどり着いてしまった。

「やば……もうここまで来てたのか……。
この顎の彼女にされるってのはもっぱらごめんだ……。
おっ、あれ使えるかも」

そしてとある店頭へと最終兵器のスピードで駆け寄るシエラ。
衝撃波とか細かいことは気にしてはいけない。

・・・

「紹介するしゃくっ！
これが彼女の……しゃく？」

「あら、誰もいないじゃない？」

「あんれぇしゃくぅ？
あっ、あんな電柱の影に隠れてるしゃくぅ！
もうっ！
シエラったら以外に恥ずかしがりやなんしゃくねっ！」

幸せに満ち溢れている美鶴の顔がうざい。
なぐりたい。

「まぁかわいらしい娘ね。
電柱の後ろに隠れるなんて……」

「改めて紹介するしゃくっ！！」

美鶴はダッシュで電柱裏に隠れるシエラの腕を掴んだ。
そのまま引きずりお義母さんの所へと引っ張っていく。

「これが僕の彼女のシエラしゃくっ！！！」

「み、美鶴……」

お義母さんの顔が悲しみに歪んだ。

「しゃく？
あまりの可愛さに感激したしゃく？
しゃっしゃっしゃっ、確かにシエラは可愛いしゃく！
これでも僕の彼女なんしゃくからねぇ～」

「美鶴……。
あなたがそれでいいならお母さん止めはしないわ……。
でも……でも……うぅっ！！」

「お、お義母さん！！どうしたしゃく！？
お義母さん！！
……しゃく？」

なんと美鶴の隣にはシエラではなく
アニメショップの萌えキャラ等身大看板があっただけだった。

しゃぁあぁぁあああああ……。

「あーヘヴィな一日だな。
家帰ったらお風呂はいろ」

つづかないー

しゃくでぱ！　シエラとでェとしゃくっ☆（後書き）

ううむ。
美鶴さん、かわいそうに。
とはいいませんが流石に可哀想かもｗ

まぁ後悔はしてません。
反省もしませんしｗｗ

では、ありがとうございました。

いやぁん……すごぉい……えっちなしゃくでば！

「ついにこのコーナーも二回目しゃくー♪」

あ、コーナーだったんだ、コレ。

ってか

「エロくないよね……」

「ショボボンしゃくぅ……」

「う……キモイ。

まぁ俺にとっちゃどーでもいいことだけどな」

実際どうでもいいしな。

「よくないしゃくっ！！

お前、それでも〇〇〇付いてるしゃくかぁ！？

あっ、言っちゃったしゃくぅ♪

いや？んしゃくぅ☆」

ハァ……。

あー頭痛い。

「と！！

ドサクサにまぎれてしゃくっ！！」

美鶴はしゃしゃしゃと走り出したかと思うと

シエラへとダイブした。

そうシエラへと。

「わーーーー（棒）」

「やったしゃくっ！
シエラを押し倒したしゃくっ（ガッツポーズ）
ついでにボインタッチもしたしゃくよぉっ☆
このままいただきますしゃくっ♪」

と言って宙へ舞う。
そのまま高く高くへジャンプしたかと思うと一気に服を脱ぐ。
まるでルパンみたいにすごいことになる美鶴だった。
だがしかし……。

「しゃブオッ！？」

美鶴の着地地点には誰もいなかったのだ。

「バカめ、それは残像だ！」

得意げなシエラ。
お前それがしたかっただけだろ。

・　・　・

「というわけで波音には退場願って今回は
無理やりおにゃのこにエッチな言葉を言ってもらうことにしたしゃくっ！！

言うまで今夜は帰さないしゃくよぉん！」

退場させられたがナレーターとしては存在させてもらうぞ。
出ないと細かい描写がうんぬん。

「今もうお昼ですけど……」

蒼は迷惑そうな顔をして美鶴にため息を一つ。

「もうおにゃのこ言うの辞めろよ、時代遅れめ」

シエラもため息をひとつついて美鶴をにらんだ。

「っていうかこのコーナー無理にしなくてもいいんじゃ……」

メイナもメイナでもううんざりといった顔だ。
俺もうんざりなぐらいだから
それに無理やり付き合わされるこいつらはスーパーうんざり。
かわいそうに。

「うるさいしゃくっ！！
とにかくさっさと言うしゃくっ！！
まずはシエラしゃくっ！！
恥じらいながら……
『ご、ご主人様ぁ、僕もういっｔ（強制終了）』

おうふ。
それはいきなりハードルとして高くないか？

「エロイッエッサイム。

エロイッエッサイム」

「何しゃくっ、その呪文はっ！
エロ入ってればなんでも良いと思うなしゃくっ！！」

お前が言うか。

「もういいしゃくっ！！
次はメイナしゃくっ！！」

なりふりかまわねぇのか。
もう。
限界なのか、美鶴。

「んー……と。
コンビにで成人向け雑誌と一般雑誌が分けられてるけど
コミックコーナーでは分けられてないから結構困るんだよねぇ……」

顎に指を当て考え考え吐き出すメイナ。
それに対して美鶴は

「んんっもうぅっ！！
違うしゃく違うしゃくっ！！
僕が求めているのはこうじゃないんしゃくぅっ！！」

何映画監督みたいなこといってんだろうこいつ。

「もう、蒼！
すべてはお前に託したしゃくっ！！」

シエラとメイナに見切りをつけ美鶴はずびっと蒼を指差した。
超空要塞戦艦の核さんは欠伸を一つ。

「……眠いです。
それにしても不思議とプレッシャーを感じませんねぇ……」

意外とこの顎すげぇんじゃないか？
プレッシャー感じないとかなかなかの才能……。
やだ、何ほめてるんだろう、俺。

「えーじゃぁ……。
カマキリって確か雌が雄を食べるんですよ？」

「しゃぁあああああああああああああっ！！」

「あ、あとカタツムリには雄雌が無いって知ってました？」

「あぁあああああああああああああ……」

美鶴の全身から何かよく分からない液体が噴出し始めた。
黒っぽい……？
ん……？
臭い……？

「それにハムスターは……。
？
何ですか、シエラ姉様」

「その辺にしときな」

「え……？
あっ……なんですか、これ？」

なんか色々たまっていたのが出たっぽいな。
色々な。
色々。

「じゃ……じゃばば……ごふっ……」

「とりあえず帰ろうか」

「はいっ、シエラ姉様！」

「今夜は焼肉は無理だねぇ……」

「メイナ姉様に料理は無理……痛いですっ！」

頭に一撃をくらって涙目の蒼。
それは言っちゃいけないだろ。

「あっ……！」

「あ、蒼？」

何かを思いついたように蒼はゴ美鶴（ごみつる）のところへとととと……と戻る。
どうしたんだろうか。

「オマケにカエルは……」

「――――――ッ！！！！」

あっ、噴水が。

美鶴が破裂した……。

MITSURU DIED

いやぁん……すごぉい……えっちなしゃくでば！（後書き）

これはなんといえばいいのか・・・・。
タイトルに釣られてきた方ごめんなさいね。

あやまります。
かといってこのメンバーで18禁ってのも
かなり高いハードルだなぁ。

それではここまでよんでいただきありがとうございました。

しゃくでば！　ゲームで成功した人っているの？

前回までのあらすじ。
名前の横に大きな丸という点数をとってしまった灼場山美鶴。
彼は成績を上げるためにシエラもんに相談を持ちかけ
彼女の助言どおりにしたが、失敗に終わった。
だが……。

「まだしゃく！！
　まだ終わってないしゃくっ！！」

・　・　・

「というわけで、メイナもん！
　なんとかしてしゃく！！」

メイナもん……。
そのうちハノンもんとかいわれるのだろうか、俺は。

「じゃあ成績がアップした気になれる料理を……」

美鶴の顔が変わった。
顔というか顔色が。

「もうあんな危険物……二度と作らないで欲しいしゃく！！
　爆死はまぬがれたけど変な子供まで生まれてしまったしゃくっ！！」

その言葉を聞いたメイナの目から一筋の……涙が……。（感動番組風）

「私の料理は……。
私の料理は……」

「しゃく？」

「みんなを死に至らしめる危険物だったんだね――っ！！」

泣きながら走りさるメイナ。
美鶴は一人その場に残された。
一瞬の静寂の後に始まるひそひそ話。

「ちょっと、何アイツ。
女の子泣かしたよ？」

「しかもアイツこの前の変態じゃね？
サイッテー」

「うほっ、良い修羅場」

「女の子を泣かしてその上変態だなんて……。
あれ聞いてる価値あんの？
ってか人間？」

すごい言われようだが今回は完璧に美鶴が悪い。
だから俺は止めない。

「……僕は……僕は……。
しゃぁぁぁぁくっ！！！」

美鶴も駆け出す。

「おい、お前のせいだぞシエラ。
お前のせいでクラス中がなんか美鶴攻め体制に入ってるぞ」

「えー？
別におもしろいからよくない？」

「お前……」

・　・　・

「あー、結局何も成績アップの方法がつかめなかったしゃく……」

なんで俺のところに来たんだよ。
俺はバカだから力にはなれんぞ。

「誰かお前のまわりで頭いいやついないわけ？」

美鶴は長い間顎に手を当てて考え始めた。
いないのか…。

「……そうしゃく！」

お、思い付いたのか？

頭いい友達いたのか？
美鶴はすっとアンテナ付き携帯を取りだしボタンを連打した。
そのまま耳にあてる。
電話してやがる！

「……しゃく……」

『はい、こちらベルカ第一…』

「蒼を呼んでくれしゃぁぁぁくっ！！！！」

大声だすな！
耳痛いがな！
だがチョイスはグッドだ。
確かに蒼さんならいいかもしれんな。
いい迷惑だろうけど。

『はっ……？
えーと蒼中将…お電話です』

『はい、お電話かわりまし――』

「蒼ー！！お願いしゃく！！成績アップのコツを教えて欲しいしゃぁぁぁくっ！！！」

『……』

ブツッ。
つーつーつー…。
うるっせぇ！

なにこいついきなり大声あげてんだバカ美鶴。

「お前いきなり大声はアウトだろ…」

やさしく諭す。

「へ？
だってこうしないときこえないんじゃしゃく？」

「はぁ…あのなー……普通に話しかければいいんだよ？もういっぺんかけてみ！」

「わかったしゃく！」

プルルル…。

『はい、こちら…』

「しゃぁぁぁくっ！！！」

「分かってねーじゃねーか！」

『……』

ブツッ。
つー…つー…。

「切れたしゃく…」

あのな…。

だからな…。

「いいか、美鶴。もう一回言うからな？（略）」

「わかったしゃく！」

本当かよ…。

プルルル…。

『はい、こちら…』

「しゃくっ！」

『……はぁ…。なんでこの周波数知ってるとか
キミの携帯どうなってんのとかはこの際問いません』

「ありがとうしゃく。というわけで成績アップのコツを教えて欲しいしゃく」

『……脳トレでもしたらどうです？』

「僕ＤＳ持ってないしゃく……」

『じゃあソフトだけあげますよ。うまく受け取って下さいね』

「しゃく？」

ん？

なんだあの空から降ってくる……っ！

箱！？

「美鶴！上！」

「しゃ――」

がぎんとソフトが入っている箱が美鶴の顔に直撃！

「みつるぅうぅう！」

・　・　・

その後美鶴は義母に買ってもらったＤＳで脳トレをはじめたのであった。

『あなたの脳年齢は…
０歳です
』

しゃぁぁぁぁぁ…！

「いいのか、悪いのか…」

ってかまた０かよ…。

しゃくでば！　ゲームで成功した人っているの？（後書き）

どうもありがとうございました。
がんばれ、美鶴さんと
応援したくなりますね。

え？
ならない？

僕もなりません。

しゃくでば！　美鶴が時々クヌギの木の上で寝ているよ！

ミ～ンミンミン……。

「あー今日も暑いなぁ……」

詩乃が突き抜けるような夏の空を仰いだ。

「じゃ！
遊びにいってきまーす！」

「はい、いってらっしゃい……。
はぁ……みつるは暑くても元気だなぁ。
それに引き換え……」

詩乃はちらりと扇風機の前で正座をしている蒼を見た。

「あぁぁつぅぅいぃぃでぇぇすぅぅ」

扇風機に向かって声を発する蒼。
我々は宇宙人までもう少しだ。

「クーラーガンガンの中で一日中そうやって扇風機の前でごろごろと
筆者の弟みたいなのはどうかと思うんだけどね～」

詩乃の言葉は正確に蒼の頭を叩いた。
ギクッと身を固まらせる少女に詩乃の止めの一言。

「生活習慣病は怖いからなぁ……。

肥満につながったり病気になったり――。
その歳でそうなるのはどうかと……」

『肥満』
『病気』
それらは蒼の頭を思いっきり大きく叩いたのだ。

「み、みつるくーん！
私も一緒に行くっ！！」

・　・　・

「とゆーわけでっ！
今日は裏山へカブトムシ取りに行くぞッ！」

みつるのお友達。
たーくんはこの暑さだというのに元気百倍。
若いって良いなぁ。

「えっ、話流れがまったく読めないんですが……」

その話に唯一付いていけない存在。
それが彼女なのだ。

「何言ってんだ。
男なら分かるだろう？
カブトムシと大艦巨砲主義とドリルは男のロマンだっ！」

たーくん力説。
わかってるじゃねぇか、坊主！
その通りだ！

「私女ですけど……」

乗り気でない蒼をなんとかやる気にさせようと
みつるが一生懸命に取れるらしい虫を羅列する。

「他にもちょーちょとか蝉とか……」

「でもカブトムシなんてとってどうするんですか？」

「大事に大事に育てるのさ」
「でも夏休みが終わる頃にはみんな……」

「コラーっ！
夢のないことを言うんじゃないっ！！」

・　・　・

「あ、暑い……」

森の奥のほうだからか湿気も混じって来て暑さが倍増されている気がする。
蒸し暑い。
サウナかって！

「さぁ、ついたぞ！
確かここらへんにいるはずなんだけど……」

たーくんは虫網を持ったまま木をじっくりと見回す。

「あっ、あれじゃないですか？」

蒼が一本の木を指差した。

「『クヌギの木』！
蹴ってみればカブトムシが落ちてきますよ、きっと！」

「いや、でも蒼ねーちゃん。
こんなでっかい木を蹴ってもビクとも……」

「はぁっ！」

蒼はみつるのとめる言葉を聴かずに軍で鍛えたケリを
クヌギの木にお見舞いした。
枯れ葉が舞い落ち、幹が揺れる。

「こんなもんですかね……」

「す、すげぇ……」

驚くたーくんの前にぼとっと小さな影が落ちてきた。
足を上にして角のある生き物が地面の上でもがいている。

「おっ、さっそく一匹目の――」

「カブトム「しゃくっ！？」

ぐしゃ。

変な声とともに大きな影が降ってきた。

聞いたことのある口癖だなぁ。

……ん？

ぐしゃ？

「いったぁ？い、しゃくぅっ！

もう誰しゃくぅ？

急に木を蹴っ飛ばしたのはしゃく？

あぁん、もう服がよごれちゃったしゃくぅ？……。

ん？

蒼しゃく？

そんなところで何してるしゃく？」

美鶴に問いかけられた蒼は心なしか震えているような気がした。

少し青ざめた顔で美鶴に頼む蒼。

「あ、あ、あの……。

その……立ってみて下さい……」

「しゃく？

ホラ、立ったしゃくよ？」

美鶴のどいた後をみつるがカブトムシを探すが

あの黒い勇姿はどこにもない。

「うへー汁とゴミが大量についているしゃくぅ……。

ばっちぃ……」

美鶴は立つと同時に自分の服を見渡した。
そのままお尻に付いたゴミを払い落とす。
地面に落ちたゴミ。
あの――カブトムシ。

「いやぁあああああああああああっ！！！」

蒼のいろんな感情が混じった叫びが森に響いた。

「ん？
なんか、空が暗くなってる……？」

みつるとたーくんが上を見上げた。
それにつられて俺も上を見る。
赤と青の幾何学模様の浮かんだ艦底。
巨大な主翼と巨大な砲を備えた戦艦。
何千もの銃口と何百の砲門が美鶴に照準を合わせる。

「撃ち方はじめぇぇえっ！！！」

蒼の号令と同時に陽天楼の武装が火を吹いた。
数々の色のレーザーが美鶴を、地面をえぐる。

ズガガガガッガガガッ！！
ドドッドドッドドッドドドドド！！！
ズキュグッガァアアン！！！

「じゃじゃじゃじゃじゃじゃじぃやばばばばばばばっ！！
あぅぅぅん……しゃく……」

美鶴のいた後は約百メートルほどの深い穴に変わり果てていた。

「はぁ……はぁ……。
この顎めが……」

「か、かっけぇ！！
あの艦っ！！」

「あ、あれ蒼ねーちゃんの『ねめしえる』だ」

・　・　・

「あ、おかえり。
どうだった？」

「うぅぅ、詩乃姉様ぁ……」

蒼が詩乃に抱きついた。

「ど、どうしたのさ蒼。
よしよし……」

「うぅ……」

おまけ

「あ、よく考えれば砂糖水という手がありました！」

←

「ふんふんふ～ん♪」

←（翌日）

「さーてどうなったかな？」

←

「甘くておいしいしゃくぅーっ☆」

「……こんのクソ顎がぁ……」

ズガガガガガッ！！！

しゃくでば！　美鶴が時々クヌギの木の上で寝ているよ！（後書き）

ありがとうございました。
いやー、カブトムシをこんな雑にやられたら
たまったもんじゃないですね。
蒼でなくても発狂しそうです。
では。

しゃくでば！　暗闇へようこそ

キーンコーン…

あー朝はねみぃ。
学校に来たはいいんだがあくびが止まらんよ。

「よっ、しゃく、波音！」

そんなだらけた俺の背中に思いっきりバチィィィンと美鶴が。

「いっってぇ！
　て、てめぇ今思いっきり背中叩いただろ…」

ひりひりしやがる。
美鶴はというとふぅと両腕を広げやれやれのポーズ。

「しゃくぅ？こんなの只のあいさつしゃくよ。
　まったく波音はムーバーしゃくねぇ…」

ため息までつきやがった。

「それを言うならオーバーだ！
　てかお前にんなこた言われたくねぇよ！」

「しゃーしゃーしゃくしゃく♪」

聞いちゃいねぇ。

「なんかさ、お前レベルあっぷしたよな」

「それはどーもしゃくっ☆」

きらっとすんな。

「うざさが」

あー言ってやった。

「はぁ？しゃくぅ？
僕なんにもうざくないしゃく。
ただ僕はフルライフな生活を送ってるだけしゃくよぉ？」

もう俺疲れた。
だれか美鶴いりませんか？

・　・　・

「う〜眠い……」

ガラガラとドアを開け目を擦りながらシエラが入ってきた。
と、美鶴がシエラに猛ダッシュ！

「よっ！！
しゃくシエラ！！
おはようのボインタッチしゃくっ☆」

「お前にだけは嫌」

ジュクスゴォ。

おぉ、モロに入りやがった。

「フッ……いいパンチしゃくね……

まぁいいしゃく。

今回はこいつで我慢してやるしゃく！！」

そう言うと（宣言すると）美鶴は近くのか弱い別のおなごの胸を……。

「い、いやっ！や……やめてくださいっ……！！」

おいおいマズイぞ、マズイぞ。

調子に乗りすぎにも程があるぞ。

「調子に乗りすぎだね。仕方ない、蒼、行くよ！」

あ、蒼？

蒼さんですか？

と、天井が崩れた。

空が暗い。

奇妙な模様の戦艦が浮いている。

「いいですよ、シエラ姉様！」

「よし、行くよ！」

「な、何するんしゃく！？

やめるしゃくっ！」

シエラが手を伸ばし、その先にネメシエルから光が一本。
紫の異空間みたいなのが現れる。

「しゃ、しゃ！？」

すると美鶴がぴったり異空間に吸い込まれていった。

・
・
・

「こ、ここはどこしゃくか……」

辺りは血のようなもので染まり、黒い血管のようなものが
壁中に張り付いたひとつの空間に美鶴はいた。
奥からギチギチと音がする。

「しゃぁっ！しゃっ！しゃっ！しゃっ！（走ってるんだよ一応）」

嫌な予感に美鶴はとりあえず走った。
ひたすら続く異空間みたいなのの中を。
だがその美鶴の足を一本の触手が掴んだ。

「しゃくぅ！？」

たちまち手足共々縛られていく。

「しゃくぅっ！！

僕を食べても美味しくないしゃくよぉっ！！
いや、犯しても美味しくないしゃくっ！
犯る相手が　違うしゃくっ！！
犯るならやっぱきゃわいいおにゃのこしゃくっ！
やめてしゃくっ！」

そんな下品な美鶴の声が聞こえてたかどうかは知らないが触手の先が

シャキーン（ˊ・ω・ˋ）

とナイフ状に変化した。

「しゃくぅ！？
犯るじゃなくて殺るしゃくかぁ！？
わぁぁシエラごめんしゃくごめんしゃく！
ごめんしゃ――」

しゃぁぁぁぁぁぁ！！

もちろん続かない。

しゃくでば！　暗闇へようこそ（後書き）

いやぁ、本当にありがとうございました。
実際どうなんでしょうか、しょくしゅ。
謎であります。

しゃくでば！　みんなもエコしよっ！

時はやはり夏。
深い意味はない。
蝉が鳴いている。
その中をワンピースに身を包んだ少女が
ビニールの中に大量の食品を入れてさまよっていた。

「あ、あつい……。
詩乃姉様、分かってて私をお使いにいかせましたね……」

もうお分かりいただけただろう。
超空要塞戦艦ネメシエルの核。
空月・N・蒼さんだ。

（BGM　はじめてのおつかい）

～♪
～～♪

「……うるさいっ！！」

空からどこからとも無くビームが飛んできておいてあるラジカセに命中する。
でっかい穴が開きました。

「嗚呼、重い。
重いし、暑い、暑すぎます。
あの公園でちょっと休憩……しましょうか……」

汗が地面に点々と水滴を残す。
夏だから暑いのは仕方ないな。

・　・　・

「よう」

俺颯爽登場。
とはいってもＹシャツをだらしなくズボンから出して
団扇で顔を仰ぎながらだが。

「なんという意外な組み合わせ……。
何でここに？」

意外言うな。
確かに意外な組み合わせだけど。
俺と蒼さんはなんだかんだであまり面識がないからなぁ。
それよりも俺はついさっき悟った出来事を皆さんにお伝えしたい。

「実はな。
この『しゃくでば！』は俺がいないと成り立たないことに
ついさっきアイス食ってるときに気がついたんだ。
それでいやいやながらもここに来たと。
案の定蒼さんいるし」

「……へ？」

「もっと正確に言おう。
このお話をとあるウェブ上に書く人が困るということなんだ」

蒼はあぁ……というように頷いた。

「つまり、波音さんの近くには必ず
あのクソ顎が登場するというわけですね？」

ぐさっと来た。
分かっていても厳しいものがあるのだ。

「……そうだ」

「コ●ン君体質なんですね？」

ぐぬぬ。
認めたくねぇ……。

「……そ、そうだ……（泣）」

「帰ります……」

蒼はぱんぱんとお尻に付いた汚れを払い
ビニール袋を両手で持った。

「待って！
きつい、精神的にも話の流れ的にもきつい！！」

・　・
・

・

夏風に身を任せる。
そろそろ涼しくなってきてもおかしくない午後四時。
公園で二十分ほどのんびりとしているわけだ。

「……クソ顎来ませんねぇ……」

蒼がぼそりと呟く。
いいんだよ、来なくて。
ってか来ることを望むんじゃねぇ！

「あぁ、ハトとガキしかいないなぁ……」

きゃっきゃと公園の噴水の水の中で
べたべたにぬれながらはしゃぐ子供達。
ハトもでぽっぽーでぽっぽーとよちよち歩いている。

「ふと思ったんですが……」

蒼さんが俺をキラキラした目で見た。
何か良いことでも思いついたのだろうか。

「ハトにＢＢ弾食べさせたらどうなるんでしょうか？」

何この子怖い。
クルッポークルッポー。
ハトは平和の象徴とか言われてるけど
糞とかで町を結構汚すよな。
クルッポークルッポー。

クルッポーシャクルッポー。
ん？
違和感を感じた。
「おい、今何か聞えなかったか？」
蒼に話しかけた。
「へ？」
俺の団扇で顔に風を当てて涼んでいた蒼は
何を言っているんですか？と言いたげに聞き返してくる。
「いやだからさ……」
シャクルッポーシャクルッポーシャクルッポー。
「……」
なんてこった……。
目の前にハトのコスプレをした一隅突出型顔人間が存在していたのだ。
目を合わせたくない。
ってかむしろ頼むから消えてくれ。
ディサペヤーしてくれ。
「シャクルッポー！（お豆をくれしゃくー！！）」
いやそうは聞こえねェんだけど
物語の進行上しかたねぇんだよな。

俺の耳がおかしいとかそういうわけじゃねぇんだよ。

「ママー変なのがいるー」

六歳ぐらいの男の子がとたとたと母親の元にかけていった。
俺でも怖いんだから男の子には刺激が強すぎたに違いない。

「お、お家に帰りましょケンちゃん！
ほら早くいらっしゃい！」

「シャクルッ！シャクルップー！！
（待って！待ってくれしゃくぅ～！！）」

いらっ。
俺は立ち上がると美鶴のケツに思いっきりけりを入れた。

「シャクルＰＯＯＯ！！！」

悶絶するハト顎人間。

「おいアホ何やってんだ」

「シャクルクルシャクポッポー！！」

「日本語でおｋ」

・　・　・

美鶴はハトの衣装を脱ぐといつもの衣装に着替えた。
そしてぽつりぽつりと話始める。

「今日ママがお仕事で北海道に……うぅっ……。
出張に行っちゃったんしゃくぅぅぅ……ずずっ」

んなことでいちいち泣くなよ。
ガキか。

「ママって……」

蒼、そういうところは突っ込み始めると止まらないぞ。

「それでッ……食べるものがなくてっ……しゃくぅ……」

普通はお金と一緒に何かメモがついてて
何かこれで食べてねはーとみたいな感じで置いてあるだろ。

「チンして食べてね☆みたいなのなかったんですか？」

やれやれと呆れ顔で蒼がたずねた。

「それがしゃくぅ……」

美鶴はごそごそとポケットから一枚のメモのようなものを取り出した。
書置きだろうか？
なんだ、あるじゃん。

『大変おいしくいただきました。

ｂｙゴキブリ（ジミー・トミー・サミー）
ネズミ（トム・マンティ・コジロウ）』

ｏｈ……。
なんとそれは居候からのお手紙だったのだ。
全て……言いたくないんだがフンでかかれている。
当然臭い。
思わず足の先でメモを蹴り上げてしまった。

「しゃぐぶっ！！」

あ……。
書置きが美鶴の顔に命中。
そんなことより

「うわ――きたね――」

裏側を蹴ったとしてももし水分みたいな成分が
滲み出していないとは限らないからな。
靴の先を念入りに洗う。

「は、早く代わってくれしゃくぅ～！
前が見えないんしゃくぅっ！！」

ふらふらすんな！
お、おい。
そっちには蒼さんが……。

「ひぃっ！！
こっちに来ないでくださいっ！！」

大量のレーザーが美鶴を木っ端微塵にした。
しゃぁぁぁあぁぁぁ……。
・　・　・
「というわけで何か食い物をくれしゃく！！
もうお腹がすいて死にそうしゃくぅ～波音～」
俺の名前を呼ぶな。
「自らの顔を食料として提供してくれる心優しいお方が
現れることを祈っているぜ！」
ぐっと親指を立てて美鶴を突き放した。
かかわりたくない。
「しゃくぅ……蒼ぉぉぉ！！！！」
「一枚のじゅうたんからたくさんの食べ物が出てくる
夢のような道具を出してくれるような方に出会えたらいいですねっ☆」
蒼もにっこり笑って美鶴を突き放した。
おそらく深いところでは俺と同じくかかわりたくないという
心情が働いているに違いない。
それにショックを受けたのか静かになる美鶴。

珍しい。

「……しゃくぅ？
　蒼ぉぉ……あの袋はなんしゃぁぁくぅぅ？（ニタァァァァ）」

顔怖っ！
蒼の顔から血の気が引いた。
見つかっちまったな。

「た、ただのエコバックですよ！！」

必死の弁解も美鶴には通じない。
見てしまったのだ。
中に入っている花園を。

「食い物くれしゃくっ！！！！（くわっ！！）」

唾を飛ばすな顔でかくするな近づくな。
それに対して蒼は

「そ、そんな言い方だと警察呼びますよっ！？
　というか呼びたい、呼びますっ！！」

蒼は手を電話の形にすると耳に当てた。
おそらくネメシエル経由で警察に電話しているのだろう。

「お願いしましゃぁぁあぁぁぁぁくっ！！！！
　蒼さまぁぁあああああああああっ！！！！！」

美鶴は秘技『スライディング土下座』を覚えた！

・・・

「えーと、豆豆……」

蒼はやれやれとビニール袋まで歩いていくと
中をごそごそしはじめた。
豆？

「な、なぁんで豆なんしゃくぅ！？」

「さっき『お豆をくれしゃくー！』って言ってたじゃないですか」

通じてたのかよ。
俺だけじゃなかった、マジでよかった。
画面の前の諸君。
もし通じていたら結構やばいかもしれないぞ。

「あ、ありました！」

蒼は袋から一つのプラスチックケースを取り出した。
山椒と文字が書いてある。
読める方は多いと思うけど一応読み方を言っておこう。
さんしょうだ。

「さんｓ……じゃなくて、黒豆です！」

嘘つきやがった。

何をたくらんでやがる。

「わーいしゃくぅっ♪」

お前もお前で気がつけよって話しですよ。

えぇ。

「蒼、お前……」

俺の苦しい突っ込みも虚しく空に消える。

「さぁたんとお食べくださいっ☆」

美鶴は両手一杯に山椒――もとい黒豆をとるとくんくんと臭いをかいだ。

「かわった臭いしゃくねぇ……」

気づかれたんじゃね？

「はい！

それはディンギス・マルグーレンというところで取れた特別なとっても貴重な黒豆なんですよ♪（当然嘘）」

美鶴はそれを聞いてぱぁっと顔全体を輝かせた。

どんだけ単純な男なんだ。

「何はともあれようやくご飯にありつけるしゃくぅぅっ！！

いただきまーすしゃくっ！！」

両手一杯の黒豆（仮）を頬張る美鶴。
そして
「じゃァァァァァぁあああああああああああああああぁぁ！！！！！」
山椒の実は小粒でもぴりりと辛いのだ。
・　・　・
「るんたったーりぁーうぃーあぁーざわぁーるど！
うぃあーざちるどれぇぇん……」
シエラがチャリに乗って町を駆け巡っていた。
「うぃあーざ……？
ん、何だ？」
何か不吉なシュルエットがピクピク痙攣しながら
公園の入り口でうつぶせになっている。
美鶴だ。
「な、何やってんの、お前……」
チャリのブレーキをかけ美鶴の頭付近で止まるシエラ。
「しゃ……しゃ……ヒューヒュー」

美鶴が顔を上げた。
それを見たシエラの不快指数が少し上昇する。
醜い……っていうか唇がすごくはれている。

「げっ……すごい腫れてる……。
てか何でお前そんなに黒こげなんだ?
それになんでいつもよりさらに痩せてるんだ?
骨見えてるぞ?」

「しゃふぅ……」

「それにしても今日は暑いな。
まさかと思うが辛いものでも食べたんじゃるまいな?」

「み……み……」

腫れた唇の隙間からかすかに言葉が発せられる。

「?
何?」

「み、水を……くれしゃく……」

「水?
あー、飲みかけのしかないや。
ま、これで勘弁してくれ!」

シエラはペットボトルのキャップを捻って空けると
それを美鶴の上から降りかけた。

「よし、これで少しはマシだろう？
じゃ～な～はっはっは……」

お前も相当な悪魔だと俺は思うよ。

「しゃ……く……」ガクリ

（翌日）

がらっと教室のドアを開けて美鶴が入ってきた。
あいさつをしようとそっちを振り向いた俺の目に
なんとも奇怪な様子が飛び込んできた。

「何、お前その頭ｗｗｗｗｗ」

思わずｗをつけてしまうほどの現象。
そう、美鶴の頭から双葉が大量に生えていたのだ。
山椒の種だろうか。

「う、うるさいしゃくっ！！！」

ＥＮＤ　つづくかも

しゃくでぱ！　みんなもエコしよっ！（後書き）

ありがとうございました。
今気がついたのですが不自然なところにある?は
もともと~や?など特殊な記号でした。
なにやら不都合により?になってしまっております。

もし変なところに見つけたらあぁと納得してください。
がんばって治していきますゆえ。

では。

しゃくでば！　まぁどこかの部分に使わせてもらいますよ。

「波音、波音！！
一緒に帰るしゃくよ！！
校門でまってるしゃくからね！！」

タッタッタッ……と駆け出して行ってしまった。

「は？
え、おい、ちょ！？
あ、あぁ……えぇ……？」

そう、このとき俺は思わなかった。
まさかあんなことが……。
そしてこの去っていく美鶴が俺が見た
最後の美鶴になるなんて……。
約二十秒後の姿がコレだ。

「しゃ……しゃ……」ピクピク

こんな短時間でリンチに数回あって
もう目も当てられないんだよ。

・　・　・

君は考えたことがあるだろうか？
どうして、うちのクラスは美鶴をいじめないのかと。

それはこのクラスがおりこうさんだからだ。
まぁ一部の女子は恐れているんだが。
しかし、他のクラス、または世間様はそう甘くはない。

「ったく、わけわかめなんだけどアイツ。
何で一緒に帰ることになってんだよ、ハゲ」

しぶしぶ教室から出て校門に行く。
まぁ仕方ない。
コレも美鶴が主人公である限り俺の宿命なのだ。

「もうやだ。
泣きたいわ、俺。
そもそも俺の立ち居地に何で他のヤツが
つかなかったんだっていう。
シエラとかでもよかった気がしてならねぇんだが」

まぁこんなこと言っても代わる訳ないので。
玄関で靴を履いて校門にたどり着いた。

「げ、マジでいる。
しかもあの鞄を両手でもってうつむく姿勢。
昔の恋愛ゲームとかでよくあるシュチュというか
持ち方？
待ちかたじゃねーかオイ」

裏から帰ろうかな。
正直関りたくないんだよ。
と、肉を打つ音が。
バキッと。

「ん？
何の音？」

「じゃぐぅっ！！
ぼ、僕は何もしてないしゃくよぉっ！
やめてしゃくぅっ！
お願いしゃくっ！！」

美鶴が他のクラスの奴らにリンチにされていた。

「っせぇ！！
てめぇの顔見るとむかつくんだよ！！」

うわ、あの顎ついにいじめられてるよ。
しかも小学生みたいな理由で。

「やめてほしけりゃ金だしな、金」

あ、そこは中学生っぽい。

「しゃくぅ……」

「あぁ？
たった千円？
ちょっとジャンプしてみろよ」

「こう……しゃく？」

チャリンチャリン。

あ、こいつおばかだ。

「まだ持ってるやないけー！！」

綺麗なあっぱーが美鶴にヒット！

「僕は人を待っているだけだったしゃくっ！！
な、なんで攻撃してくるんしゃくかぁ！？」

「だから、てめぇの顔がむかつくんだよ！」

そして再開される攻撃。
人を待つ……か。
俺のことだよな。

「痛いしゃくぅっ！！
やめてくれしゃくぅっ！！！」

「ははははは！！！
おいマジでこいつ無抵抗だぜ！！！」

……っ！

「波音っ！
早く来てくれしゃくぅぅっ！！」

その悲痛な叫び。
俺は耐え切れなかった。

「おいてめぇら」

俺は不良三人にガンをつけてしまったのである。
うわぁやっちまった。

「あぁ？
なんだてめぇ？
まさか波音とかやらはてめぇか？」

「いかにも」

だせぇ。
俺だせぇ。
いかにもってなに。
侍？
武士？

「しゃくっ！！
波音！！」

「すまんな、美鶴。
なんか悪いことしちまったみたいで」

あぁ顎すりむけて……。
あぁ顎……。
顎……。

「てめぇもこいつの仲間なんだろ？
許して欲しかったらほらジャンプしろよ」

「するか、モヒカンハゲ。

ほらいいからかかって来い」

俺は鞄を投げ捨て戦闘態勢に入った。
敵は三人。
たいしたことはない。

「おらぁっ！！」

まず一人目。
相手が殴りかかってきた瞬間に体をかがめ避ける。
そしてすかさず下からの追撃。

「砕け散れクズ」

クリーンヒット！
一人目は大きくぶっ飛んで地面に大の字になって倒れた。

「てめぇっ！！」

二人目と三人目は同時に来るようだ。
ふふん、その程度で……。
ってうぉっ！？
棒持ってる！

「痛っ……！」

腕で右をガードしたものの左からの攻撃が
俺の頭に傷をつけていった。
ぬるりとした液体が目まで垂れ下がる。
――血かよ。

「ふん、ざまぁ見ろ」

俺はその言葉にイラっときた。
腕でガードした右側の不良にすかさず蹴りをぶち込む。
当然避けられるのは想定内。
すかさず油断した左側の鳩尾に一発叩き込んでやった。

「うぐっ……」

倒れた左側の頭を蹴り、脳震盪ざまぁ。
泡をふいた左側の棒を奪い取り右側を挑発する。

「来いよ」

「くそがぁっ！！」

叩き込まれた棒を左腕で弾く。
棘が刺さったがそんなものはどうでもいい。
開いた隙を狙い右腕の棒を思いっきり振り下ろした。
棒が相手の頭に当たり折れるほどの衝撃で。

「ぅ……ぁ……」

コレで全員か。
たいしたことなかったな。

「は、波音……」

「美鶴、ほら帰るぞ」

「で、でも波音……血が……」

「アロンアルファぬっときゃ治るだろ。
ほら、帰るぞ。
立てるか？」

俺は美鶴の肩を持ちながら校門から出た。

「すまんな、美鶴。
助けるのが遅れちまった」

「だいじょうぶしゃくよ。
それより波音の方が……」

「いいって。
別に」

「……しゃふっ♪」

なんだよ笑うなよバカ美鶴。

「んだよ気持ち悪いな」

「これからも波音、友達でいてくれしゃくっ！」

「……。
……。
――――嫌」

「え……？
しゃ……」

しゃぁあああああああああああああああああああああああッ！！

つづくかも～

しゃくでば！　まぁどこかの部分に使わせてもらいますよ。（後書き）

ありがとうございました。
波音さんのひさびさのバトルシーンってかあれですね。
しゃくでば！でやるなって話ですよね、ごめんなさい。

許してください。
今日は晴れでした。
良い天気です。

しゃくでば！　え？熱？なら俺の情熱の熱で……

ピピピピッ

３７度５分。

俺は体温計をシエラに渡した。

「軽い熱だね」

ふうと安堵のため息をつくシエラ。

「ここ最近お仕事続いてたからねぇ……。
仕方ないね」

メイナが俺のおでこを触りながらのほほんと言った。違う。
ｄｉｆｆｅｒｅｎｔだ。
この熱は確か……。

「たぶんあれだ…そうだアレだよ！
シエラ！
お前ふざけて俺を海に落としたりなんかするから！」

シエラは頭に一瞬ハテナを浮かべたもの

「え　？
あ…あー…」

ちょっと気まずい表情になった。

「そうだ思い出した……。
立派な原因はあんただよシエラ。
責任持って今日は波音のかん―」

「姉さん！！！！」

シエラが急に遮った。
なんだ、どうしたんだ？

「え……？」

ほらメイナも困惑してる。

「今日は学食のチョコバナナラーメンが半額の日だよ！！」

シエラは両手を叩き合わせた。

「なん…だと…？」

メ、メイナ？

「しかも2人組で注文すると某スポンジ状生命体のおもちゃストローがついて来る！！」

「決行だ…！行くよシエラ！」

お、おい、マジかよ。
待て。

「じゃ～に～波音～ちゃんと休んでおくんだよ～」

シエラは扉から出る直前最後に俺に含み笑いをした。策士……。

「え…ちょ…おま」

バタン……

俺は……。

俺は……。

チョコバナナラーメンというかなりマニア向けの食い物とスポンジ状生命体に負けたらしい……。

なんてこった……。

ラーメンならわからんでもないがまさかあの食い物に負けるなんて……。

「はぁ……」

まぁ一人もたまには悪くないが。

窓から外が見える。

綺麗な青空だ。

あぁ段々眠くなってきた……。

・　・　・

ピンポーン。

ピンポーン。

ピンポーン。

目を開けた。
寝てた。
今何時だ？
ん？
チャイムなったよな？
誰か来たのか？
シエラかメイナ、忘れ物でもしたのか？
満足に回らない思考を頑張って回す。
セズクか？
まさかなぁ。

バンッ！！！！！！

勢いよく扉が開いた。

「波音！
大丈夫しゃくか！？
しっかりするしゃくぅっ！！
死んじゃ嫌しゃあああああああくっ！！！！！！」

嗚呼やっぱりこいつか。
う、うるせぇ……。
てかなんでお前ここにいんだよ……。
帰ってくれ、今は疲れた。

「波音が風邪だとシエラから聞いて駆け付けてきたしゃくっ！」

美鶴は鼻からふんぬと息を吐いた。
空気汚れる。

「だからってわざわざ学校抜け出してまで来なくてもいいだろ。
帰れよ……迷惑だし」

誰に迷惑なのかは言うまでもない。
俺だ。
俺は右手だけ布団から出してひらひらさせた。

「ダメしゃくっ！！
風邪はひき始めが肝心なんしゃくっ！
このまま放っておくとカノーしてインフルエンザになっちゃうしゃくよ！！」

美鶴は俺のひらひら右手をぱしんとはたき落とすと右人差し指を立てた。

「いや、色々間違ってるからそれ。
ホントに俺一人で大丈夫だから。
子供じゃねぇんだし。
頼むから触らないで……」

ピトッ。

「――――――っ！！」

いきなり美鶴が自分のおでこを俺のおでこにくっつけてきた。
女の子ならおいしいイベントだがよりによってこいつとなると……。
あと少しでキスするとこだったぞ……？
鬱だ。
後で風呂入ろう。

風邪とかまじどうでもいい。
風呂。

「まだこんなにあるじゃないしゃくかぁ！！
しっかり寝てないと駄目しゃくよぅっ！！！」

耳にキンキン来やがる。

「わかった…わかったから耳元で叫ぶな…しばらく一人にしてくれ…」

俺は寝返って美鶴に背を向けた。
もうやだ。
嫌い、美鶴。

「しっかり寝てるんしゃくよ！？」

最後にダメ押しして美鶴は部屋から出ていった。

「ふぅ……。
やっと寝れる……」

俺はため息をついて布団の中で目を閉じた。
大体一分ぐらいたっただろうか。
扉が開いた。

「よしよし、寝てるしゃくね」

扉が閉じた。

「……」

また一分たった。

扉がゆっくり開いた。

「しゃーくしゃく、寝てるしゃくね」

扉がゆっくり閉じた。

「……」

またまた一分たった。

扉が金属音を立て開いた。

「しゃぁくしゃく、ちゃんと寝てるしゃくね！」

俺の導火線に火がついた。憤怒の炎だ。

「うっぜぇんだよてめぇ！

何がちゃんと寝てるだコラァ！！

んな1分おきに様子見に来られて寝れる馬鹿がどこにいんだよ！！！

邪魔すんならとっとと帰れ！！！

ハゲ！」

捲し立てた。

「ひっしゃくぅ！

ご…ごめんしゃくぅ……」

扉が金属音を立て閉じた。
ったく……。
う、叫びすぎたか…頭がクラクラする。
でもあいつにはあんくらい言わなきゃ聞かねぇしな……。
まぁいいや、とにかくこれで安心して寝れる……。

・　・　・

コンコンコン
う……ん？
眠りの水槽からゆっくり出た。
「波音～…お粥…作ってきたしゃくぅ…」
美鶴がお盆を持ってひっそり佇んでいた。
「またそんな……。
――今食欲ないからいいわ。
後で食うからそこにおいといｔ――」
「駄目しゃくよぅっ！！！
食べて体力つけないと死んじゃうしゃくよぅっ！？
波音が死んじゃったら…ボク……う〝ぉく…しゃ……う〝ぅうっ……」
俺は美鶴から差し出されたスプーンを握った。
早く食ってまた寝よう。

「あーわかった。
わかったよ。
泣くなって泣きたいのは俺だよ、ちくしょうが。
食べる、食べるから……うっ！？」

やばい。
匂いからしてすでにやばい。
なんか食器洗う洗剤やら塩やらコショウやら
何やら色々混じってカオスな匂いが混じって俺の鼻孔を突っついている。
そう、それは一言で言うと……。
人間の吐瀉物……。
そうゲ○のような……。
俺はスプーンを置いた。
本能が告げている。

「どうしたしゃく？」

「やっぱいいわ……本気で食欲ない」

これを食うと俺死ぬ。
それをどう勘違いしやがったのか

「しゃくっ！？
熱くて食べられないんしゃくね！？
じゃあボクがフーフーしてあげるしゃくっ！
しゃふぅー…しゃふぅー…はい、あーんしゃく」

美鶴はフーフーした死のお粥を俺に突きつけたのだ。

「いい！
いいからマジで！！」

全拒否。
リジェクトだリジェクト。

「いいから食べてしゃくっ！
ボクが腰を振るって作ったんしゃくから絶対おいしいしゃくよ！」

こ、腰……。

「それを言うなら腕を……。
いやンなこたどうでもいいんだ。
ホントに食いたくないんだそっとしてといてくれ。
頼むから。
六十歳超えるまで絶対使わないと決めてた
『一生のお願い』使うからやめてやめて、やめろおいごら」

むぐっ！？
押し込まれた。
強引に。
一気に喉に。
お粥もどきが。
いや死のお粥が……。
俺の喉に。
腹に。
入って……。

「く……ググググ。

ぎぎ……ぎぎぎぎぎ……」

「しゃく……？
は、波音どうしたんしゃく！？
様子がおかしいしゃ――」

「キセノンシンゲリータァモヅリアーゲッ！！」

俺は狂った。
クレイジった。
美鶴が作った死のお粥が俺の胃と脳に変な刺激を与えたのだろう。
覚醒剤を投与しすぎた人間とほぼ同じ感覚で狂った……らしい。

（後で聞いた話だからな）

「は、波音、波音！！
落ち着くしゃく！！
落ち着くしゃく！！！」

「シエラレオネマンモーリヘリアッ！！」

唯一覚えているシーンだ。俺は派手にお粥を美鶴に投げつけたのだ。

「うわっしゃく！！」

お粥もどきが創造主に帰っていく。
綺麗な曲線を描いて覆いかぶさるように……。

「熱いしゃくううううううううううううううう！！
！！！！！！！！！！」

・・・

「う……しゃく。
ボ、ボクは今まで何を……？
そ、そうしゃく……。
波音にお粥を作ってあげて……？波音が変になってしゃしゃくっ！？」

二時間後、狂い疲れた俺は気を失った形で美鶴に発見された。

「波音！！
波音！！
しっかりするしゃく、波音！！」

「玄関には靴が1足脱ぎ捨ててあるわ
台所はぐっちゃぐちゃだわ戸棚は荒らされてるわ……」

「誰の仕業かと思ったらお前だったんだねぇ？
……顎？」

どうやらメイナとシエラが帰ってきたようだ。
素直に喜びたいところだが残念ながら俺の精神は今何処かへ行ってしまっている。
本当に残念。

「さしずめアレだろ？
金がなくなってこの家に忍び込んで家の全財産を盗もうとしたん

だろ？
僕達は外出中。
それに波音は病気で弱っている身。
お見舞いという非常に都合のいい口実もできたってもんだ」

「しゃ、しゃくっ！？ちっ、違うしゃくよぉ！！
ボクはただ本当に波音の看病を……」

「今までわいせつやら窃盗やら様々な犯罪を犯して
警察のお世話になることが日常茶飯事の言い訳を誰が信じると言うのかなぁ？
ねぇ？」

「ほ、本当なんしゃくぅ！！信じてくれしゃくぅ！！」

「そして弱ってることをいいことに波音を……。
許さない。
絶対に許さないっ！」

「人それを『外道』と言うんだよ？
覚えていおいてね？」

「しゃ……しゃ……」

しゃあああああああああああああああああああああ！！！！！
ああっ！！！！
あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！
んお〝あ〝あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……！！！！！

そして、午後五時ぐらい。
「うぅ……」
俺は、ぼんやりした意識を取り戻した。
「あ！
波音！
気がついた!?」
シエラが俺の顔を覗きこんでいた。
「大丈夫!?
どこも痛いとことかない!?」
シエラの声に引っ張られメイナも俺の隣に座る。
「あ、あぁ。
もう大丈夫……だと思う」
なんか確信がない。
「よかったぁ……」
胸を撫で下ろすシエラ。
「ごめんね?
私達が自分の欲望のままに波音置いて学校行っちゃって……」
「うん。

ちゃんと僕達が最初から今日一日看病していれば
こんなことにならなかったんだもんね……」

いや、お前今日一人で俺看病することになってただろ？
なんだ？
もう忘れてんのか？
まぁ過去はどうでもいい。
それはそうと……。

「？
なんでこんなこと？
それになんだそれ？」

「波音……覚えてないの？」

メイナはシエラと顔を合わせた。

「は？」

「波音、僕達がいない間に空き巣に襲われたんだよ。
どうやら僕達がいない時を狙ったらしくて……」

シエラはおそるおそる切り出した。
ほぉ。

「へえー。
そりゃぁ危なかったな。
ひょっとしたらそれ空き巣じゃなくて敵軍の刺客じゃないの？
連合郡の」

「いや、普通に弱かったからただの空き巣だよ」

俺は運がよかったのか悪かったのか……。
ちょっと待て。
そういや誰かに俺、昼間看病してもらってなかったっけ？
おかしいな？
思い出せねぇ。
夢だったのか？
俺は体を起こして辺りを見渡した。

「って、なんだこの血の痕はぁ！！」

「いやぁ～……ついつい派手にやりすぎちゃって……」

てへ、と舌を出すメイナ。

「後のことも考えろよ！
呪われた部屋みてぇじゃねえかよ！！
もう俺今夜からおちおち寝れんわ！！」

「大丈夫大丈夫！
この洗剤があればちょちょいの……」

酸性か。
大丈夫なのか？
壁紙剥がれたりとかするんじゃね？

「姉さん！
こっちの洗剤も混ぜてみたら強力になりそうじゃない？」

シエラ……？
待て、おい。

「シエラったら頭いい！！
それじゃ早速……」

「だめえええええええええええええええええええええええ！！」

こうして夜は更けていくのだ。
てかあんなに血の痕が残るほどやられたのか、空き巣。
無惨だなぁ……。
哀れむ必要がなくても哀れんじまうわ。
俺は空き巣の人にささやかな黙祷を捧げ、再び眠りについた。

そして翌日。

担任の桐梨が出血……。
いや、出欠を取る。
いや、こいつならやりかねんけど。
怖いし。
生徒指導のお方だからな。

「灼場山～？
あぁそうだったいねぇんだったな。
なんでもな？
全身打撲やら複雑骨折やら内臓一部破裂やらで全治三ヶ月はかかるそうだ」

ひょぇ～、なんだそれ。
おっかねぇ。

誰かに襲われたのか？
まぁそんな重症を一気に負わせられるのはウチの最終兵器姉妹ぐらい……。
ん？
あ……。
あぁー！！
思い出した。
そうだ。
俺は奴に看病されて……。
変なお粥で頭狂って……。
そうか、美鶴。
あの姉妹から誤解を受けてボコボコにされたのか。
気の毒に……。
本当に気の毒に……。
あいつはあいつなりに誠意を持って俺を看病してくれたんだ。
おせっかいですげぇウザかったけど！
お粥死ぬほどまずかったけど！
それでも看病するあいつの心は
俺に元気になってほしいという気持ちしかなかったはずだ。
直接看病された俺だからわかる。
それを誰からも感謝されず
殴られて大怪我を負うなんていう結末になっちまうなんていくらなんでも理不尽すぎる。
今回悪いのは俺らの方なのかもしれない。
まぁ確かに信用性がなかった美鶴も多少は悪いかもしれないがそれくらい許してやってもいいと思う。
正直嬉しかった。
少しだけ。
本当にほんの少しだけな。
美鶴だし……。

誰だ、今思ったヤツ。
別にデレてねぇ。

・　・　・

「というわけでお見舞い行くぞ」

「えぇー？
あんな顎のお見舞いなんか行くの？」

「いいか？
よく考えてみろ。
今回の怪我の原因はお前らの誤解なんだぞ？」

「あ、そっか」

「あ、そだシエラ、一旦家かえろ！
波音は何か適当なもの買って美鶴の家行ってて」

「あ、あぁ……」

何するんだ？

・　・　・

美鶴のお家

ピーンポーン。
チャイムを鳴らす。
……。
いねぇのか？
鍵は……開いてるよな？

「はいはいしゃ～くぅ」

「！？」

なんと美鶴が出てきた
立ってる。
二本足で立ってるよ。
しかも包帯巻いてるの頭と右腕のギブスだけかよ！！
紛らわしい……というか……。
異常過ぎる回復力だな。

「お前全治三ヶ月って……」

おそるおそる話しかける。
だって怖い。
なんか怖いもん。

「いやぁーそれが思ったより早く治ってきてるんしゃくよぉ～！
お医者さんもびっくりだったしゃく！！」

恐るべし　美鶴の回復力。
これがギャグキャラの力なのか――？
今月号で爆死して来月号ではケロッと登場してるアレ。

よくあるよな？

「んんん？
お見舞いしゃくかぁ！？
ありがとうしゃくぅぅぅぅぅ！！！」

俺の両手のビニール袋を見やがったな。
結構色々買ったんだ。

「いや……ホラ。
ウチのバカ姉妹がやったことだしさ。
一応義理としてな？」

「ありがとうしゃく！！
あー！
ボクの大好きなコーシー（コーヒー）しゃくぅー！
波音！
一緒に飲もうしゃくぅ！！」

「それ一本しかねえから・・・飲み物・・・」

「回し飲みｓ――」

「あーっ！
もうこんな時間！
夕飯の支度しねぇと！！
じゃあな美鶴！」

ビニール袋置いてダッシュ！！
家を出るとき親指立ててておいた。

「あ……しゃく。
まぁいいしゃく。
このコーシーはボク一人でじっくり味わうことにするしゃくっ！」

ずぞぞぞぞーーー……。
俺はその時まだ知らなかった。
美鶴が大の甘党で苦いものや辛いものが大嫌いだということを……。
コーヒーなんてミルクと砂糖たっぷりの奴しか飲んだこと無いということを！！

「んんんにっっっっっっっっがあああああああああいしゃあああああくっ！！！！！！！！！！」

「おーもだえてるもだえてる」

少し離れた位置からも聞えるぐらいの悲鳴だったな。
俺は少しの満足感を胸に帰路へ足を進めるのであった・・・

つづくかもぉ～～～～

☆あふた～すと～り～だよ！お兄ちゃん！

「これ……。
この前の怪我のお詫びに作ったんだけど……。
た、食べてくれるよね？」

しーんと静まり返った教室の中
メイナの声が響いた。

「しゃごくりっ。
で、でもメイナの料理は……」

少しは学習した美鶴が断ろうとするのをシエラが遮った。

「大丈夫、僕も手伝ったから！
爆発する可能性は1割ぐらい減ったはず！」

「しゃく！？
それなら安心しゃくっ！！
いただきま～すしゃく！！」

美鶴はメイナのから揚げを口に運んだ。
それを少し離れたところから見る俺と仁。

「なぁ、波音。
作家は物語のオチを決めるのに悩むと高確率で爆発オチになる…
…らしいぞ」

ほぉ。
そりゃまたなんでだろうな。

「ささやかな豆知識をありがとう仁。

本当かどうかは知らんが……」

俺はオレンジジュースをすすった。

ドカアアアアアアアアアアアアアアアアアアアン！！！！！！

しゃあああああああああああああああああああああ！！！！！

「な？」

「うぉっ、まじかよ！？」

しゃくでば！　え？熱？なら俺の情熱の熱で……（後書き）

あざっした！
いやー、風邪ってつらいもんですな。
たまに引くんですがあれはつらい。
インフルの方がつらいですが。

風邪は学校を休める意味で大好きです。

しゃくでば！　～生徒会長は天使ですか？神ですか？～

今日は６時間目から生徒総会。
一般生徒にとっては全くの時間の無駄だと俺は思う。
……いや、これは戦いなのだ。
睡魔とのスーパースリープ大戦αなのだ。
お、早速死人が出た模様だ？
誰だろうか。

「しゃあぁぁあんごごごおおぉぉぉおお～……」

今回は豪快にいびきまで……。
それを察した桐梨が美鶴のもとへやってきた。
いつものように生徒指導へ連れて行くのか？
と思いきや美鶴の鼻の穴になにかをつめたようだ。
あれは――コルクか？
あのシャンパンとかの蓋みたいなやつ。

「ふんが・・・ふがしゃっっっっっぽおぉうぅんっ！！！」

鼻水にまみれた木のコルクがシエラに飛んで行く。
シエラが避けた。
メイナの所に行く。
メイナも避けた。
そこでコルクは軌道を大幅変更し何故か出刃の元へ。

ぱくっ。

ｏｈ！？

食った……。
食いやがった……。
出刃もどうやら寝ていたようだ。
寝ているとき特有の筋肉の弛緩によって
口がダストシュートのように開いていたようなのだ。

「むがっ！！！
むっぅつぅ！！！！
むぼぼおおぉぉっ！？！？！？！？！」

「それでは、生徒会長の理伊田誠君からの閉会の言葉です。
お願いします」

あーそろそろ終わりのようだ。
美鶴もお目覚めだろうな。

「あー！
おっぱいしゃくぅ～！！」

おきていきなりなに言ってんだ。
もみもみもみもみ……。
しかも揉んでやがる。
まぁ

「な、何するでごわすかぁ！？」

どうでもいいがそいつは相撲部の奴だぞ。

「いやぁ～終わった終わった……！」

シエラがうーんと伸びをした。
おはようございます。

「まだ眠いしゃくぅうぅ。
しゃふわあぁぁぁぁああ……。
しゃむにゃむにゃむ……」

お前はまともな欠伸できないのか？

「もうこんな退屈なの勘弁して欲しいしゃくぅ～。
なんとかしてなくせないんしゃくかねぇ～？」

美鶴は退屈極まりないしゃくぅと顔をしかめた。

「そんなの生徒会長にでもならないと無理だろ？」

俺も俺で暇で仕方がなかったけどな。

「何しゃく？
せーとかいちょーって？」

「お前、ちゃんと中学校行ってたんだよな？
いや、小学校でも学級委員長とかあっただろ？」

知らないなんてそんなことあるのか？

「しゃく？」

あぁ、知らないんだな。
ってかさ。

「いや、そんなぽかんとしなくていいから。
その萌えキャラしかやっちゃいけない表情しなくていいからキモいから」

「生徒会長……。
それは学校の制度を見つめ、生徒を見つめ、容姿を見つめ――。
自分と生徒の理想の姿を形成するために選ばれし代表者。
それが、生徒会長でっぱ……！！」

俺の後ろからにゅっと出刃先輩が現れた。
あんた神出鬼没だな相変わらず。

「つまりどういうことしゃくぅ？
むじゅかちいことはわかんないしゃく」

いらっとした方は多いのではないだろうか。
奇遇だな。
俺もいらっとした。

「つまり――。
学校で一番偉い人のことをいうでっぱ！！！！」

きらーんと光が溢れた。
いやぁ、それまとめすぎじゃないのか？

「そうなんしゃくかぁ？
ということは！学校全てが自分のものになるんしゃく！？」

「そうでっぱそうでっぱ！」

いや、違うだろ。
最終決定権は校長か理事長だろ。
あんたも変なこと教えんなよ。

「しゃくふふふぅぅぅうううう……」

いかん。
美鶴がまた危険な妄想に入ったらしい。
こうなると誰も手がつけられない。

「ほら、出刃先輩が変なこと教えるから……」

ため息混じりに抗議した。

「お、俺のせいでっぱ!?」

あんたのせいだよ。
キーンコーンカーンコーン……。
チャイムが鳴る。
お、次は日本史のようだな。
桐梨かぁ。

・
（美鶴妄想内）
・

「生徒会長様ぁ～!!
顎すりすりさせてぇ～ん!」

「いいしゃくよぉ～！！
もっとすりすりしてしゃくぅ～！！」

「あぁ～ん私にもぉ～！！」

「私にもよぉ～！！」

「よいではないかしゃくぅ！よいではないかしゃくぅ～！！」

とある事情により生徒会長になってしまった灼場山美鶴。
彼は今日も書記、会計、雑務係などの女子と戯れていた。

「灼場山生徒会長。
もうすぐ体育祭の開会の言葉の時間が迫っております。
ご準備を」

なぜか眼鏡をかけてボードを持ったシエラもいる。

「お！
副会長シエラぁ！
お前もこっちに来いしゃく！
いっしょにｔｏｇｅｔｈｅｒしようしゃくぅ～！」

一緒にｔｏｇｅｔｈｅｒ……。
頭痛が痛い……？
意味的には一緒だよなぁ。

「今は体育祭の方が先です。
全員炎天下のグラウンドで待機しておりますゆえ。
このままでは熱中症患者が数名出ると予測しますが」

眼鏡くいっ。

「そうしゃくか。
ま、仕方ないしゃくね。
愚民どもの前にちょっと顔だしてくるしゃく！
チミたちは待っててくれしゃ～くぅ～！」

ひらひらと手を振る。
その姿まるでドラゴンすら引くような……。

「「「はぁ～い！！」」」

でもまぁここは美鶴の妄想の中。
女の子は美鶴にべたぼれというわけわかめな設定なんだろう。

「私は司会の職を勤めておりますのでご同行願います」

「もちろんしゃくよぉ～シエラぁ～。
後でたぁ～っぷりかわいがってやるしゃくぅ～！」

両手をわさわささせる美鶴の横をシエラが素通りする。
あいからわず相手にされてねぇ。
妄想でもシエラは変わらないな。

「それでは生徒会長殿がご到着致しましたので開会の言葉を始めていただこうと存じます」

グラウンドの生徒の群集からは

「はやくしろよ！」
「あちぃんだよクソが！！」

などとブーイングがポツポツと出ている。
美鶴はそいつらを的確ににらんだ後、ゆっくりと威厳をとたたせるかのように台へと登る。
それがまた生徒の怒りを増長させる原因となっているのだ。
キィーーーーンとマイクを使っているものなら大抵知っているあの音が鳴り響き、すぐにやむ。

「あーっあーっマイテスしゃくマイテスしゃく」

またもや生徒の怒りゲージ上昇。
そんなこと知らずに「シャコホン」と息をつく。

「みんな、今日は待ちに待った体育祭しゃく！！
体育祭だけに、たいい、くっさーーーーーい！！！！
なーんちゃってしゃく！！！」

風吹く。
木の葉舞う。

「えー、生徒会長、どうもありがとうございました。
生徒のみなさんは生徒会長に大きな拍手をお願いします」

シエラが、かけている伊達眼鏡をキラリを光らせ表情ひとつ変えずに拍手を促す。
パチ……パチ……。
パチパチパチパチパチ……。

「どーもしゃくぅー☆
どーもしゃくぅ☆」

調子に乗り始めた美鶴。
再びギャグを叫ぼうとマイクを握った。
その時だ。

「全員構え」

いきなりシエラ副会長がマイクに言葉を吹き込んだ。
刹那、生徒全員が足元にごろごろ落ちてる石を両手に好きなだけ持ち出しはじめる。
矛先は、当然灼場山生徒会長。

「しゃ・・・しゃく・・・？」

「放て！」

シエラ副会長がもののけ姫のエボシ様の様に叫んだ。
と同時に生徒全員が美鶴に向かって一斉に石を投げ出した
もちろんシエラ副会長も投げる投げる。
どさくさにまぎれて空き缶を投げるやつもいる。
皆鬱憤がたまっていたようだ。

ガッ！！ガガッ！！ガガガッ！！ガガッ！！

「いいい痛い痛い痛いしゃくぅ！！！
やめてしゃくぅ！！
石を投げるのやめてしゃくぅう！！
痛いしゃくふふうぅうううぅうう……」

こう、最後の方の恍惚とした感じだな。
なんか……言いたくないけど快感的な？

「弾幕薄い！
なぁにやってんの！？」

司令官シエラがもっと石を催促する。

「もうやめてくれしゃあああああああああああああああ……！！！」

・　・　・

「はいここで第二期六八七年島丸寺の変だ。
ここで重孝に反逆した武将がいるのだが……。
これは当然皆知ってるよな？
おい灼場山、答えてみろ」

「おい、美鶴、当てられたぞ」

少し揺すってみたが一向に起きやしない。
こうなったらこの前のようにシャーペンで顎をだな。
ぶっすりとだな。

ガバッ！！！！

「いい加減にしろしゃく！

なぁんでボクばっかり当てるんしゃくかぁ!?
当てるならシエラに当てろしゃく!!
こいつボクを裏切ったんしゃくよぉ!?
反逆罪しゃく!!!
コイツこそ当てるべき奴じゃないしゃくかぁ!?
しゃあああん!?」

教室が静かになった。
な、どうしたんだこいつ。
俺のシャーペンを握った右手が固まる。
しばらくたって

「灼場山?
それはお前から俺に対する反逆とみなしていいな?」

桐梨がぴくぴくと額の血管を浮き上がらせつつ美鶴をにらみつけた。

「しゃく……?
なんで桐梨先生がここにいるんしゃく?」

おめめをぱちぱちさせた。
当たり前だろ。
今は日本史の時間だぞ?
教室が失笑に包まれる。
誰かが

「灼場山の変だー!!」

とか言って教室が爆笑の渦になる。

「ちょっと指導室来い。
昨日完成した桐梨流処刑術その１０８を見せてやる」

桐梨は美鶴の腕をがっちり掴んだ。

「しゃくっ！？
は、離せしゃくっ！！
ボクはただ寝てただけしゃくよぉうっ！！！」

火に油を注ぎやがったな。
墓穴を掘ったバカな美鶴。

「余計断罪じゃ。
安心しろ。
苦しむのは一瞬だけだ」

「しゃあああああああ！！！
波音、波音！！
助けてくれしゃあああああくっ」

他人のふり他人のふり……。
からむとろくなことにならない。

つづくかもぉ～

（放課後　生徒指導室）

「う〝うっ……。
う〝う〝ぅぅうう……。
おててがもう痛いしゃくぅううぅうう……」

「まだだっ！！
まだ終わってない！！！
あと原稿用紙二五枚！
この御経を書き写すまで絶対に帰さんぞ！！！！」

「しゃあああああああああああん！！
しゃあああああああああああん！！！」

「ああもう泣くな！！
女々しいそして鬱陶しい！！」

「きゃああっ！！
私の蛙ちゃんがパニック起こしてる！！
大丈夫だよ～。
よ～しよ～し……」

生物担当の派真野先生。

「わぁっ！？
俺のカップめんが沸騰しとる！？」

知らん眼鏡チビデブ先生。

「ぎゃーーー！！
　コーヒーが書類に……」

バレー部の顧問の先生。

「パソコンが固まったーーー！！！」

美鶴の泣き声は
周囲の万物に被害を及ぼす……時がある……。
まじか。

しゃくでば！　～生徒会長は天使ですか？神ですか？～（後書き）

結論から言うと天使でもないし神でもないですね。
なんていいますか。

ただのアホ？
ってか顎？
アゴ？

ａｇｏみたいな？

では、ありがとうございました。

しゃくでぱ！　女のキレ

チャイムが鳴る。
時はお昼休み。
今日も仁や遼たちと机をあわせて
男だらけのお弁当つつきである。

「ん？
　そういや、シエラとメイナは？」

仁が毎回入っているから揚げを噛み噛み言った。
あぁ。

「なんか年に一度だけ販売される幻の
　チョコバナナケーキを高速で買いに行ってるぞ」

うん、たしかそうだったと思う。

「なんだ、そのチョコバナナケーキとやらは。
　うまいのか？」

「なんでも、材料がこりっこりにこだわっているらしいぜ。
　生クリームはもちろん北海道産。
　カカオは現地から選りすぐりの……」

ガラッ！

「波音！
　波音！！

僕勝ったよ！！」

お、それはよかったなぁ。
超古代文明の最終兵器でもこういうところは女子なんだなぁとしみじみと考えてしまう。
わはーと笑いながらチョコバナナケーキをすりすりするシエラ。
中のクリームこぼれれば楽しいことになるのになぁ。

「食べる前に手洗ってこよっと」

そういってシエラはチョコバナナケーキを自分の机の上に置いたと思うとマッハで教室から出て行った。

「マンガとかでさ」

ん？

「なんだよ急に」

「よく楽しみを後にとっておくキャラいるじゃん？」

いるいる。

「そういうキャラってさ。
大体他の奴らにその楽しみ奪われるだろ？
だからシエラもひょっとして……」

ははは。

「んなわけねーだろ。

よく考えろよ、仁。
ここは現実だ、マンガやアニメとはワケが違うんだぜ？」

笑い飛ばした。

「ふんふん、僕もそう思うしゃくよぉ～。
やっぱカレーには干し葡萄しゃくね～」モゴモゴ

話に割り込もうとするその姿勢は認める。
だけど話が神がかかってるぐらいかみ合ってない。
神だけに。
俺死ねばいいのかもしれない。
ん？
なんかモゴモゴ言ってなかった、さっき。

「おまっ、それっ……！」

「あぁ、これしゃく？
シエラの席の近くにおちてたんしゃくよぉ～」

はしゃいでいる誰かが落としたんだな。

「だったらシエラのものってすぐ分かるよな？
お前なんで平然と食ってんだよ」

仁が反撃する。
それそれ、俺もそれ言いたかった。

「しゃくぅ？
落ちてるものなんて誰のものでもないんしゃくよ？

ただ拾ったやつのものになるだけしゃく。
これは僕が拾ったんしゃくからもう僕のものしゃく」
あのなぁ……。

「いいか？
このご時世そんなものが通じるわけねーだろクソ顎。
シエラが来たらどうなるかぐらい分かるだろ？」

「残念。
もう来てる」

ドアを開けて呆然と立ち尽くしている。
そのシエラの目は美鶴の手の中にあるチョコバナナケーキのパッケージに釘付けだ。
すると美鶴は肩をすくめ、やれやれのポーズでシエラに向かってゆっくりと威厳を漂わせながら歩いた。
クソウゼェ。

「まぁまさ、シエラ落ち着いて考えるしゃく。
君もアホじゃないんしゃくからわかるしゃくよね？
コレは落ちてたんしゃくよ？
君の席の近くに落ちていただけしゃく。
つまりは誰の物でもないんしゃく。
分かるしゃくね？」

「僕のチョコバナナケーキ……」

シエラ、放心状態でそれだけ呟く。

「落ちたものはただ拾った人のものになるだけしゃく。
拾ったのは誰しゃく？」

「僕の……チョコ……バナナ……」

「そう！
僕しゃくよ！
ならコレは誰のものかわかるしゃくね？
ヴぉく（僕）しゃくよ！
つまりは僕に食べても良いという権利が与えられたということしゃく。
だから――」

「うっ……うぅっ……」

お、おい、美鶴。
シエラ泣いてるんじゃないのか……？

「んん～？
も・し・か・し・て・泣いてるしゃくかぁ？
でも今回は悪いのは僕じゃないんしゃく。
ちゃんと落とさないようにしてなかったチ・ミ！
つまりシエラが悪いんしゃく。
まぁ普段は僕に暴力しかふるわないシエラの泣き顔なんてレアしゃくから特別に許してやるしゃく。
ん～？
鬼の目にもなんとなら。
その面を拝んでやるしゃく～」

嗚咽をあげているシエラの顔を覗きこむ美鶴。

「ひっ、しゃぁああっ！？」

シエラは美鶴の顎をがっしと掴んだ。
そのまま物凄い勢いで足をピッチャーのように高く上げ
教室の壁に向かって美鶴を投げた。
というよりたたきつけた。
その時間コンマゼロ以下のスピード。
下着も見えやしない。
そのままシエラは美鶴を何度も何度もたたきつけた。
悲鳴が聞えないのはおそらく……。
いや言うまでもない。
地獄の蓋は開いたのだ。
最終的に美鶴はゴミ箱（燃える方）に叩き込まれた。
それでもまだ足りないのか
全体が入るまでにぎゅーっと押し捲るシエラさん。

「ちょ、シエラやめなって！
汚いから！」

メイナが両腕をひっぱってようやくシエラは収まった。

「うぅ、姉さん……。
僕……、僕の……」

そのまま姉に抱きついて泣きじゃくる。

「分かった分かった、私の半分あげるよ」

シエラの頭をよしよししながら姉の威厳（といっても双子）を見せ

付けてくる。
いやはやそれにしても
今日は非現実的なことばかりが起こるなぁと。
そうおもった日であった。

This story continues.

しゃくでば！　女のキレ（後書き）

ありがとうございましーた。
いや、暑いですね。
体調崩しそうですよね。

ぐっすりと寝て、しっかり食べて。
体調維持がんばりましょう。

しゃくでば！　何事も社会経験なり

『本日のオススメ商品はこちらッ！
なんと、つけるだけで幸せになれる魔法のイヤリング！』

『まぁ、つけてみたら何か幸せのオーラを感じますわ！？
これは大変いいざます。※あくまでも一個人の意見です。
でも……、お高いんでしょう？』

『いえいえ、心配はご無用です。
ジャポネット橋本が相手会社との交渉に交渉を重ねましたので。
値切りに値切りましたよー？』

『まぁ本当ですか？』

『では、気になるお値段です。
な・ん・と！
お値段は約半額の……』

「は、半額の……？」

蒼はごくっと喉を鳴らした。
詩乃家のテレビの前でお茶をすすっている。
その眼はいたって真剣だ。
おい、だれかとめてやれ。

『六万八千円！
六万八千円ですよ！！』

「た、高っ！」

あぁ、よかった蒼はまともだった。

「欲しいしゃく！！！」

えーっと。

蒼はまともだったんだ。

そこまではいいんだ。

気がついたら誰かよく分からないけど語尾にしゃくをつけるやつがいたんだ。

何を言っているのか自分でも分からない。

「ど、どうしてここにいるんですか！？」

蒼の疑問はもっともだ。

「まぁまぁ、僕のことは気にするなしゃく！」

蒼は沈黙する。

窓の外が暗くなった。

いや、違うね。

太陽とは明らかに違う光が満ち溢れていた。

陽天楼、つまりネメシエルが美鶴にその砲門を向けていたのだ。

「わ、わかったしゃくよぉ！

わかったしゃくからそのレーザー充填をやめるしゃく蒼ォ！」

「……」

更に光が増していく。
美鶴の額に汗が浮かぶ。

「おろしてくださいましゃく蒼様ァァ！！
いや、蒼姫！！
蒼お嬢様っ！！！」

・
・
・

（翌日、教室にて）

「……と、いうわけでそのペンダントが欲しいんしゃくよぉ！」

はぁ。
頭大丈夫か、こいつ。

「そのボッタクリイヤリングを買う金を貸して欲しいしゃくぅ　とか
言うつもりなんじゃないだろうな？」

俺は手にもったジュース缶を傾けた。
中身はなし。
缶をゴミ箱に向かって投げる。
っしゃ、一発で入った。

「……」ポッ

なんで赤面するんだ。
予想が当たってしまったわけか？

「買うなら普通、自分の金で買うだろ。

今いくらもってんだ？」

仁はまだ少し残っているぶどうジュースを口に放り込んだ。
あぁいいなぁ。
俺も少し多めのそっち買っておけばよかったよ。

「あ、あげないしゃくよ？」

美鶴はびくびくしながら俺達を見始めた。
あぁこれが日々街の不良にカツあげされている結果か。
べつにとらないから、安心しろと。

チャリーン、チャリーン……。

金が机の上でくるくる回っている。
銅色が二つ。
あと真ん中に穴が開いた黄金色が一つ。

「に、二十五円……」

「しゃくぅぅん、僕どうすれば……」

美鶴が頭を抱え机にぶつけたときだった。

「それなら良い方法が――」

「それなら良い方法があるぞ！！
受け取れ！！」

「で、俺の出番がでっぱ……」

シエラが出刃先輩の持っているチラシを掠め取った。
それで飛行機を折り、美鶴に飛ばした。
時間にしてそれは約三秒。

ヒュ～～～～、ブスッ。

美鶴のぱっちり開いた目に飛行機のとがった先が……。

「しゃぁあああああっ！！
ひこーきがおめめにしゃぁあああああ！！！！！」

「お、俺の　出刃ん　が……」
（出番）

・　・　・

「デパートでのバイト？」

シエラの切り出したないように頭がついていけなくて思わず聞き返してしまった。

「バイトって何しゃく？」

「そそ、デパートの缶売り場でやってるやつ。
時給がなんと二千円でっぱ！！　だって」

シエラは華麗に美鶴の疑問をスルーして説明を続ける。

「お、俺の台詞がでっぱ……」

まぁ約一名後ろで嘆いている人がいるが。

「バイトって何しゃくぅぅ？？」

とにかくだ。

「よかったな、美鶴！
一日五時間ほどやれば一週間で買えるようになるぞ？
内容はともかく」

美鶴の肩を叩いてああ解決したと一人気持ちよさそうな仁。

「だから、バイトって何しゃぁぁくぅぅ！？」

あぁ、もう五月蠅い。

「ちょっとした仕事をして、ちょっとしたお給料をもらうことでっぱ！！」

さっすがっす先輩。
面倒くさい役目を自ら引き受けてくれるっ。

「そうなんしゃくか！？
ありがとうしゃく出刃先輩！！」

「フッ、フフフ……。
フフフフッ！！

フハハハハハッ！！！！！」

やっとこさちゃんとした出番があったことに対しての喜びが
溢れんばかりに出刃先輩を光らせている。
いやたとえじゃなくて本当に光ってる。

・

（そんなこんなでバイト当日）

・

のんびりとヒゲを蓄えた店長さんが美鶴を迎えた。

「あぁ、君が灼場山くんだね？
いやぁ、たすかったよぉ～！
このバイト全然人気が無くてさぁ。
店員はうつ病とかですぐ仕事休んじゃってねぇ。
困ってたんだよねぇ。
いやぁ、時給は思い切って上げてみるもんだね、はっはっは！！」

「僕は難しい話はよく分からないしゃく！！」

「いや、こっちの話だからいいんだ。
じゃあ早速この着ぐるみを着てくれるかい？

「しゃく？」

・　・　・

「おいしいかにはいかがしゃくかぁ～？
おいしいかにしゃくよぉ～！！」

子供が泣き出した。

「ママー、アレ怖い……」

「うぇぇ……ぐすっ、ううっ……」

「助けてー！
おかーしゃぁーん！！」

oh……。
それを俺と一緒に隣で見ていたシエラが一言。

「大好評だね」

そうだね。

つづかない～

しゃくでば！　何事も社会経験なり（後書き）

ありがとうございました。
ブログの方だとこの最後に画像が入っています。
まぁ見なくても大丈夫な画像ですよ。
てか見ないほうがいいですよ、やめておいたほうが良いですよ。

・・・念のためにＵＲＬを・・・。
ｈｔｔｐ：／／ｕｎｓｕｎｇｔｗｉｌｉｇｈｔ．ｂｌｏｇ６３．ｆｃ２．ｃｏｍ／ｂｌｏｇ－ｅｎｔｒｙ－２８８．ｈｔｍｌ＃ｅｎｄ

ここですね。
最後の方です。

やめたほうがいいですよ、お目目腐りますよ。

しゃくでぱ！～嗚呼血に染まりし我が資本よ～

前回のあらすじ。
美鶴、バイトをスタートさせる。
以上。

美鶴がバイトを始めて五日目。
だんだんとこのバイトにも慣れてきたようだ。
まぁ相変わらず物凄い勢いで
罪無き子供たちに日々トラウマを植えつけているみたいだが。
バイトの人たちも彼女ができたとか
今日の占いがラッキーだったとか
そんな続く幸運でぽつぽつと戻ってきたようだ。
店長の使う胃薬もゆっくりと使用回数が減りつつあるこの頃……。

「美鶴、今日もバイトか」

俺はうきうき気分の美鶴に話しかけたのだった。

「そうしゃくよぉん♪
いやぁ～毎日忙しいしゃくよぉ～？
どっかの働いてない誰かさんと違って。
働かざるもの食うべからずしゃくね！
しゃっしゃっしゃっ！」

俺をみてにやける美鶴。

「おい。
それ俺にいってんのか……？」

ぴきっといらっとした。

「いんやぁ～？
どうしゃくかねぇ～？
しゃくふふふぅ～」

「滅せよ」

俺は美鶴に大きく右からのパンチを食らわした。
まともにくらった美鶴は飛んで行きゴミ箱の中にダストイン。
上から乗って詰めてやった。

「じゃぐぅ……」

上から蓋もする。
ボケが。

「ん？
シエラ、メイナ、お前らもバイト始めたのか？」

その横をすたすたと歩く二人。
ポスターをもってわくわくした表情だ。

「そだよ。
いやぁ～毎日大変だよ。
どっかの働いてない誰かさんと違って！」

シエラがにっこり笑ってそういった。
メイナは言いすぎだよ、それは。と言った目を向けている。

「お前、今夜飯なし」

俺はシエラに冷たく言うとその場を離れた。

「波音、ごめんっ！
ごめんって、ごめんなさいっ！！」

「働いてるお前は大変なんだから飯も食う時間もないんだろ？
じゃあ今夜はご飯なしでいいよね？
ん？
嫌なの？」

「……ごめんなさい」

「謝るぐらいなら初めから言うな、ボケ」

「……うぅ……」

最終兵器を言い負かしてやった。
調子に乗るんじゃない。
ってか、俺は俺で帝国郡のために働いたりしてるからな。

（場所は変わって美鶴バイト現場）

「あ！
いかん、しまった！！」

店長が何かを思い出したように右頬を叩いた。

「ど、どうしたんです？」

『健康野菜じうす』と書かれたダンボールを運びながら
バイトが心配そうにたずねた。
店長は手の甲に張り付いた割引のシールをめくりながら

「今日な？
サプライズイベントでうちの店でヒーローショーやるんだよ。
で、ウチの店の着ぐるみが悪役やることになってたんだが……」

「はあ」

「まだ悪役のメンバーが決まってないんだよね」

店長は壁にもたれかかった状態の着ぐるみを顎で指した。
バイトは目線をたどり

「ご丁寧にちゃんと額のとこに『悪』って書いてあるじゃないですか……」

そんなの見た目で分かるだろと、ため息をついた。

「で、さ。
あの悪役なんだが美鶴君なんか適任だと思うんだ。
みんなどう思う？」

いつの間にか倉庫の全社員に話しかける形になっていた。
店長の意見を聞いた全員から歓声が上がる。

『みんなー、今日はカイセンジャー（ヒーロー名）のショーにやってきてくれてありがとー！！
そこにいる大きなお友達もねー！！』

「むっ！
いかん、もう始まってしまう」

振り向いた店長の前に

「ちょりーっすしゃくぅー！
今日もバリバリ働くしゃくよぉー！！」

やっとゴミ箱から抜け出した美鶴が立っていた。

「おおグッドタイミング。
唐突で悪いがこれ着てあのショーに出てくれないか？」

「しゃく？
なんしゃく、これはぁ？」

「実はかくかくしかじかでこうこうというわけなんだ。
頼む。
上手くやれば給料上げとくから！」

美鶴の目が¥に変わる。
いや本当に変わってる。

「まあぁぁぁかせるしゃあぁぁぁぁくっ！！！
ハリウッド並のボクの演技力にひれ伏すしゃくっ！！！」

美鶴は鼻息も荒く金の力に負け引き受けたのである。

「おお！！
ちょっといかんせんこめかみの血管が浮き出そうになったけど頼もしい！！
よろしく頼むよ！」

美鶴と店長が手を握り合っている後ろでは

「てかなんも練習なしにぶっつけ本番ですか……」

「まさにサプライズっすね……」

バイトの人や社員の人がひそひそと話し合っていた。

・　・　・

だるい学校が終わりぶらぶらと仁と男二人で
虚しくウィンドウショッピングに来ていた俺らの目の端に
一枚のポスターが入ってきた。

「ん？
ヒーローショー……？」

だっさい戦闘員とかに星人が描かれている。

「しかもあの顎のバイトのとこじゃねえか」

仁が欠伸をしながら場所を指で指した。

「暇だし行ってみるか」

仁にどうする？と首を傾げる。

と、俺達の間に入ってくる人が一人。

「それはいいこと聞いたでっぱ！！」

先輩じゃないですか。

あいからわずどこから出てきたんだあんた。

「なんであんたまで……」

仁の呟きを聞かなかったように出刃先輩は

「まぁいいじゃないかでっぱ。

行ってみようでっぱ」

俺達二人の背中を押して進む、進む。

結構会場は近くにあった。

「おぉ結構な人じゃねえか」

思わず仁が声を漏らす。

「もう始まってるでっぱか」

とりあえず空いている場所を見つけて座る。

ぼけーと時間を潰すには丁度良い暇つぶしだ。

「観念しろ、この大悪党め！
その子から手を離せ！」

赤のきんきら衣装に身を包んだ若い男の人の声が会場にこだまする。
それをあざ笑うがごとく

「しゃーっしゃっしゃっしゃっ！
観念するぅ？
このボクがぁ？
ハッ！
無理しゃくね！
それにこの子はボクのモノしゃくよ！」

美鶴は赤い全身タイツに蟹の頭を被っていた。
顔も赤くペンキで塗られ、顎が蟹と一体化している。
いったいどうやって被ったんだろうか。
っと、高笑い――というか馬鹿笑いをしながら美鶴は観客席に乱入して
適当に捕まえた幼女の尻などをチロチロと触りまくりはじめた。
すいませんここに犯罪者がいます。

「くそっ、人質とは汚いぞ！
男なら正々堂々と勝負だ！！」

青のきんきらの衣装を着た男の人が美鶴に人差し指を突きつけた。

「な、なぁんしゃくかぁ！？
僕とやるしゃくかぁ！？」

威嚇に出る美鶴。
てかこのセリフ前に聴いたことが有るような。
てかはやくやめさせろよ。
人質の女の子もう震えて泣いてるじゃないかよ。
あれ絶対別の恐怖以外の何者でもないだろ。
青に威嚇をしながら

「いいしゃくよぉ？
　全員まとめてかかってこいしゃく！！」

美鶴はしぇーとよくわからない憲法のポーズをとった。
お、なんかリアル。

「よし、みんな行くぞ！！
　フォーメーションΩ！！」

なんでそこだけ無駄にかっこいいんだよ。
レッドが後ろに控えるカイセンレンジャー全員に指示を出した。
どうでも良いがこのカイセンレンジャーの全員の名前だけでも紹介しておこうと思う。
赤き海鮮クラブレッド。
必殺の後ろ回し蹴りは半端じゃない。
青き怒りスカイブルー。
海鮮なのになぜか空だ。
綺麗なものにはとげがあるウニイエロー。
いじめられるに違いない名前である。
鋼の石で敵をも破るサンゴピンクコンブラック。
石と意志をかけているらしい。
サンゴは生き物だというのに。

まぁそれら全員がカニカニ星人（美鶴）に襲い掛った。
レッド、ブラック、ブルーがパンチやらキックやらを繰り出す。
それに被せるようにコンピューターで作った「バキッ」「ドガッ」
効果音が流れる。
だが問題があった。
本人は喰らってるふりをしているのかもしれないが
残念ながら必死に避けてるようにしか見えないのだ。

「ねえ、あの怪人よけてるよね」

俺の座っている前の子供が隣の子供に話しかけた。

「えー喰らってないのかな？」

その声が聞えたのかどうかは分からない。
急激な異変が起きたのだ。
美鶴の演技が急激にリアルになったのだ。
本当に喰らってるように見えるのであ……る？
いや喰らってる喰らってる！
イエローとピンクの攻撃もろに喰らってるよ！
でかい効果音の音でリアルな子気味いい音は聞こえない。
だが俺にはわかる。
あのいかにも「こいつ打ち殺したる」と言わんばかりのフォーム。
ああ間違いない。
奴らだ。
シエラとメイナだ。
あいつら何のバイトかと思ったらこれだったのか。
ピンク（多分シエラ）の重いパンチが美鶴の腹に食い込む。
鈍い音。
イエロー（多分メイナ）の蹴りが美鶴の顎を蹴り上げる。

ぐぎょっ、と嫌な音。

「しゃぐぅっ！！
じゃぐぅっ！！！
や、やめてしゃぐぅっ！！
おねがじゃぐうっ！！」

当然この顎の肉声も効果音のせいで聞こえない。
なんというかざまぁみろ。

「さ、さぁ、行くぞ！！
俺達の最終奥義！！」

レッドも目の前の光景についていけてないじゃないか。
こんな暴力シーンあったか、とかどうか振り返ってるんだろう。
でも台本どおりに進むショー。

「うぅぅうぅぅうぅぅう……」

血まみれでもなお立ち上がりカイセンジャーを睨み付けるカニカニ星人。
よくやったよ美鶴。
お前はよくやった。
だからもう休め。
カイセンジャーは組み体操みたいな姿勢をとりレッドが叫ぶ。

「最終奥義受けてみよ！
渋谷で海をみちゃっタイフーン！！」

だっさ。

全員分の体重をもろに受け止め、美鶴が仰向けになる。

「……しゃ……あ……」

天を貫くようにして美鶴はステージ上に倒れた。

燃えていたよ。

美鶴は燃え尽きていた。

真っ白にな。

「いや～見事な演技だった。

もうお偉方も大満足さ！

ほら、最後のポーズを……って美鶴くん……？

おい、ショーはもう終わったよ～？」

店長が笑いながら人影の途絶えたステージに上がる。

最後の願いを聞いてもらえた人のように……。

美鶴はそこに寝転がり動かない。

「し、死んでる！」

口を抑え目を一杯に開く店長。

いや、しっかり生きてますから。

大丈夫ですから。

そのただならぬ様子にお偉方が立ち上がり野次を飛ばし始めた。

「こらー！！

あれだけ悪役には怪我を負わせるなと……ん？

イエロー役とピンク役はどこ行った！？」

お偉方が視線を巡らせるとそこには脱ぎ捨てられたピンクとイエロ

ーのコスチュームがあった。
あいつらすげえはやい逃亡だな、おい。
殴るだけ殴って給料奪って逃げやがったよ。

「救急車！救急車をよべ！蟹役の人血まみれだ！」

「脱がせろ！」

「だめです！抜けません！！」

とりあえず帰ろう。
なにやらぱっとしない何かを胸の奥に抱えながら
俺達は帰路に付いたのだった。

つづくかも～

後日談

「お～っす美鶴～！
あのペンダント買えたんだってな？
よかったじゃないか！
あれからどうだ？」

美鶴はクラスのとある男子にペンダントについて問いかけられてい

た。

「全然」　ガンッ！！（野球のボールが当たった音）

「大丈」　バリンッ！！（マンションから落下してきた植木鉢があたった音）

「夫」　カーンッ！！（小さめの看板が降ってあたった音）

「じゃぐよお？」ピクピク

いやぁ……。

全然大丈夫に見えないから不思議である。

「だ、大丈夫か？」

「大丈夫じゃ……」　ぷち。

「シエラ姉様、久しぶりですっ！」

今までにないぐらいの不幸の連続だ。

まさか最後は一五二万トンの戦艦で潰されるなんて。

どれだけの可能性を秘めた不幸なんだろうか。

まぁ美鶴だしいいやもう。

しゃくでば！～嗚呼血に染まりし我が資本よ～（後書き）

ありがとうございました。
美鶴がんばれーっ！

しゃくでば！　僕らのトラウマゲーム　その？

ある日の放課後。
仁はパソコンをカタカタいじっていた。
そこに

「よっ！！
しゃく、仁！」

美鶴がニュッと飛び出てきた。

「うぉあっ！！
な、なんだよいきなり机の下から出てくるなよ！」

仁は思わずこぼしたお茶をハンカチで拭きながら美鶴に食いかかった。

「まぁまぁ、固いこというなしゃくよぉ！
しゃっしゃっしゃ、僕と仁の仲じゃないしゃくかぁ～！」

「どんな仲だよ……。
大体今までお前と関ってたシーン一回もあったか？」

仁はハンカチを絞りそれを椅子の鉄パイプにかけた。
やれやれとＰＣに再び向き直りキーボードを叩き始める。

「あー！
そういえばなかったしゃくねぇ～。
いや～、これが主役と脇役の差ってやつなんしゃくかねぇ～……」

ぼつりとそう呟くと腕を組んで頷く美鶴に
仁は

「てめぇ冷やかしに来たのか？
大体お前は本編に一回しか！
しかも美鶴のみの字もなかったじゃねぇか！
俺のほうがまだマシってもんだ！！」

「な、なぁんしゃくかぁ！？
やるしゃくかぁ！？」

「なんでそうなるんだよ……」

「いくしゃくよ！
こんなヒョロいもやしっ子に負けるわけないしゃく！！
ショワッチ！！」

「うわっ、まじかよ！！
くそっっ！！」

・
・
（十秒後）

「しゃ……く……」

美鶴は瀕死の状態で横たわっていた。

「よっわー……。

じゃ、じゃあ俺帰るわ」

仁は鞄を肩にかけるとため息をつきつつ
教室から出て行こうと歩んだ。

「待つしゃく!!
お願いがあるんしゃくぅ!!
争うつもりなんてなかったんしゃくぅ!!」

美鶴ははっと起き上がり涙をさめざめと流して
ゆるしてくれしゃくぅ〜とお願いを始めた。
仁は頭の上にはてなを浮かべつつ話を聞くことにした。
「だったらはじめからお願いしろよ……」と
心の中で毒づきながら。

・　・　・

「で？
何？
変な要求だったら一秒で断らせてもらう」

仁は腕時計を見ながら言い放つ。

「大丈夫しゃくよぉ。
ただ、シエラとメイナとオマケの蒼の
僕が主人公のえっちぃなゲームを……」

「断る」

「なんでしゃく!?
僕まだ最後まで言ってないしゃくよぉ!?」

美鶴は唾を撒き散らしながら仁の胸倉を掴んだ。
それを蹴りではじきとばしながら

「どーせエロゲーだろ?
無理無理、第一そんなゲーム作る気もないわ!!」

仁はドアから出て行こうとした。
その前に立ちはだかり美鶴はちっちっと指を振って

「ブッブーしゃく。
話は最後まで聞かないから間違うんしゃくぅ〜!
正解はそのエッチなゲームを明日までにつくれ　しゃく!」

思いっきり仁がずっこけた。
俺もずっこけた。
なんだよその要求は。

「ただ単に期間がカオス的シビアになっただけで
結局同じじゃねーか!!
しかもなんでお願いなのに命令形なんだよ!!
てかんなことできるかー!!
ふざけんな!!」

「しゃくぅ?
仁、あんなにパソコンかたかたうてるんしゃくから
ゲームも早くつくれるんじゃないしゃくかぁ?」

「お前なぁ……。
ゲームってのはすっげぇ量のプログラムがいるんだぞ？
それを一晩でやれと？
ばかばかしい俺は帰る！」

あ、それ死亡フラグだぞ仁。

「おぉっとぉ。
いいんしゃくかぁ？
これがどうなってもぉ」

仁は振り返って驚愕した。
そう美鶴の手には……。

「俺のノートパソコンがっ！
いつのまにっ！！」

仁の相棒のＰＣがつかまれていた。

「さ、どうするしゃくぅ？
断るんしゃくぅ？」

「くそっ！
こんな雑魚なら力ずくで……」

仁が飛び掛ろうと姿勢を低くする。
だがそれを見越したかのように

「おぉっと、それ以上動いたら……。

こうするしゃくよぉ？」

美鶴はＰＣを叩きつける姿勢に入った。

「くっ……くそっ！
わーった、わーったよ。
何とかする……」

「そうそう！
それでいいんしゃくよ！！
しゃっしゃっしゃ！！
いや～『しっこうゆうよ』とか何とかで
僕もういろいろ『できない』しゃくから溜まってるんしゃくよぉ～。
それにあの女共はスカートめくりすらさせてくれなかったしゃくからねぇ～。
良いきぶんしゃくぅ～」

美鶴の顎から美鶴汁が滲み出す。
大体これ出るときはやらしいこと考えてるんだ。
もう見て分かる俺が嫌になってきた。
仁はひそかに心の中で

（こっちにだって考えはある）

そう思っていたそうな。

つづく（まじで）

おまけ。

「おまけって何ですか、おまけって？
何ですか？
私の体はあまり需要がないと？」

「めっ、目が怖いしゃくよぉ、蒼ぉ……」

「わ、私だって好きで……。
こんな……体になったわけじゃ……」

ごめんね、蒼。
それ俺（筆者）の趣味だわ（笑

しゃくでば！　僕らのトラウマゲーム　その？（後書き）

まさかのその？
びっくりですよ。
てか俺はロリコンじゃない。
勘違いしないでくださいね。

翌日。

「ほらよ、出来たぞ」

仁は美鶴にＵＳＢを投げて渡した。

「おっ！
どーもしゃくぅ～♪」

美鶴はそれを顔面で受け止める。

「オラ、さっさとＰＣ返せ」

「分かったしゃくよぉ。
ホレ、しゃく」

それを隣で見ていたメイナが

「関係ないけどさぁ。
お店のレジってお金受け取ってから商品渡すじゃない？」

ん？
それがどうかしたのか？

「いや……別にいいんだけどさぁ……」

それにしても眠いな。

「今夜はシエラもメイナも蒼も寝かさないしゃくよぉ～？
しゃっしゃっしゃ！！」

お前の独り言は時々思うんだが
ほんっとうに気持ち悪いなぁ、おい。

・　・　・

学校が終わり帰宅。
肩を叩いて「つかれた～ただいま」と言うと
俺は自分の部屋に入った。

「あーつかれた」

「おっ、ただいましゃくぅ～波音～！」

何だ、美鶴か。

「おぉ、ただいま美鶴。
先に帰ってたのか」

鞄を床に置いてごろんと寝転がる。
やっぱり落ち着く……。

「そうしゃく！
というわけでパソコンをつけて欲しいしゃく！」

ったく……。

「はいはい、わーったよ。
パソコンのつけ方ぐらい一人で……は？
お前なんで俺の部屋にいるの？」

「だって家にパソコンないんしゃくもん！
ぶう！」

可愛くない。

「いいかげんそれやめろ。
〆るぞ、こら。
勝手に人の家に入り込みやがってごら」

美鶴を後ろから羽交い絞めにしてやる。
逝け。

「わー！
ごめんしゃく、ごめんしゃく！！
謝るからその手をはなし……て……」

・　・　・

「はぁ？
仁から作ってもらったエロゲー？
何やってんだあいつ。
一晩とか嘘だろ？」

「嘘じゃないしゃく！
仁はすごいんしゃくよ！」

それは知ってるが……。
まぁとりあえずやってみよう。

ゲームスタート！

「ＭＩＴＳＵＲＵ　ＱＵＷＳＴ！
よく来たな、ベイベー。
何？
現実が怖い？
はっ、だから？
別に俺自身はそれほど……（以下サブタイトルなのに五十行ぐらい続く）」

な、なんじゃこの文章……。
アメリカンなのになんかエロチックっ！
つまり素敵。

「ほほう、ＲＰＧエロゲときたしゃくかぁ……。
マニアックで興奮するしゃくっ☆」

美鶴の顔といったら……。
なんだろう、このぶん殴りたくなる顔は。
俺自身平和主義者だからそれほど人を殴ったりしないんだが
こいつには人から殴られる要素しか気がする。

「はやすぎるだろ、落ち着け。

まだサブタイトルだ。
てかお前絶対汁たらすなよ。
俺のＰＣなんだからな」

「わかってるしゃくよぉん」

つつーと一滴の……。

「言ってるそばから！！」

美鶴の頬に俺の拳がめりこんだ。

・・・

名前を入力してください。

みつる　　↓▽決定　▼戻る
－－－

・・・

画面が点滅したと思ったら急に明るくなった。
画面に映っていたのは……俺？

『みつるよ！
お前を呼んだのは他でもない。

シエラ姫が魔王に連れ去られてしまった！
助けに行ってくれるかね？』

↓▽もちろんしゃく！！！（むふっ）
▼ヤキがまわったしゃく……

『おぉ、私はそう答えてくれると思っておったぞ！
ではこれをもっていくがよい』

モザイクソードを手に入れた！
ゾームの盾を手に入れた！
ネイキッド服を手に入れた！
１００Ｇを手に入れた！
世界地図を手に入れた！
グェルトリューを手に入れた！
フェニックスのくちばしを手に入れた！

『では、健闘を祈る、みつるよ！』

つづきますよ～

しゃくでば！　僕らのトラウマゲーム？（後書き）

ちなみに。
クエストのスペルはわざとです。
間違っていたらわざとです。

しゃくでば！　僕らのトラウマゲーム　その？

「よーしシエラをヤリに行くしゃくよぉー☆」

前回までのあらすじ。
美鶴は仁に頼んでおにゃのことあぁんなことや
こぉんなことが出来るゲームを作ってもらう。
そしてなぜか知らんが俺の家に来てプレイしようとしていたのだった。
早い話が前々回から読んでね♪

「なんで俺王子なんだよ……」

俺の小さい声は当然美鶴には聞えない。

「ん？
誰か来たしゃく？」

この髪型的に考えてメイナだな。
メイナが大臣っぽい服に身を包んでいる。
あ、大臣であってた。
「」の横にメイナ大臣って出てるわ。

『みつる様。
冒険に出るためにはセーブは欠かせないもの。
今からご説明いたします。
まずファイルを選び決定ボタンを押します。
上書きの場合ははいを選んでください。
セーブが完了したらそのままゲームを終了してください。

今セーブしましたのでこのまま終了してくださって結構です』

長文だなぁ。

「えー、これいちいち終了するんしゃくかぁ～？
めんどくさいしゃく……」

美鶴はポインタを右上の×に持っていくと
クリックしてゲームを終了した。

「さて、もう一回起動しゃく」

リムーバルディスクFからMQと書かれたファイルを開き
クリックして起動させる。
タイトルが表示され再開……というわけには行かなかった。

（でろでろで～ん、どん♪）

という音と共に

『お気の毒ですが冒険の書1は消えてしまいました』

のメッセージが表示された。

「……しゃ……く？
しゃぁあああああああああ！！！」

美鶴の発狂を押し止め言い聞かせる。

「オイ待て、落ち着け！

どーせちょっとしか進んでないんだからもう一回やりゃいいだろ！？」

「しゃくぅ……」

ったく……。

美鶴にニューゲームを選ばせまた初めからやり直させる。

しかしまたメイナ大臣の言うとおりゲームを終了させロードしようとするたびに冒険の書は消えてしまうのだった。

（でろでろで～ん、どん♪）

「しゃぁあああああああ！！！」

流石に違和感を感じた俺は表示ボタンからソースをちらりと覗いてみた。

「やっぱりか。

こういう風になるように仕組まれてるんだ」

俺はすっごく短いソースのウィンドウを消して美鶴に教えた。

「つまりしゃく？」

少しは自分で考えろ……。

「この先のストーリーもなければエロもない。

どーりで一晩で作れたわけだ」

仁のやつやりおるわ。

「しゃ……しゃ……」

「はめられたんだよ、お前は」

というか仁はいい反撃をしたもんだ。
これは誰もが引っかかる。

「しゃあああああああああああ！！！
あぁあああっあああぅっ！！！」

美鶴は唐突に俺のパソコンのディスプレイを
むんずと掴むとがたがたと揺らし始めた。

「おいてめぇ！
他人のパソコンに八つ当たりすんなボケ！！」

美鶴を抑えようとするが一向に止まらない。
ぎゃくに激しくなっていく。

「あぁ、もう！
暴れるなら外でやれ！！」

俺はいらっと来て美鶴を二階の窓からぶん投げた。
ったく……。

「しゃぁあああああああ！！」

ちょっと力加減をミスってしまったらしい。
美鶴は道路のど真ん中まで飛んでいった。

そこに土砂をこんもり積んだトラックがやって来て。
鈍い金属との衝突音がなり運転席の屋根に
美鶴が頭をぶつける。
そのままベクトル的に怪しい動きをして一回転。

「しゃきゅーー……」

頭ごと荷台の土に埋まりトラックに連れ去られていった。
まぁ、別に良いか。
俺は美鶴のせいで痛んだところがないかＰＣを調べる作業に入る。

・　・　・

「う……しゃくぅ……ん。
ここはどこしゃくぅ？」

美鶴は目を覚ました。
口に入った土を吐き出し周りを見回す。

「おーらい、おーらい！
よーし、出しちゃってー！」

「あいよー！！」

美鶴入りの荷台が傾き

「しゃあああああああ！！！」

穴の中に土ごとぶち込まれる。
どうしてこんなことに……？
最初は仁にゲーム作りを頼んだだけだったのに……。

つづくかもぉ

しゃくでば！　僕らのトラウマゲーム　その？（後書き）

ありがとうございました。
いやあ暑いですね、本当に。
受験も迫ってきてますね。
やばいですね。
怖いですね。

しゃくでば　～こちら虫歯建設株式会社～　？

「しゃくぅぅ……。
しゃくぅぅぅぅ……」

金曜日の朝。
いきなり美鶴が苦しみながら学校に現れた。

「ど、どうしたんだよ……？
って顔腫れすぎ！」

美鶴の顔は五倍ほどに腫れていたのである。
びっくりだ。

「虫歯になっちゃったしゃくぅ……」

「俺に任せるでっぱ！」

美鶴のピンチにこのこの人あり。
出刃先輩さっそう登場。

「いいか、美鶴。
虫歯は虫歯菌によっておこるでっぱ」

「しゃくしゃく」（ふむふむ）

「虫歯菌も生き物でっぱ」

「しゃく……？

それが何の関係があるんしゃく？」

「もっとお菓子を食べて虫歯菌を腹いっぱいにして殺せばいいでっぱ！」

「な、なるほどしゃくぅ！！」

「そうと決まれば早速実行でっぱ！」

「出刃先輩格好いいしゃく！
流石しゃく！！」

「でっぱっぱっぱっぱ」（不憫すぎる笑い声）

――美鶴は大声で笑い続けていた。
そうこれからの悪夢を知らずに。

・　・　・

「そんなわけで早速買ってきたでっぱ！」

出刃先輩が購買から戻ってきた。
手の袋には大量のチョコやガムが入っているらしい。
甘。

「では早速試してみるでっぱ！」

「分かったしゃくよぉ！！

いただきまーすしゃくっ！！」

美鶴がチョコにかじりついた。

「くっちゃくっちゃぺろぺろ」

もっと静かに食え。

あんぽん。

俺はぼけっと仁の近くに行った。

仁もこの様子を見ていたらしく

「なぁ、波音。
どうおもう？」

「……アホだと」

「だよなぁ」

お互いがうなづいたときだった。

教室に悲鳴が上がった。

「しゃぁあああああああああ！！！！」

美鶴が頬を押さえて転げまわっていた。

うぉう。

頬が物凄い勢いで膨らんでいく。

どんどんと。

空気をぶちこまれている風船みたいに。

どんどん膨らんでいく。

「じゃあぁあああ！！」

悲鳴にならない悲鳴が四方八方に飛び交う。
いとうるさし。

「えいっ」

シエラが横から出てきたと思うと美鶴を横からぶん殴った。
壁にめり込む美鶴に更に追い討ちをかける。
しばらくぼこぼこにしたあと
腰に手を当て

「うるさい」

と一言。
いやお前ひどすぎるだろ！
どんだけだよ！
その痛みに反比例するがごとく美鶴の頬が
パンチにより更に腫れあがる！
やがては教室の半分が美鶴の顔で埋まってしまった。

「おい授業はじめうぉっ！？
な、なんじゃこらぁあああ！！」

桐梨もびっくりである。

・　・　・

「どーすればいいんしゃくぅ……」

半分ほどに大きさは戻ったものの
まだ人の百倍デカイ頭を美鶴は抱えた。

「歯医者行けよ」

俺はその頬を押しながら聞いた。

「いやしゃくっ！！！」

「なんで？」

「嫌な物はいやなんしゃくっ！！」

シエラの問いに唾を撒き散らしながら美鶴は反駁した。

「行け」

「いやしゃくっ！」

「行けって」

「いやいやしゃくっ！！」

「……チッ」

「ずぇーったいに行かないしゃくっ！！
――本当にどうすればいいんしゃくかぁ？」

美鶴の戸惑った色の目から涙が。
素直に行けばいいのにな。

「そうだ、行ったらチョコレート買ってやるよ」

「いやしゃくっ！！！！！！！」

駄目か。
もうこうなったら意地でも歯医者に連れて行ってやる。

・　・　・

とは言ったものの……。
帰り道をのんびりと夕日を眺めつつ帰る。
川のせせらぎも聞えてきてトンボが空を飛ぶ。
もう秋かぁ。

「なぁ、どうすればいいと思う？」

「何が？」

何がって……。

「美鶴だよ」

「あぁ、ほっとけば？」

シエラは本当にどうでもいいといった顔で

トンボを目で追った。

「俺もそうしたいんだけど……」

家についた。

ドアを開ける。

「助けてくれしゃぁぁくぅ……」

な？

・　・　・

「歯医者は嫌なんだな？」

「絶対にいやしゃく」

じゃあどうしろってんだよマジで。

美鶴が引っかかりそうなものって何？

いや考えるまでもなかった。

あれだ。

エロだ、エロ。

美人が多い歯医者なんてないかな。

「まかせるでっぱ！」

「うぉっ！？」

出刃先輩までなんで俺の家に!?
というかいま心読まれたー!

「俺の情報網をなめるんじゃないでっぱ!」

出刃先輩はポケットから地図をひっぱりだすと
三丁目の角を指差した

「ココでっぱ!」

「本当しゃく!?
そこに美人がいるんしゃくねぇ!?」

美鶴に俺がそう伝えると一気に目の輝きが増した。
そのまま駆け足でお金を握って美鶴は俺の家を飛び出す。
走る、走る。
あっという間に三丁目の角についた。

『ヒッチハイク　歯医者』

「ヴぉくの夢のパラダイスしゃくぅっ!!」

美鶴がドアを開けて中に飛び込んだ。

「あーらいらっしゃい♪」

「あぁらかわいい坊や♪」

お姉さま!
と思うだろう。

だが美鶴の表情は青ざめていた。

「しゃ……」

「私達の治療♪
お・た・の・し・み・あ・れっ☆」

そこはオカマしかいなかったからだ。
しかもニューハーフ。
ヒゲ生えてて筋肉もりもり。

「はーい口空けてェ♪」

しゃあああああああああああ！！！

つづくかもぉ～

しゃくでば　～こちら虫歯建設株式会社～　？（後書き）

ありがとうございました。
虫歯には気をつけましょう！

しゃくでば　～こちら虫歯建設株式会社～　？

前回までのあらすじ。
美鶴が虫歯になっちゃった！
俺達はがんばって美鶴を歯医者に連れて行こうとするが……。
早い話、前回から読もうぜ！

「失敗か」

シエラののんびりした声に押されて
おかまばかりの歯医者から離れた。

「どうする？」

やれやれといった顔でメイナが尋ねる。
俺は知らん。

「あ、これはどうでっぱ？
美鶴が大好きな甘いお菓子を設置して
歯医者にまで誘導するなんて手は？」

おぉ。
出刃先輩あんた、冴えてるな！

「よし、それで行こう！」

・

・　・

「うぅ、ひどい目にあったしゃくぅ。
なんとか逃げ切れたけどずぇーったいに
もう二度と歯医者なんてごめんしゃくぅ」

美鶴は涙を流しながら歩いていた。

「ん？
あれは何しゃく？」

鳴いたカラスがもう笑ったというべきスピードで
美鶴の泣き顔が終わった。
作戦通りだ。

「あっ、あれはヴぉくが大好きな
ヴェスターザーオリジナルしゃくっ！」

道端に一つのキャンディーを見つけた。
お前落ちてるものは食べちゃ駄目って教わらなかったのか。
まぁ今回はそれでいいんだけどさ。
それにしてもうまいこと引っかかってくれたもんだ。

「あっ、あっちにもあるしゃく！」

案の定、美鶴はお菓子に釣られてシャテクテク……。
歩く歩く。

「うんまぁいしゃくぅっ！

あぁんまぁいしゃくぅっ！！！」

「あっ、こっちにもあります！」

ん？

なんだ今の声。

「どうしてこんなに落ちてるんでしょうか？
でもおやつにまずいものなんてないですよね？
何よりもったいないです」

シエラがあちゃーと顔を手で覆った。
白いワンピースに麦わら帽子を被った女の子が
両手一杯に俺達がばら撒いたキャンディーを持ちつつ
美鶴に接近しつつあった。

「どーしてこんなにおいしいんしゃくかぁ？
拾う手が止まらないしゃくぅ！！」

「まったく、食べ物を捨てるなんて……」

美鶴が目の前のおやつに手を伸ばした。
それをぱっと横からかっさらう蒼。

「あ……」

「しゃ……」

二人はばったり出会ってしまった。

「このヴェスターザーオリジナルは僕のものしゃくっ！！
なぜなら僕は特別な存在だからしゃくっ！！」

美鶴は寄越せといわんばかりに右手を突き出した。
蒼はへ？と言った顔をして

「わ、私のですよ！
これは譲れないです！」

お前結局食べる気だったんじゃないかい！

「ふざけるなしゃく！！
さっさとよこすしゃくっ！！」

美鶴は蒼の手からキャンディーを奪い取った。

「私のです！
返してくださいッ！」

蒼が美鶴から取り返す。

「よこすしゃくっ！！」

「いやですっ！！」

嗚呼、喧嘩がはじまった。
殴り合い、叩きあい。
美鶴が蒼の頬に平手打ち。
その瞬間蒼の気配が変わった。

「わかりました。
そこまでして欲しいんですね」

「そうしゃく！
さっさとよこすしゃく！」

「勝てたら……あげますよ？」

ざわっと空気が揺れた。
ん、空が暗い……。
おい、まさか！

「ネメシエル、艦底五一センチ光波共震砲用意。
目標美鶴、三秒後に斉射」

「ちょ、待つしゃく、蒼！」

「三……二……」

「お、落ち着くしゃ「ゼロです」

空から数え切れないほどのレーザーが降り注いだ。

「しゃぁあああああああ！！！！！」

大地がえぐれ、美鶴の姿は土埃にまみれて見えなくなってしまった。

「まったく……。
キャンディは私のです」

蒼は美鶴からキャンディを奪うとネメシエルの中に消えた。

・
・
・

「また失敗したよ！
もうどうすりゃいいんだよ！！」

「結局はさぁ」

うん。

「美鶴を歯医者に入れればいいんでしょ？」

そうだな。

「ならさぁ……」

メイナの提案はすごくマシなものだった。
なんではじめっからそうしなかったんだろうというぐらいに。

・
（翌朝）
・

「おっはよーしゃくぅっ！」

美鶴が教室に入ってきた。
と、思ったらそこは歯医者の治療室になっていた。

「な、なぁんしゃくかぁ！？
これはぁ！？」

実は美鶴が寝ている真夜中に蒼の協力の下で
シエラが美鶴の脳の中に変な電波を送り込んでたんだ。
んで、幻覚を見せていたと。
ちなみに歯医者の予約も事前に済ませてある。
俺がやっといた。
かなり面倒だった。
美鶴は看護婦さんに押されるがままに治療室の中に入って
口をこじ開けられていた。

「はーい、ちょっと削るよー？
痛くないからねぇー？」

歯医者さんのメガネが光できらりとした。
というか歯医者さんはみんなSだと思うのは俺だけだろうか。
痛くないよーって言うときほど痛かったりする。
変な法則である。

「きっ、聞いてないしゃくよぉ……！！」

お医者さんの持つドリルの先が回り始めた。
あの嫌な音が鳴り響く。
ドリルの先が美鶴の黒くなった虫歯の表面に触れると
ガリガリと削れる音がして……。
もうココから先は言わせるんじゃない。
あれはヤバイ。
神経に達したときが一番痛い。

しゃあああああああああああああ……！！！

つづくかもぉ～

ちなみに俺は小学校一年生から歯医者には行ってない。
虫歯はゼロ。
超綺麗にしてるからな。
毎日四十分ぐらい磨いてる。
どや！

しゃくでば　～こちら虫歯建設株式会社～　？（後書き）

ありがとうございました。
いやぁ虫歯。

なると痛いですよねぇ。
そうならないうちに歯を磨いて綺麗にしておきましょう。
笑ったときに銀歯だらけっていうのもちょっと・・・ですからね。

しゃくでば！　宇宙戦争

西暦第二期二千十二年。
地球はマンリキと呼ばれる生命体から攻撃を受けていた。
地球とマンリキの戦いを
最前線で繰り広げる地球防衛軍兵器――《戦艦アリアケ》が話の舞台である。

『敵部隊の接近を確認！総員第一種戦闘配置につけ！繰り返す……』
《戦艦アリアケ》にサイレンが鳴り響いた。
「状況知らせ！」
あわてて艦橋に上がってきた艦長に
「十時の方向から敵航空機接近！数は……五です！」
通信兵のシエラが叫んだ。
「敵との距離はどうですか？」
このアリアケ、蒼艦長は冷静にシエラに尋ねた。

「はっ……およそ二百宇宙キロ！」

「どう思います、波音副長？」

「そうですね……。
こちらも艦載機で迎撃が妥当かと」

俺は敵の出方を見るべきだと艦長に伝えた。

「では、そうしましょう。
メイナ戦闘長、艦載機の発艦準備をするように航空部隊に伝えてください」

「わかりました」

メイナは頷くと手元のマイクを口元に当てて全艦放送に切り替えた。

『航空部隊、出撃せよ。
航空部長、美鶴、準備は出来てるな？』

・
（格納庫内）
・

「もっちろんのろんしゃくよぉー。
この赤いいのしし、美鶴様がいれば
敵なんて簡単にうっちゃれちゃれるしゃくよぉ」

美鶴はくるくると回りながら服を脱いで
パイロットスーツに着替えた。

「美鶴、ちゃんと帰ってくるでっぱよ？
俺が整備した機体なんだからでっぱ」

ぐっと指を立てて出刃整備担当部長はにかっと笑った。

「出刃先輩……！」

美鶴は出刃に抱きつくと

「必ず帰ってくるしゃくよ！！」

振り返らずに美鶴専用機――《ミツルンガーZ》に乗り込んだ。
赤く塗られた美鶴専用の戦闘機は地球防衛軍内でも評判がいい。
間違いなくエースである美鶴に操られる機体はまるで
生きているかのように自由自在な機動でマンリキの戦闘機を
次から次へと撃ち落してゆくからだ。
その姿はまさに圧巻。
逆にせいせいするほどの力。

「美鶴スタンバイＯＫしゃく！」

美鶴はヘルメットに付いたマイクに大声で吹き入れた。

『了解。
軽くやってきてくれ』

メイナの声が機内を巡る。

「まっかしておくしゃく。

この《アリアケ》は僕が守るしゃくよ！」

『期待しているぞ』

「ＭＲ１発進！」

美鶴の戦闘機を固定していた拘束具がはずれ
床が回り、宇宙空間へとつながるカタパルト通路が開いた。
美鶴は静かにエンジンのパワーを上げてゆき
機体を固定する最後の拘束具が外れると同時に
カタパルトの勢いを借りて時速五〇キロで二百メートルの通路を駆けた。

「機体の調子は万全しゃくねっ」

美鶴はふと上を見上げた。
邪悪な気配を感じたからだ。
そして見つけた。
黒いシミを。
Ｇを。

「しゃぁあああああああああああ！？！？！？」

コックピット内にいるのだ。
Ｇが。

・
（艦橋内）
・

「どうした！？」

俺はメイナに問ういていた。
美鶴の機体のスピードがぐんと上がったのだ。

「分かりません！
一体何が……」

「姉さん、通信入れなよ」

「あっ」

パチ、とメイナが通信のスイッチを入れた。

『しゃぁあああああああああああああ！？！？！？』

全員が耳を押さえた。

「こちら艦橋、美鶴どうした！？」

『しゃぁあああああああああ！！！
あぁぁあああああああああああああ！！！！！』

日本語しゃべってＮＥＥＥＥＥＥＥＥＥ！！！

「おい、美鶴機どうしたんだ、おい！」

『は、波音しゃくかぁ！？
た、助けてくれしゃくっ！
Ｇがっ、Ｇがいるんしゃくよぉ！？』

「G……？
　重力のことか？
　カタパルトで発進するんだからそれは当然だろうに」
何を言っているのやら、と蒼艦長と顔を見合わせる。
『ご、ゴキしゃくよぉ！
　助けてくれしゃ』
ぶちんと通信が途絶えた。
美鶴の最後の通信で金属がはじけ飛ぶような音がしたがあれは一体――。
その答えはすぐに伝えられた。
「美鶴機、カタパルトから外れました！」
シエラが悲鳴を上げた。
カタパルト固定具が外れたのだ。
「まずいっ！」
通路は一本線。
つまり、そこから外れたということは……。
「全員何かにつかまれ！」
俺は赤の対ショック体制のボタンを押した。
黄色のランプが回り短く三回、警報がなる。

『しゃぁあああああああああああああああああああ』

嗚呼、なんてこった。
次の瞬間、《アリアケ》の前部から炎が噴出した。
甲板を吹き飛ばし、《アリアケ》は航行不能に陥るほどのダメージを受けたのだ。
敵は勝手に自爆したこっちに愛想をつかしてどこかに消えていった。
結果的に勝ったのだ！

その後、《アリアケ》では大掃除が行われた。
主なGの発見箇所は美鶴の個室。
食べ散らかされたパンなどが転がっていた。

「美鶴……」

俺は小さく呟くと星になった美鶴に思いをはせたのだった。

「自業自得だよなぁ……」

そして美鶴星にそう呟いた。

続くかも～

「次こそは大丈夫しゃくよ」

『了解。
期待している』

「発進しゃくっ！！」

ガギ。

「な、何しゃくかぁ！？」

『カタパルトの上に置石ならぬ置き缶だ！
一体誰が……』

「そんなこといいゃくからカタパルトを止めてくれしゃぁあ！！！」

『全員何かにつかまれ！！』

その瞬間（アリアケ）の前部から（略

ちなみに缶を置いたのは美鶴本人。
みなさんも、ポイ捨てにはご注意を。

しゃくでば！　宇宙戦争（後書き）

あざっしたー。
どうっしたかー？
たまにはこんなしゃくでばもいいでしょう？
では～。

しゃくでば！　天空のお家？　（ちょいマニアックネタ注意）

ある夏の昼下がり。

「うっわぁ、おっきい雲ですねぇ～」

「だね。
あ、蒼そのアイス早く食べないと溶けちゃうよ」

真っ白のワンピースを着た蒼はジーパンを履いて
髪の毛を後ろでくくった詩乃と街中を歩いていた。
その途中ふと空を見上げたのだ。

「あっ、は、はい！」

「にしても大きいねぇ。
中に城でも入ってるんじゃないかって思うほどだね」

「……お城ですか？
詩乃姉様はなんだかんだでロマンチックなんですね」

詩乃はその言葉を聴いて反論を返そうとして
納得したように頷いた。

「あ～そうか。
蒼は知らないんだったね」

「？
な、何をですか？」

「『天空の城　ラ〇ュタ』ってアニメしらない？」

詩乃は蒼の落ちかかっているアイスを指差した。
それに気がつきあわてて舐め取る蒼の横から
にゅっとアイツが顔をだした。

「知ってるしゃくよぉ」

「私、知らないです。
どんな話なんですか？」

「あの、僕は知ってるしゃく……」

美鶴を置いたまま二人は歩き続ける。
丸で何もなかったかのように。

「ある時、少女が空から落ちてくるんだ。
そっから物語の幕が開くわけ。
で、ある少年が少女を助けて……」

「ふむふむ」

食べ終わったアイスの棒をふよふよと
口で動かしながら相槌を打つ蒼。

「――少女は捕らわれちゃうわけ。
そっからがまた……」

蒼と詩乃の間にぐわばっと美鶴が入り込んだ。

「ちょっと待って欲しいしゃくっ！」

「で龍の巣っていう低気圧の……」

「まぁたこの扱いしゃくかぁ！？
僕は主人公なんしゃくよぉ！？
いったいお前達はモブキャラの分際で
毎回毎回えらそうなんしゃくっ！！
ちょっとは主人公の話を聞いたらどうなんしゃくかぁ！？
今日はおふざけで来たんじゃないんしゃくよぉ！？
蒼に相談があって来たんしゃくからっ！！！」

「詩乃姉様、それで、それで？」

それすら無視して進む二人。
もはやここまでのスルースキルは敬服に値する。

「蒼、ココに飴があるしゃく。
頼みを聞いて欲しいしゃく」

「どうしたんですか？」

十メートルは離れていたはずだった。
なのにその距離を蒼は一瞬で蹴飛ばし
美鶴に詰め寄ったのだ。

「ちょっ、蒼っ！」

「ふっふっふ、詩乃、蒼はちょっと借りていくしゃくよぉ～！」

「おい、蒼っ！！
まぁ殺されるわけでもないし別にいいかぁ……」

・　・　・

私だ、ム○カ大佐だ。
冗談永久波音だ。
俺はお家でお気に入りのＤＶＤを見ていた。
何ってジ○リの。
この時期になるとむしょうに見たくなるんだよなぁ。
『天空の城　ラ○ュタ』だよ。

「波音、ちょっと入るしゃくよぉ」

ちっ。
顎野朗が。

「俺の至福の時間を邪魔してもらいたくないものだな」

ドアから入ってきた美鶴にそう投げかけた。

「こんにちわ～……」

その後ろからおずおずと入ってくる少女。
蒼さんだ。

「これはこれは。

副長様ではないか」

そういいながらも俺は思考をめぐらす。
珍しい組み合わせだな。
いつもは喧嘩しているばっかりかと思いきや。

「ふぅ、疲れたしゃく。
波音、お茶を出すしゃく」

「あ、私コーラが良いです」

二人はどっかと俺の部屋に座り込んだのだ。
それと同時に飲み物まで注文してきやがった。
なんだ、何だッてんだおい。

「じゃんけんな」

・　・　・

「四十秒で支度しな」

俺はじゃんけんの勝者として輝いていた。
美鶴にコーラを持ってくるように要求する。

「しゃくぅぅぅ……」

美鶴が部屋から出た瞬間蒼さんに話しかけた。

「なんで一緒に？」

「さぁ、私に頼みがあるからって……」

「頼み……？」

「それを今から言うらしいですよ」

「何で蒼さんともあろう方があいつの頼みを？」

蒼はちょっと目を逸らした。

言おうか言うまいか悩んでいるのだろうか。

「実は、私飴をもらいまして」

「は？」

飴？

「飴です、飴……」

蒼はポケットから夏の暑さで溶けかけた飴を取り出した。

ママこいつ飴なんて持ってやがった。

お前頼み事を飴で引き受けたのかい。

それでも軍人かいっ、えぇ？

飴って……バーカ……。

あいつが欲しいのは奴隷だろうが。

よく分かるねって？

だてに美鶴と一年間いるわけじゃないからな。

「それもらって？
え、待ってくれ。
それで頼みごとを聞いてやると？」

「はいっ！」

蒼は幸せそうにはにかんだ。

「はぁぁぁ……」

盛大なため息とともに失笑の眼差しで蒼を見る。
アレか。
ココで新たに判明したこととしては
戦艦一隻が飴玉五個で動くってこと。

「持ってきたしゃくよぉ」

「おうご苦労」

美鶴はコーラと三つのコップが入ったお盆を床の上に置いた。

「で、頼みって何ですか？」

蒼はコーラの炭酸を見つめながら美鶴に首をかしげた。

「実はしゃくねぇ。
ヴぉくある映画を昨日見たんしゃく」

ほう。

「そのお話はとーーーっても面白かったんしゃく。
で、僕は考えたんしゃく。
これ僕も作ってそこに住んでみたいなぁしゃくって」

誰もがシンデレラとか見たら思う幻想の一種だろう。
要するにそういうことだ。
美鶴なんてすぐに何かに影響されるんだから
今回もまたそういうことと納得する。

「で、その映画って何だよ」

「これしゃく」

美鶴はごそごそとポケットの中に手を入れた。
そして机の上にどんと置く。

「携帯？」

アンテナつきの。
少し笑う。

「間違えただけしゃく。
もう少しまつしゃく」

美鶴は「あれ～どこいったんしゃくかねぇ」とか
「うーむ、わかんないしゃくねぇ」と良いながらもガサガサと
ポケットの中を探っていた。

「あ、これしゃく」

そうして美鶴が自信満々に置いたＤＶＤのパッケージには
今しがた俺が見ていた映画のタイトルが書いてあった。
『天空の城　ラ○ュタ』である。
まぁ序盤の流れからしてそうだろうとは思ってた。

「これですか？」

蒼が手にとってふーんと言うように眺める。

「で、これの何を作ろうと思ったわけ？」

美鶴のことだからロボットとか言うんだろう。
それかゴリアテ（あの戦艦）とか。

「ラ○ュタ城を作るんしゃくよ！」

「　　」

言葉に窮した。
何言ってんだこいつ。

「いーや、これが出来るんしゃくよ。
何のために蒼を呼んだと思ってるんしゃくか？」

しばらく考えた。
そして閃いた。

「そうか！！」

謎は全て解けた。

俺の隣に座っている蒼さんはベルカ文明の遺産である
全長一六二四メートル、重さ二千五百万トンという
超兵器を動かす核。
つまり中の人。
しかもこの戦艦、宙に浮いている。
美鶴やるじゃん！
俺は無意識に美鶴に親指を立てていた。
ＧＪだ。
今回の人選は間違ってはいない。

「とりあえず私意味が分からないのでこの映画見てみますね」

「あ、俺も見る」

そんなわけで美鶴お空のお家計画がスタートしたのであった。
ろくなことになりそうだけどなぁ。

つづくかも～

しゃくでば！　天空のお家？　（ちょいマニアックネタ注意）（後書き）

ラピュタ見たことがない方はそうそういないでしょう。
誰もが見たことありますよね？
あれはすごい。
何度でも見てしまいます。
宮崎監督ってやっぱりすごいなぁ。
なんといってもまずオープニングからすごいです。
アレ、見直して気がついたのですがラピュタの興廃を暗喩してたんですね。
いやーほんっとうにすごい。
それで何が他にすごいかっていうｔ（ｒｙ

しゃくでば！　天空のお家？（ちょいマニアックネタ注意）

今から何をするのかというとだな。
蒼さんの戦艦、ネメシエルが宙に浮く仕組みを知ろうとしているのだ。
それを応用すれば美鶴の言うとおりお城を空に浮かせることが出来るようになるからな。

「まずこの丸をα光線と考えてください」

「しゃく」

「次にこのα光線にβ、σ光線が当たります」

「しゃ……」

「そこでE＝TPという光学公式を利用してエネルギーを増幅。新しく出来上がったθ光線、別名マルグリッド光線を……」

「……」

美鶴、机につっぷした。
ポカーンとした顔。
君のアホ面には心底うんざりさせられる。

「そしてむき出しになった特異光をさらに……」

俺はココで手を上げた。

「あ、蒼さん。
美鶴死んでる、死んでる」

蒼はへ？と美鶴を見た。
まったく、とため息を一つついて蒼は腕を組んだ。

「あなたが簡単に言えって言ったからいったんですよ。
急ぐと元も子も無くすからって……」

「……まっさかココまで難しいとは思ってもいなかったしゃくぅ……」

「もう……」

蒼はやれやれとホワイトボードのマジックを消した。
説明するだけ無駄だっただろ？

「じゃあ蒼さん、エンジンのところだけでいいから作ったら？
上は俺達が作るから」

動かない美鶴を蹴りながら俺は蒼に相談した。

「それがよさそうですね。
私がとりあえず下の部分を作ることにします。
一時間ぐらいで出来ますよ、これぐらい」

一時間。
やべ、すっげ、すっげ。

「あ、でもネメシエルほどの巨大な物はいくら私でも無理です。
ので家一軒、もしくは小型倉庫ぐらいが妥当かと」

「まぁ、そうだわな。
おい、美鶴聞いたか……っていねぇ！」

窓の外から声が聞えた。

「波音、波音！
ちょっとヴぉくのお家に来て欲しいしゃく！
まってるしゃくからねぇっ！」ポッ

何で顔を赤らめる。
頭おかしい。

「とりあえず、じゃあ私も行きますよ。
なんだか楽しそうですし……」

「ごめんな、蒼さん」

「いえ、私ものりのりだったので……」

やれやれと、玄関に出て靴を履きかえた。
美鶴の家までチャリで結構かかるんだよな。
五分ぐらい。

「クソ顎のお家はどこですか？
私一回しか行ったことなくて――」

あー、はい。

お誕生日の時か。

「ん、俺が一緒に行く。
チャリの後ろに乗れ」

・　・　・

「波音、ここしゃく！
ここーっ！！」

美鶴は河原にポツンと置いてある新品同様の倉庫の脇に立っていた。
よくみつけたなぁ、そんなもの。

「これを浮かすしゃくよ！」

ドヤ顔。
いやぁ、まぁ。
どうなの？
出来るの、蒼さん。

「まぁこれぐらいなら……。
出来ますね」

蒼の長い髪が風に舞った。
そういえば今日は風が強い。
家に帰って天気予報でも見てみるか。

「じゃあさっそく頼むしゃく、蒼ォ！」

美鶴は倉庫を指差してわくわくした表情で蒼に頼み込んだ。

「おいまて、倉庫でいいのか？
城作るんじゃないのかよ？」

「僕考えたんしゃくよぉ。
お城なんて巨大な物は無理しゃく。
波音は一体何を夢見てるんしゃくか？
お城じゃなくて倉庫ならいけるんじゃないしゃくか？
と思ったわけしゃく」

さらっとバカにされた気がする。
いやバカにされた。

「そんなわけで、蒼お願いするしゃくよ！」

蒼はむーと考え込んだ。

「材料費とか機密漏洩とか大丈夫ですかね。
私、それが心配で――」

「まだ飴残ってたしゃく」

「何とかしましょう。
早速作りますね」

蒼さん……。
なんかこう、寂しいな。

・・・

そして一時間がたった。
見事、倉庫は空に浮いていた。

「やったしゃくよ！」

「これ、中で操縦とか出来ませんから注意してくださいね。
鎖で地面とくっつけているので。
とりあえず浮いてるだけって感じです」

倉庫の下からまぶしい光が溢れ出て、また一段と強くなってきた風がゆらゆらと倉庫を揺らした。

「完成したしゃくねぇ。
僕本当にがんばったしゃくよ」

いやお前は何もしてないだろ。
にしても……。

「俺もちょっと乗ってみていい？」

美鶴は腕を胸の前で×印に組んだ。
そして唇を尖らせ、目を閉じて

「だぁぁめしゃく。
これは僕のお家しゃく」

いらぁぁ。

「いまから僕はこの中で生活するんしゃく。
寝るときもご飯を食べるときもずっとこの中しゃく。
しゃくぅぅ、夢がひろがりんぐしゃくぅ！」

そう言うと蒼から鎖を奪い去り
天空の倉庫を引っ張って自分の家の中の敷地へと入っていった。
倉庫が庭に浮いている。
そこに美鶴は布団とかを詰め込んでいた。

「――帰りましょうか」

「ああ」

・　・　・

一体俺は……何のために呼ばれたわけ？

夜になった。
風が収まらないので不安からテレビをつける。

『なお以前強い力をもった台風二十一号は――』

台風が来てんのか。
どーりで強いわけだ。

・

・　・

「すぴぃ……。
　しゃぁあああぁ……」

美鶴は出来たばかりの天空の倉庫で眠っていた。
強い雨、雷、風と三拍子の台風が来ているのに
起きる気配は一向にない。
雨は地面を緩め、風は倉庫を引っ張る。
めりめりっと地面から鎖が抜けた。
そのまま高度を上げながらどんどん流されてゆく美鶴。
そして……朝になった。

「ここはどこしゃくあぁぁあ！？」

倉庫の扉を開けて外を見た美鶴は唖然とした。
下には真っ青な海が広がり雲が浮いている。
一隻の小さな船が美鶴の下をくぐりかもめが倉庫に止まった。

「そ、そうしゃく！
　これは蒼の作った完璧な倉庫！
　落ちることはないんしゃくから携帯！
　携帯で助けを……」

圏外です。

しゃ……。

しゃぁあああああああああああああああああ……。

「で、でも海に落ちることはないんしゃくよ！
こうやって空を漂っていれば
飛行機の人とかが見つけてくれるしゃく！
そうしゃく！
僕は絶対に助かるしゃく！」

美鶴はガッツポーズをして自分を安心させた。

「安心したらまた眠くなってきたしゃくぅ。
お休みしゃく……。
起きたらきっとどこかの島にでもついてるしゃくよ、ふぁぁあ…
…」

続くかも～

あふたーすとーりー。

美鶴の倉庫が浮いて帰り道の会話。

「どうでも良いけどさ」

「はい」

蒼は首をかしげた。

「どうかしたんですか？」

「ベルカの技術、出してよかったの？
アレがアメリカとかに渡ったら……」

俺が心配そうに聞いたら蒼は少しはにかみ

「あぁ大丈夫ですよ。
そんなことも考えて明日の昼前にはエネルギーを
太陽光から採取しなくなって爆発しますから」

なるほど、なら安心だな。

しゃくでば！　天空のお家？（ちょいマニアックネタ注意）（後書き）

なんか、最後はブラックジョークみたいになっちゃいましたね。
さてこの後美鶴はどうなるのか。
続きません、爆発した後海上保安庁のお世話になりました。

しゃくでば！　顎の使い道

「なぁ、美鶴」

「しゃく？」

俺はから揚げを口の周りに油をつけながら頬張る美鶴に話しかけた。

「お前のさぁ」

「しゃくむぐむぐ」

「顎ってさぁ」

「しゃくむぐむぐ」

「うまいのかなあ？」

「しゃくぶふほぉ！？」

飛んでくるから揚げを傘でガードして俺は続けた。

「な、なぁに言ってるんしゃくかぁ！？
波音はとうとう頭がおかしくなっちゃったしゃくかぁ！？」

「いや、だってさ」

俺は考える。

骨の周りに肉がついているんだろ？

つまりフランクフルトだろ？

「うん。
じゃあフランクフルトじゃないとしたらさ」

「ふ、フランクフルトしゃくかぁ！？
一体何を考えているんしゃくか！？」

俺はふむと頷いた。

「美鶴の顎を液体水素の中に入れると仮定するだろ？」

「ちょ、ちょっと待つしゃく！！
もう意味が分からないしゃくイミフしゃくよ！」

「五月蝿いから黙れ。
で、入れるじゃん？
固まるじゃん？
それで釘って打てるのかなぁ」

美鶴はもう唖然として俺を見てきた。
お口はあんぐりあいて信じられないって目をしてる。

「じゃあもう一つさ」

「も、もう許してくれしゃくぅ。
どうせくだらないんしゃくよね？」

んなこたぁないぞ。
俺は指を振った。

「その顎さぁ。
避雷針とかにはならないわけ？」

「か、雷しゃくか！？
無理しゃく、真っ黒こげになるしゃくよぉ！！」

でもシエラとかネメシエルとかにぼこぼこにされてるわけだし
今更何を心配するんだと思う。

「じゃあこれは？
ずばり、聖剣エクスアゴバー」

「ちゃんばらも無理しゃくよ！
第一なんでヴォくの顎が剣とならなきゃならないんしゃくか！？
状況がわからないしゃくよ、じょーきょぉが！！」

ふむ。

「じゃあその顎の中にグレネード弾を入れて「無理しゃく」

おい、最後まで言わせろ。

「その顎のなk「無理しゃく！絶対！」

「そのあ「無理しゃくってば！！」

「そ「無理しゃくよぉぉぉお！！！」

俺は美鶴を殴った。

五月蝿い。

「しゃくぅ……」

「聞けって、いいから。
その顎の中にグレネード弾を入れるだろ？
んで気合で飛ばすと人間グレネードランチャーの完成じゃん？」

「しゃくぅぅん……」

それは反対の意なのか？

「じゃあさぁ。
その顎を蒼に頼んで改造してもらってさぁ……」

俺の横にひょこっと蒼が顔を出した。

「無理です。
私が嫌です」

断固拒否か。

「第一なんでそんな話になったんしゃくかぁ？」

「いや……な」

「一体何の話をしていたんですか？」

俺は蒼の頭を撫でて笑った。

「美鶴の顎の有効利用方法」
「なるほど――です」
蒼は美鶴の顎をじっと見た。
「確かにこのクソ顎の顎は邪魔ですよね。
取っちゃった方がいいかもしれませんね」
美鶴は両手を振って首も振った。
「ずぅぇえぇえええったい無理しゃくっ！！！！
やめてほしいしゃくよぉぉぉぉ！！！」
いい加減いラッとしてきた。
「じゃあさぁ、美鶴。
お前が考えろよ？」
「しゃく？」
「お前の顎、ずばり何の役にたつんだ？」
「しゃく……。
それは……。
……。
しゃぁあああああああああああああああ」
あ、美鶴逃げた。
自分でもうすうす気がついていたのかも知れない。

というか美鶴に突っ込まれる側ってのもまた新鮮だな。

「本当に何の役にたつんでしょうか……」

蒼も首を捻って悩んでいた。

な？

つづくかもぉ

しゃくでば！　顎の使い道（後書き）

いやホントなんの意味があるんだろう。
使い道が分からんですばい。

噛む為・・・なのは分かるんですがねｗ

しゃくでば！　第一視点

よっ！しゃく。
何を驚いているしゃくかぁ？
いつもは波音視点だからしゃくかぁ？
しゃふふふ。
う〝おくは主人公しゃくよ？
う〝おくが少し、すこぉーし願うだけで視点なんて簡単に変えれるしゃく。
学校についたしゃく。
教室のドアを今……！

「おっはよろーしゃくっ！」

みんなに大きな声で挨拶をするしゃく。
アイドルはきちんと挨拶をしなきゃならないしゃくからねぇ？

「おーう」

あっ、波音しゃく。
今日もあいからわず眠そうしゃくねぇ。

「おはよ」

シエラしゃく。
素っ気ないのは間違いなく僕に惚れているからしゃく。

「さっさと席に座れー」

あっ、桐梨の野郎が来たしゃく。
怒らせると面倒だからここは素直に従っておくしゃく。
またつまらない話と授業しゃくかぁ？
もううんざりしゃくよぉ。
眠い、寝るしゃく。

おはようしゃく。
顎が邪魔でなかなか机につっぷせなかったせいか寝違いが起こって首が動かないしゃく。

「おい、美鶴。
　飯だぞ」

波音がゆさゆさと僕を揺するっているしゃく。
僕は下を向いて寝ている状態しゃくから波音を見ることができないしゃく。
しかも寝違いで固まっているしゃく。
だぁれか助けるしゃくよ！

「寝てんだって。
　起こすな、ほっとけよ」

仁の声しゃくねぇ……？
よっくも、起きたら覚えとくしゃくよぉ……？

「そうだなぁ。

ほっといて飯くうか」

「そうしようぜ」

しゃぁあああん！！

気がついてくれしゃくぅぅぅぅう！！！

「美鶴寝てると静かでいいなぁ」

「うん。

僕もそう思う」

しえらぁあああああ！！！

許さないしゃくよぉぉおおお！！！

見ておくがいいしゃくっ！！！

・　・　・

起こしたときがお前らの最後しゃくぅぅ。

ずぇぇったいに許さないしゃくからねぇ……。

それにしてもお腹減ったしゃくぅ。

少しでも動かすと首が痛くて動かないしゃくよぉ。

体もしびれて……。

・　・　・

も、もう本当に誰か僕を起こしてくれしゃく。
本当にお願いするしゃくからぁ。
誰か……。
起こしてくれしゃく……。

・　・　・

「起立、礼！
さようなら！」

しゃぁあああああああああああん！！！！
どーして誰も起こしてくれないんしゃくかぁあああああん！！
しゃぁあああああああああああん！！！！

「お、おい美鶴の机がナイアガラの滝なんだが」

「へ？
波音何いってんの？
そんなわけ……ほんまや」

しゃあああああああああああん、しゃぁあああああああああああん！！！
お腹減ったしゃく、喉渇いたしゃくぅぅぅうううううううううん！！！
しゃぁあああああああん、しゃぁあああああああ！！
もう誰でもいいからっ！！

「み、美鶴？

大丈夫か……うわっ！！
泣いてる？」

「しゃ……しゃ……」

波音っ！！
やっぱりお前はいいやつしゃくよぉおおおおおおん！！！

「大丈夫か？
寝違いでも起こしたか？
ふんっ！」

ガギッ。
首の骨がぼきぼきっと行ったしゃくっ！！！

「は、波音っ！！
なぁあああにするんしゃくかぁ！？
ほんっきで痛かったしゃくよぉ！！？？！？！？」

「いや寝違いだったんだろ？
だからぐいっと捻ったんだ、ぐいっと」

そういって波音は両手をぐいっと傾けて見せたしゃく。
冗談じゃないしゃくよぉ。
ほんっとうに痛かったしゃく。

「で、でもありがとうしゃく、波音」

「きめぇ」

しゃく？
な、なんでしゃくか？
お礼をいって何で……。

しゃくでば！　第一視点（後書き）

多分こんなかんじです、美鶴。
どうです？

あなたも美鶴になってみませんか？

しゃくでば！　美鶴の文化祭まとめ

九月六日　前夜祭

俺は朝学校に来ても思い出した。
そうか、今日は前夜祭か。
高校生活初の三日ぶっ続けの文化祭。
たのしみっちゃ楽しみだ。

「波音、おはよ」

仁は初めから知っていたようでわくわくした表情で俺の肩を叩いた。

「うす」

「おは！」

「お、おはようございます……」

その仁の後ろから詩乃が蒼をつれて来ていた。
詩乃はテニス部の衣装を纏っている。

「お～、おはよう。
てか、蒼つれてきてよかったのか？」

「んー、いいってさ。
一般人にも貢献していることだしけち臭いことはこの三日間なしだって」

大塔高校にしてはいい選択だな。

「おっはよーしゃくっ！！
今日はいい日しゃくねぇ！！」

「おー、美鶴。
来たか」

そのシルクハット姿はすごく目立つんだな。
しかもこいつ身長超高い。
俺は美鶴に手を上げてあいさつした。

「波音、波音！
一緒にお店を回ろうしゃくよ～！
フランクフルトとか焼きそばとか色々あるんしゃくよ！！」

まぁ……。
別にいいか。

「おけ～。
とりあえずオープニングを見に体育館行くぞ」

仁が先頭に立って、蒼は背が低いおかげで前が見えないのか、詩乃の服の裾をがっちり掴んでいる。
美鶴がその後ろを鼻歌を歌いながら続いて俺が腰を叩きながら欠伸をした。

・　・　・

オープニングムービー見た。
なんというか、すごいクオリティだった。

「今からお店回るわけだが……。
お前お金持ってきた？」

俺は美鶴にうちわをパタパタさせてシルクハットを飛ばそうと試みたが失敗した。

「もっちろんのろんしゃくよぉ」

誇らしげに財布を見せられた。

「じゃあ、私はテニス部でから揚げやんなきゃいけないから。
仁はマスコット製作で行かなきゃ駄目なんでしょ？」

詩乃が着替えていたのはそういうわけだったのか。
変にせくすぃでいいと思ったのに。

「じゃあ、蒼をよろしくね。
行ってきます、面倒だけど」

詩乃は蒼を俺に預けて屋台の方へ走っていった。

「じゃあまぁとりあえず……。
行くか」

「待つしゃく！」

三人になって寂しいってのになんだ、美鶴。
他にも遼とか冬蝉とかいるけど中の人が書くのが面倒だから省かれている。
別に俺の友達が少ないわけじゃない。

「蒼さんは何が食べたい？」

「私は……その……。
フ、フランクフルトを……」

「じゃあ行くか」

「ま、待つしゃく！
待ってくれしゃくっ！！」

俺は蒼にはぐれんなよ、と伝えて人ごみの中に分け入った。

「おっす、永久妹か？」

「ちげーよ」

色々なクラスの友達から話しかけられた。
主に蒼について。
妹に見えるのかな、やっぱり。

「いらっしゃーい
何本？」

俺も食うから……。

「二本で頼む」

俺はVサインをした。

「二本ね、りょーかい。
二本よろしくっ～！
お客さんはマスタードつける派？」

俺は蒼を見た。

「つける？」

「……辛いの駄目です……」

そうなんだ。

「俺はつける。
たっぷり頼む」

「はい、出来上がり。
ありがと、また来てくれ」

紙コップの中に入ったフランクフルトを受け取った。
一本はケチャップだけ、もう一本はマスタードたっぷり。
辛そう。

「ま、まつじゃぐぅ！」

「おい、邪魔だヴォケ！！」

「ご、ごめんしゃくっ！！」

何か聞えたけど別にいいだろ。
それから俺は蒼に連れられて色々行ったな。
主に甘いものばっかり。

「これおいしいですっ！」

ちなみにお金は俺が出した。
詩乃から蒼は五百円しかもらってないようでお金が足りなかったからだ。
結構痛い出費ではあったが……。

「波音さんありがとですっ！」

チョコを口いっぱいに頬張って笑う蒼がなにやら可愛いので別にいいやと思う次第。

九月七日　文化祭

「あれ？

美鶴来ないの？」

俺は教室にいる美鶴に話しかけた。

「どーせ、ヴぉくがいたところで変わらないしゃくよぉ。
さぁ行ってくればいいしゃく。
べーっつにどーでもいいんしゃくよぉ。
第一、文化祭ぐらいではしゃぐ奴がガキなんしゃく。
そもそもヴぉくはこのしゃくでばの主人公なのにまったく出番が……」

がらがらがら、ぴしゃっ。

「じゃあ行こうぜ」

またお店回って蒼にねだられてパフェ買ったりして。
なんだかんだやって三時間ぐらいで教室にお茶でも飲みに戻った。

がらがらがら～ぴしゃっ。

「すぴぃー……。
じゃがが……しゃくぅ……」

教室の中はクーラーがかかってなくて蒸し暑かった。
それを超えて美鶴はいびきをかいて寝ていた。

「なんだ、寝てんのか……」

俺は起こさないようにそっとお茶を飲んで教室を出た。

・・・

で、俺が文化祭終わって全員が教室に帰ってきてようやく美鶴は目を覚ましたようだ。

「しゃあぁあああああああああああああ！！！！」

なんか叫んでるけどな。

「寝すぎたしゃくぉあぁあああああ！！！！」

うるさい。

もちろん続かない

おまけ

体育祭は美鶴出た。
色別リレーに出た。
足案外早いこいつ。
でもシルクハット邪魔でこけまくってみんなからブーイングくらいまくっていたのは

いうまでもないだろう。

ちなみに元となっているのは美鶴のツイッターｂｏｔです。

しゃくでば！　美鶴の文化祭まとめ（後書き）

美鶴の文化祭はさんざんでしたね。
多分来年もさんざんなんでしょう↑

来年ぐらいはいい文化祭にしてやりたいですｗ

「さあ美鶴、早く次のところへ行くぞ？」

そういってシエラ法師様は美鶴に呼びかけました。

「ま、待ってくれしゃくぅ……。
法師様、疲れたしゃくよぉ……」

如意棒を顎に備えた美鶴（孫悟空）はふぅ、とつらそうです。

「情けないですねぇ……。
どうしてそんなに休んでばっかりなんですか？」

降妖杖（三日月型の武器）をもった蒼（沙悟浄）は美鶴をせせら笑いました。

「つらいものはつらいんしゃくよぉ……」

「ほら、立て美鶴」

シエラ法師様はなにやら呪文を唱え始めました。
すると……

「しゃぁあああああああ！！
い、痛いしゃく！！！」

美鶴のシルクハットが縮み、美鶴の頭をぎりぎりと締め付けるではありませんか。

「分かった、分かったしゃくよぉ！！
波音、力をかすしゃく！」

はー、やれやれ。
俺（猪八戒）は釘（すき『鍬』みたいな武器）を地面において立ち上がりました。

「ありがとうしゃくぅ、波音～」

「ん」

一行は砂漠を歩いています。
もう日が暮れそうです。

「足が痛いしゃくぅぅ！！
助けて欲しいしゃくぅぅぅ！！」

「うるさいですよ、美鶴。
静かにしてくださいよ」

蒼はまったく、と髪をかき分けて言いました。

「波音、助けてあげろ」

「え、なんで俺が……」

「逆らうのか？」

「いえ……」

俺はシエラ法師様には逆らえません。
しぶしぶ美鶴を助けようとした、そのときでした。

「金目の物を置いていけー！」

近くの石の脇から屈強そうな男が二十名ほど現れました。

「蒼、やってしまいなさい」

シエラ法師様はその男を見もせずに蒼に命令されました。

「了解です、シエラ姉様」

蒼は武器を男達に向けました。

「たかが小娘一人、なめるんじゃねーぞごらぁあああんぁあああ！？」

日本語でおｋ状態です。
蒼はにやりと笑うとくるりと武器を一回転させました。

「な、なんだ……急に空が暗く――」

男達は上を見上げて言葉を失いました。
そこには超巨大な戦艦が浮いていたからです。
次の瞬間閃光が走り、男達は全員消失しました。

「さ、行きましょうシエラ姉様」

・

・　・

それから二日たちました。
シエラ法師様たちはある村人から金閣と銀閣の退治を頼まれました。
シエラ法師様はそれを軽々と承諾すると金閣、銀閣の済む洞窟に向かいました。

「たのもー」

俺の言葉に反応するように扉が開くと中から二メートルはある怪物が現れました。

「なんだ、貴様らは？」

怪物は唸るような声で俺達を眺めます。

「しゃーっしゃっしゃ！
死ぬしゃくよぉ！」

美鶴の顎如意棒が唸ります。
金閣はそれを掴んでポイッと放り投げました。

「しゃぁあああああああ」

美鶴は洞窟の壁にぶつかりのびてしまいました。

「なんのようだ？」

何もなかったかのように金閣は俺達に問い直しました。

銀閣も横で頷きます。

「村人から退治を頼まれた。
だから――」

シエラ法師様は右手のレーザーで金閣を吹き飛ばしました。

「なっ――!?」

戸惑う銀閣の首にシエラ法師様は刃を突き立てると

「やめ……もう悪さはしな――!」

銀閣の体をばらばらに分解してしまいました。

・　・　・

「ありがとうございます。
これでようやく平和に過ごせます」

村人Aがシエラ法師様にお礼を言います。

「いやいや、当然のことをしたまで。
では……」

姿が遠くなってゆくシエラ法師様の後姿を村人達はありがたや、と拝みました。

「ところで、シエラ法師様のご一行の人数が減ってはおらぬか？」

ふと村人の誰かがそんなことを口にしました。

「なにやら金閣に食われてしまったらしい。
悲しそうな顔をしていらっしゃった……」

「しゃあああああああああああああ！！！
ほっていかれたしゃぁあああああああああくぁぁあああ！！！」

続くかも～

しゃくでば！　灼遊記　（後書き）

もちろん続きません。

たまには文章を変えてみるのもいいかなーっと思ったしだいです。

しゃくでば！　マジ本気。

・

「しゃぁぁあん！！！
そんなのありしゃくかぁあああ！？！？！」

「赤甲羅型通常弾頭ミサイルはバナナ型チャフをあらかじめ車の後ろにセットしておくんだ。
そうすりゃー防げる」

「棘付青羽甲羅型爆炎拡散弾頭ミサイルはどうすりゃいいしゃくか！？」

「あー、それは運だな。
正直避ける方がすごい」

「もう一回しゃくよ！！」

「おｋ」

・　・　・

「しゃあああああああああん！！！
そんなぁあああああああん！！！」

「あえて星型無敵装甲を最後まで発動させないってのも手だぞ。
八位にわざと落ちてそこから星型無敵装甲をゲットするだろ？
んでー……みたいな？」

「も、もう一回しゃく！！」

・　・　・

「しゃあああああああああああああ！！！！！」

「落ち着け。
とりあえずテクニックを磨け。
いきなり水にダイビングするドライバーがどこにいる」

「そ、そうしゃくね！！
ま、まぁ今のは本気じゃなかっただけしゃくからぁ？」

「はいはい」

・　・　・

「しゃあああああああああん！！！
あの茸型急加速ロケットブースターがうざすぎるしゃくよぉぉ！
！！」

「直線で使わないからだろ。

アホか」

「緑甲羅型ロケット弾ってどうやってよければいいんしゃくか！？」

「それはドライビングテクニックの問題じゃね？
まぁそろそろ完走できるようになってきてるし大丈夫だろ」

・・・

「ま、まぁ今の波音の走りは七〇点しゃくね？
次からはヴぉくが百点の走りを見せてやるしゃくよ」

「ほいほい」

・・・

「ま、まだ本気じゃないしゃくよ。
大体波音の実力はつかめたしゃく。
次からが本番しゃく」

……。

・・・

「このっ、ずるいしゃくよ！！」

「いてっ！
この野朗、なにすんだ！！」

「ゴール直前で丸型手榴弾なげてくるなんて反則しゃく！」

「うるせぇ、それがこのゲームなんだ！
ヴァリオカートは戦争ゲーなんだよ！！」

「もー許さないしゃくよ！
そもそもどうしてヴぉくばっかりを狙って赤甲羅型通常弾頭ミサイルをぶっ放すしゃく！？」

「楽しいからに決まってんだろアホか！！」

「それがむかつくんしゃくっ！！」

「このっ、また殴りやがったな！
いいだろ、次の場所で勝負決めようぜ！」

・　・　・

「美鶴死ね！！」

「ぐふっ、だっえ、じゃぐぁ！
負けだくながっだんじゃぶもん！！！」

「だからって人のコントローラーに手を出してくんな！！
リアルファイトしたいのか、この野朗！」

「も、もう波音なんてしらないしゃくもん！！
ふーんだ！！」

「帰りざまにチップッス沢山頬張ってんじゃねー！！
コーラ口つけて飲むな！！」

「もう帰るしゃく！！
ぶーだ！！！」

ったくもぉ……。
美鶴は怒りながら部屋から出て行った。
友情崩壊ゲームって本当にあるもんだなぁ。

オチなし。

美鶴の言い訳。

「まぁヴぉく本気出してなかったしゃくし？」

「そのキャラで勝てんとおかしいしゃく」

「波音の実力分かったしゃく。
次から勝ちにいくしゃく」

「僕は本気じゃないしゃく！
だから負けてもどーでもいいしゃく！」

「ヴぉくが勝ったらお前が可哀想だからわざと負けてやってるだけしゃく！
もうむかついたから本気出すしゃく！」

他にも多数あり。

つづかない～

しゃくでば！　マジ本気。（後書き）

なんか漢字ばっかりで難しいですが……。
大丈夫ですよ。

ええ。
よく読めばどれがどれか……分かるはずですｗ

しゃくでば！　人類絶滅の日

「と、いうわけでぇ、しゃく。
あまりのネタのなさに時事ネタに乗っかってみる次第しゃくっ」

何がと、いうわけでぇなんか知らんが。

「今日は十月二十八日。
なんかマヤ暦がどーのこーので今日人類が滅ぶらしい」

俺は何やらわくわくしている美鶴に話しかけた。
こいつ、お祭り気分なんだろうなぁ。

「えっ？人類が滅ぶんしゃくか？」

「えっ？
知らないでわくてかしてたの？」

「しゃくしゃく」

はぁー……。
胃が痛い。

「波音、本当に人類絶滅しゃく……か？」

「えっ、うん。まあ」

多分だけど。

「ならこんなことしている場合じゃないしゃくよぉ！？
まだ僕やりたいことがたぁーっくさんあるんしゃくっ！」

ほう。

「例えば？」

「た、例えしゃくか？
しゃふっふっふ……」

美鶴汁が顎から分泌されている。
前も言ったと思うがこの美鶴汁は美鶴がえっちなことを考えると出てくるのだ。
やだ、臭い。
よし殴ろう。

「じゃぐっ」

「それ以外だ、それ以外。
やりたいこと！」

「ほっぺたが痛いしゃくぅ～。
そうしゃくねぇ……。
一度でいいから僕が貯めに貯めたお金を全部おやつに替えて……
それで……」

そういえばバイトしてたなぁ、こいつ。
あれからまだ続けてるし、結構お金貯まってるんじゃないか？

「ちなみにいくらあるんだ？」

「ざっと一万円しゃく」

おお！！

「いいやん！
やってまえ、やってまえ！」

「よーっし！
やるしゃくっ！
やってやるしゃくよ！
もともとは二万円のＶｉｉを買うために貯めていたしゃくが使っちゃうしゃくっ☆」

美鶴は俺の家から飛び出していった。

・　・　・

「か、買ってきたしゃくぅ……はぁはぁ」

「お疲れ」

出ていって一時間後。
手に大量のおやつを持って美鶴は帰ってきた。
チョコやら飴やらいろいろある。

「そしてこれを……一気に食うしゃく！
しゃむぐむぐ……」

包装を破り、中のおやつを口いっぱいに詰め込む。

「波音も食べるしゃく？」

「いや……。
俺はいい……」

腹壊しそうだ。
あまり甘いの好きじゃないしな。

「そうしゃくかぁ。
甘くておいてぃーしゃく。
チョコおいてぃーしゃく。
飴おいてぃーしゃく。
しゃーしゃしゃっ」

なんかむかつく……。
黙って食いやがれこの大ばか者。

「しゃむしゃむ……」

あ、何か俺も腹へってきたなあ。
というか地球本当に滅びるのか？

・　・　・

そして十二時間ぐらいが過ぎた。

「げっぷ……。
もうたべれないじゃぐ……」

「そりゃ全部食う必要はなかっただろうに全部食ったからだろうが」

ゴミ箱からあふれ出たゴミ。
包装のビニールが足の踏み場もないぐらいに散乱している。
俺の家なのに。

「ん？」

ぽーん、ぽーんと携帯が小さく震える。
深夜十二時を過ぎたのだ。

「げぇっぷ。
まだ地球は滅びないしゃくかぁ？
いーつまで待たせるしゃく？」

あー。

「美鶴、非常に言いにくいんだが……」

「しゃく？」

こいつが口開くと超甘い臭いする。
しゃべるなよ、もう。

「もうな。
二十八日終わった。

つまり――」

大きく息を吸った。

「人類は滅ばなかった」

「な、なんだってーしゃくぁぁあ！！！」

あふたーすとーり

「なぁ、波音」

？

どうした、シエラ。

「どうして美鶴あんなに落ち込んでんの？」

「ああ。

あんまり触らんほうがいいぞ」

「分かってるけど……」

「一万円もつかってヴぉくはおやつを……。

おやつに一万円も……。

ヴぉくは一体どれほどバカなんしゃくかぁ……」

もっと早いトコ言ってやればよかったかな……。

しゃくでぱ！　人類絶滅の日（後書き）

やれやれ。
今日は地球滅びそうにないですねぇ。

滅びられたくはないんですが少しがっかり……↑おい
他にも色々オチ考えていたのでここで紹介しようか――な。

いや、次、次の更新に回します。
それでは、ありがとうございました。

しゃくでば！　シャクネットミツル

「はい、こちら。
新しいＴＶしゃくぅ」

そういって美鶴は隣においてあるテレビをぽんと叩いた。

「このプレズメス一二型が今ならたったの四万円しゃく！
どうしゃく？
お買い得だと思わないしゃくか？」

ごそごそと台の下からテープレコーダーを取りだす。
いや、違う。
あれはＤＶＤプレイヤーだ！

「それに今ならなんとこの最新型！
ＳＯＮＮＥＹのブルーレッイ再生機もついてくるしゃく！
それでもお値段は変わらずたったの四万円しゃく！！
テレビの前の皆、どうしゃく？
お買い得だと思わないしゃくか？
そうしゃくよね。
思うしゃくよね。
お電話は０９０－〇×〇〇－×××〇×にお願いするしゃくね！」

そういって美鶴は隣に立っている俺にぱちんとウインクした。
ＧＪな紹介だったぞ美鶴。

「それじゃあ次の商品に移りたいしゃく！
次の商品はこちらっしゃくよ！」

いつの間にやらＴＶは消えて変わりに一枚のぬのに覆われた台座が出てくる。

「アイスフルメーカーしゃく！
これはどんなのかっていうとしゃくねぇ……ごほん」

スタジオが暗闇にどっぷり浸かり、セットが容易される。
俺はパジャマに着替え、美鶴は台所に立った。
ライトが点灯。
場所は朝、俺が起きてきた瞬間という場面になっているはずだ。

「ふあー、おはよう美鶴」

わざとらしく欠伸をして寝起きをアピール。

「おはようしゃく、マイケル」

誰だよ。

「もう少しそこに座って待っていてくれしゃく。
もうすぐ出来上がるしゃくから」

「何がだい？」

俺は立ち上がり美鶴の手元を台所と通して眺める。

「ほら、アイスクリームしゃくよ？
美鶴特製コクァアイスしゃく！」

俺は「へぇ！！」とハイテンションに返事をしてスプーンで一口すくって口に入れた。

「うまい！
なんだい、このおいしさは！？」

わざとらしくおののいてみせる。

「ＨＡＨＡＨＡ、おいしかったしゃくよね？
これしゃくよ、これ！」

そういって美鶴は戸棚からカップのようなものを取り出した。

「なんだい美鶴、これは？」

「マイケル、まぁ見てるしゃくよ。
これはアイスマンジャガーっていうナイスな代物しゃくよ。
これはこうやって……」

そういうと美鶴はコクァコーラをアイスマンジャガーのポットの中に入れた。

「スイッチを入れるだけ。
どうしゃく？」

「ＯＨ！
本当にそんなに簡単であーんなにベリーナイスなアイスが出来るって言うのかい？
ＨＡＨＡＨＡＨＡ、そんな便利な道具があるわけないだろう？
そんな道具があったら二〇一二年に地球は滅びないよ？」

美鶴はにやっと笑うとスイッチを入れた。
予定通りである。

「これでもう完成するしゃくよ？
テレビの前の奥様、あなたが洗濯物をしているうちにアイスクリームが出来ているしゃく。
どうしゃく一台」

「おいおい、それはまだ早いってもんだぜ？
とりあえず食わせてくれよ」

「Ｙｅａｈ！
そうくるのを待っていたしゃくよ！」

「Ｙｅｓ！
うまいのを頼むぜＡｈ？」

美鶴はアイス略の中からコクァコーラアイスを取り出した。
俺はさっきも食べたそれをまたさぞうまげに食う。

「Ｗｈａｔ！？
これめっちゃくちゃうまいぜよ、美鶴！」

「そうだろう、そうだろう？
そりゃうまいのを作っていたしゃくからね？」

「他にいろいろ作れたりするのかい？」

「そうくると思っていたしゃくよ？

そう、これは中に入れるジュースによってアイスが出来るんしゃく。
だからアイスの可能性はジュースの数だけあるってことしゃくよ！」

どうだ、この白熱の演技。
これを見た人はついつい買っちまうだろう。

「そいつぁすげぇ！！
なんてハイテクなマシーンなんだ、こいつぁ！？
俺も欲しくなってきちまったぜ、美鶴！」

「ｏｈ、マイク！
そうだろ、こいつは本当にイカスマシーンだろう！？」

しゃくがないぞ美鶴。
で、俺はマイケルだろ。
誰だ、マイク。

「Ｈｍｍ……でもパンを焼いているうちに出来るマシーンだ。
相当高いんじゃないのかい？」

俺はまたアイスクリームを口に入れつつ聞いた。

「答えはＮＯしゃくよ、マイケル。
なんとこのマシン一機。
たったの五千二百円しゃく！」

「Ｏｈ，ｒｅａｌｌｙ！？
めっちゃくちゃ安いじゃないか！」

「ふふふ、どうしゃくか、一台」

「美鶴！
お前はなんてナイスなやつなんだ、イカスぜ！
マジでナイスガイだぜ！！」

「あったりまえのろんしゃくよぉ！
ヴぉくほど最強な紹介者はいないしゃくよ？
これを見ている他のメーカーさんもどんどんヴォクに頼むといいしゃくよ？」

「おいおい、がめついぞ？」

「「ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ！！」」

・　・　・

「で、一台も売れなかったと？」

「しゃくぅ……」

「原因は何だとおもう？
ここに視聴者から一番多かったクレームをまとめてみた」

「しゃく？」

「第一位。

顔がキモイが圧倒的だった」

「しゃ……？

しゃぁあああああああああああああああ……」

おちよわし、おちなし

しゃくでば！　シャクネットミツル（後書き）

どうです？
みなさんも、アイスマンジャガー。
おいしいアイスをいつでも！

しゃくでば！　人類滅亡の日　【The Another End】

人類滅亡の日。
結局来なかった……と思いきや。
どうやら今日、十一日もやばいらしい。
そんなしゃくでばの世界のもう一つの終わりを見てみよう。

（前回の人類滅亡の日の別編です）

前回までの牛筋。
人類最後の日らしい。
で、美鶴はおやつが一万円分食うことを思いつく。
俺は呆れながらもそうしたら？と、アドバイスするのだった。（本当かよ）

「で、おやつを買ってきたしゃくぅ～」

美鶴はほれ、と俺にビニール袋を見せつけた。
本当に買ってきたよ、こいつ。
一万円相当。
バカじゃないのか？

「まじでやるのか？」

「当然しゃく。
人類がどう終わろうが僕はこれを食いきってみせるしゃくっ！
しゃむっ！！
しゃむぐむぐしゃむぐぐぐっ！！
ヴォラックサンドゥアーがおいしいしゃくっ！！
しゃむっ！！
しゃむごごごごっご！！！」

えーと。
吸引力の変わらないただ一つの顎。

「しゃごごごっ！！
ずぶっじゃがががららんむぐぃしゃ！！
すゃごそっそっつつつ！！！」

なんて音だよ。
普通じゃありえない音だぞ、それ。
どういうことなんだよ。

「そぉれにしてもぉ！！
今は何時なんしゃくがぁああっんぉぉぉ！！！」

今か。

「夜の七時ってところか……。
それにしても明るいな。
一体なんでこんなに明るいんだ……？」

俺は窓から外をちらっと見た。

「うぁあああああああ！！！！」

絶叫した。

小さいながらも隕石が燃えながら落ちてきていたのだ。

そりゃ明るいわ。

――じゃなくて。

「おい、美鶴！
逃げるぞ！！」

「いっやぁしゃくっ！！」

俺は美鶴の首筋を掴んだ。

だが美鶴はおやつをむぐむぐ頬張ってその場から動こうとしない。

「バカ！！
しにてぇのか、ボケ！！」

なんで、国は言わなかった！

この街は見捨てられたってのか！？

「おやつはヴぉくのものしゃくっ！！
ずぇーったいに波音には渡さないしゃくっ！！！」

ああ、もう！！

俺は美鶴の首根っこを掴んで窓に目を無理やり持っていった。

「しゃ……？」

美鶴はポロリと手からチョコを手放す。

「しゃ、しゃあああああ！！！
逃げるしゃくよぉ、波音！！！」

言われんでも！！
車はあるか！？
そうだ、シエラは！？
そんなことを今気にする暇はない。
最終兵器でもあんなものに立ち向かえるわけがないんだ。
早く逃げないと死ぬ。

「な、なんしゃくかぁ、あれ……？」

美鶴は恐怖で窓から動けなかったのだろう。
隕石よりも大きな船がこの街を守るように空に浮いているのを見つけた。

「超空要塞戦艦ネメシエル！？
蒼さんでもあれは無理だろう！？」

俺もすぐにその光景を目にして悲鳴を上げる。
そのネメシエルの隣を二つの小さな粒が飛んでいるのが見えた。

「シエラとメイナも……！」

「しゃ……。
が、がんばるしゃくよぉ、三人ともぉ！！！
ヴぉくはまだ蒼のちっぱい（※ちいさいおっぱい）に触ってないし
シエラのデカぱい（※おっきいおっぱい）にもメイナのにも触っ

てないしゃくぉぉぉ！！
この三人を両手にはべらせてハーレムを築きあげたりとかもしてないしゃくぅ！！
それに、それに！！
嗚呼、沢山ありすぎてえへへへへしゃく」

このタイミングでそれをカミングアウトっすか。
さすがっす、美鶴。
美鶴汁臭いから殴っていいか。
そんな俺達を無視してだんだんと輝きを増してゆき、落ちてくる隕石。
その隕石に向かってネメシエルが艦首を向けた。
甲板上の装甲が展開され、それだけで普通の戦艦の大きさを超える主砲が露出する。
シエラとメイナもお互いの手をつなぎあい、一つの巨大な砲身になると
ネメシエルの主砲にくっついた。
隕石よりもまぶしい光がそこから発せられてゆく。

「がんばれぇえええ！！
ここでしゃくでばが終わってたまるかぁあああああ！！！
ここは俺の本編でのストレス発散なんじゃヴぉけぇえええええええ！！！」

「そ、そうだったんしゃくかぁ！？
ひどいしゃくよぉ！！」

「うるせぇえ！！
本編は今色々とシリアスなんだよぉぉ！！！」

陽天楼、ネメシエルの別名が現すとおり、夜だというのに
一つの太陽がその場に出現したようだった。
その光は急速に縮まったかと思うと

「しゃっ!?」

目を潰すほどの巨大な光柱となって隕石を飲み込んだ。
思わず目を覆う。
まぶしすぎて目が開けられない。
ようやくその光も収まったかと思うと

「や、やったしゃくよぉ、波音!波音!」

美鶴が俺の背中をばしばしと叩いた。
俺も目を開けて空を見る。
そこにあったはずの隕石はなくなっていた。

「俺達、助かった……のか?」

「うっぉおおおおおおしゃくぉぉぉお!!!!」

感涙極まってますな。
俺も涙で前が見えないよ。
人類はこうして守られたのであった。
めでたし、めでたし。

「ああ!!
せっかくおやつを一万円分かったしゃくよぉ!?
無駄遣いしちゃったしゃくぅ……。
またバイトで貯金しゃくぅ……」

「まぁそう落ち込むなって。
生きてる。
それでいいじゃない」

つづくかもぉ。

☆おまけ☆

「で、誰がちっぱいですか、クソ顎」

と、蒼。

「へー、そんなHなこと考えていたんだねぇ？」

と、メイナ。

「――死ね」

と、シエラ。
三人はいつの間にやら美鶴の背後に立っていた。
あの美鶴のカミングアウトを聞いていたというのか。
すげぇ余裕だ。

「しゃ！？
しゃぁあああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！」

しゃくでば！　人類滅亡の日　【Ｔｈｅ　Ａｎｏｔｈｅｒ　Ｅｎｄ】（後書き）

ありがとうございました。
いやぁこんなエンドを考えていたのです。
実際こっちの方がよかったかなぁ……と思わないでもないです。
まぁもう一つのしゃくでば、人類滅亡の日、として
楽しんでいただければ幸いです。

しゃくでば！　蒼の危険

「波音さん、波音さん！」

家のドアがバンバン叩かれた。
せっかくの日曜日だというのに誰だろう。
玄関の扉を開けた。

「おやおや、蒼さんじゃん。どうしたんだ？」

息を切らせ走ってここまで来たようである蒼は頬を赤く染め苦しそうだった。

「た、助けてください！」

「へ？」

蒼さんが俺に助けを？

「とりあえず中に入んな？」

・　・　・

「実は……ネメシエルを操れなくなったんです」

へ？

「ネメシエルってあの戦艦だよな？」
あの一六二四メートル、二千五百万トンの？
「……はい」
「いつから？」
今はシエラもメイナも、詩乃もみんなして日曜日なのに学校に泊まり込みの勉強会中で誰もいない。
「今朝からです……」
時計は午後二時。
「本当に動かないの？」
再度念のため聞く。
「はい。何回やっても何回やっても何回やっても何回やっても……ダメだったんです」
「そぉんな事があるんしゃくか？
とんだ災難しゃくねぇ、蒼ォ？」
出たー。
流石、主人公。
出るときも突然だな。
「あ……クソ顎……」

美鶴はくちゃくちゃと俺の冷蔵庫中にあったケーキを食べていた。
クリームが顔中にくっつき美鶴の顔は真っ白だ。

「なんでそうなった？」

ケーキぐらい綺麗に食えんのか。

「食ってたらこうなったしゃく。そんなことより、蒼ぉ？」

蒼さんは首をかしげた。

「何ですか、クソ顎？」

「そのクソ顎っていうのやめた方がいいと思うしゃくよぉ？」

にやける美鶴。
なんか調子にのってる顔だ。

「へ、ど、どうしてですか？」

「わーからないしゃくかぁ？
今の蒼はヴォくには勝てないからしゃくよぉ？」

ぎろんと怪しい目つきで蒼を挑発する美鶴。

「う……」

確かに蒼さんの体や力を考えれば美鶴に勝てるのかどうかすら……。

「で、でも私が負けるわけがありません！
クソ顎なんかに負けてたまるかですよ！」

「ならやってみるしゃくかぁ？」

あー、暴れるなら家の外で頼むぜ。

・　・　・

「しゃ……しゃ……」ピクピク

「えー……」

結論から言うとあっさり美鶴が負けた。
蒼さんがえいっとばかりに突き出したパンチが顎に当たったのだ。

「しゃ、しょおんなぁ……しゃく……」

「勝っちゃいました……」

「まあそれはさておき」

地面でびくんびくん波打っている美鶴を無視して蒼との話に戻る。
外だけど。

「原因が分からんな。
なんでネメシエルが動かせないのかも」

「私このままじゃ……核としてクビになっちゃいますよ……。
ベルカ軍からも追い出されて……うぅ……」

半泣きになっている蒼。

「ん？
蒼一体何を頭につけているんしゃくか？」

いつも以上に早く復活した美鶴が蒼の頭についた何かを取った。

「へ？
何がついていたんですか？」

「これしゃくよ、これ。
アルミホイルしゃく」

アルミ……？

「アルミですか……！？
わ、わ、ありがとうございます、クソ顎！
これで……」

蒼は目をつぶった。
急に空が暗くなり見上げた。
押しつぶされるように低い高度をネメシエルが浮いている。

「やったっ！」

アルミホイル……ね。

「どうしゃく？
ヴォくのおかげだったしゃくよね？」

「あ、クソ顎さん。
最後にこれだけ試してもいいですか？」

威張る美鶴に蒼がお願いする。

「んー？
当然しゃくよぉ。
なーんでもばっちこいしゃく！」

「ありがとうございます。
では……」

ゴンゴン……とネメシエルの砲塔が動いた。

「発射♪」

「しゃ！？」

オレンジ色の光が目をつぶらせたかと思うと美鶴はもうそこには……いなかった。
いや、いるけど。
黒こげで。

「やった、完璧に元に戻りましたっ」

「しゃくぅ……。
何でいっつも最後はこうなるしゃくかぁ……？」

運命だからな。

つづくかも～

しゃくでば！　蒼の危険（後書き）

あまりいいネタが浮かばなかった&なんか美鶴いじめたかったからこうなった（笑）
ごめんね、美鶴。

受験で更新金曜日にできなくてすいませんでしたっ！

しゃくでぱ！　スーパーミツルブラザーズ？

「ん……？」

「しゃ……く？」

俺と美鶴は目を覚ました。

地面に横たわっていたため、お互い顔が斜めに見える。

「おい、なんだよ？
俺達どうしちまったんだ？」

俺は起き上がって空を見上げた。

「なんだ、あの雲？」

ドットを打ったように平面。

「ん、なんしゃくかぁ、この地面は？」

美鶴が地面を見て首をかしげている。

俺も見た。

平面だ。

「て、美鶴おまえも平面かいっ！」

「は、波音も平面しゃくよぉ！？」

げ。

・・・

つまり……。
これはあれか。
考えた。
某赤い帽子の人が跳ねたりしてゴール目指す……的な？

「と、とりあえず、先に進んでみようぜ？」

「しゃくぅ……」

キモイから近づいてくるな、おばか。

「は、波音……」

ちょっとまて。
平面と平面だから落ちる心配はいらないんだろうが……。
俺の予想だとこのブロックをちょぃと叩けば……。

「おらっらっ」

「何やってるんしゃくかぁ？

「ん？
いや、あのブロック叩けんかなぁって」

「ヴォくに任せるしゃくよぉっ！！」

「ん？
じゃあ、頼むわ」
はりきってんなぁ。
「そぉいやぁっ！！
しゃっこぉおうぅう！！！」
美鶴は勢いよくとんだ！
そして見事にブロックを叩いた！
何か変なにょこにょこって音がした！
「うわっ、何しゃくかぁ、これ」
ブロックの上から落ちてきたものをみて美鶴はうえーっと舌を出した。
確かに……。
これは……キモイな。
きのこっていうよりかは……何？
「気持ち悪いしゃく」
美鶴の顔がそのまんま出てきたような……。
「ぽいっしゃく」
「おぉぉおい！！」
アホかあああ！！

俺は美鶴きのこを追いかけるべくダッシュした。
待ちやがれ！
「よっしゃ、きゃっ……」
崖。
「バカ美鶴ぁぁああ！！！」
てろり。
軽快な音楽が響いたかと思うと目の前が真っ暗になった。
・　・　・
「波音、波音大丈夫しゃくかぁ？」
う……。
「美鶴か……？
ああ、なんとか……」
平面――だよな。
夢じゃないってことか。
「さっきのやつ、もう投げんなよ。
もしかしたらいいやつなのかもしれん」
俺は美鶴の手を借りて立ち上がった。

さっきの美鶴きのこをゲット。
ゲームだったらこれを食えば！
食え……ば。
――――食うの？
これ？
美鶴の顔きのこ？

「おい、美鶴」

さっき俺が落ちた崖を覗き込んでいる美鶴の肩を叩いた。

「なんしゃく？」

振り向いた瞬間に美鶴きのこを口に叩き込んでやる。

「食えッ！
そして飲み込むがいいっ！」

「しゃむぐむぐ……。
ごくしゃく。
しゃぁ！？
こ、これはいったいなんしゃくかぁ！？！？
体の奥底から力がわいてくるしゃくよぉ！？」

おお。
でっかくなってる！
美鶴でっかい！！

「よし、美鶴。
これで効果は分かった。

先に進むぞ」

・・・

「ねぇ、ねぇしゃく」

「ん？」

美鶴が顎で突付いてきた。

何だよ。

「一体全体どうしてこんな所にきちゃったんしゃくかねぇ？」

「知らん、俺が聞きたいわ」

お。

前からのそのそと黒っぽい何かがやってきた。

「おい、美鶴。

ちょっとアレ当たってみてくれ」

「しゃく？

なんしゃくかぁ、あのしょうゆごまだれみたいなきのこは。

別にいいしゃくけど……」

美鶴が俺の二倍ぐらいの身長があるせいで話しかけるたびに上を向かにゃならん。

首が痛い。

「しゃあああああああああああああ！！！
なんしゃくかぁあああああああああ！？！？！？
なんか生暖かいしゃあああああああああっ！！！！」

おうおう。
当たったか。

「あれ？」

美鶴は小さくならない。
全然変わらない。

「よし！」

なら俺だって。

――行けるっ！！

でででっ♪

「なんでだよぉおおおおおおおおおおお」

てろっててろっててろっててん。

つづく。

しゃくでば！　スーパーミツルブラザーズ？（後書き）

なぜか続きます。
マリオは個人的にもすごく好きなゲームです。

どうしてマリオは靴の裏は例外なのか。
ぶつかっても平気なのかを、今度考えて見たいです。

しゃくでば！　スーパーミツルブラザーズ？

前回までの牛筋
なにやらよーわからん世界や！

「あ……うぉう……」

「あ、起きたしゃくか？
大丈夫しゃく？」

近くに顔がでかい美鶴がいた。
でも平面だ。
あぁ、そうか……。
確か……よく解らないやつに触れて……。

「とにかく二次元の世界から三次元の世界に戻ろうぜ、美鶴。
残機とかはないようだし……」

「今度はう〝ぉくが先に行くしゃくね？」

頼りないが任せるのはこいつしかないっ。

「頼む」

もちろん地雷撤去的な意味で……だ。

・・・

「あ、波音、波音～！
前から亀さんが歩いて来たしゃくよ？」

亀ね、亀。
大丈夫、雑魚だ。

「美鶴、踏むがよい」

「わかったしゃくっ！」

ここでやられる……なんてことはないよな？
あっ美鶴、よし！

「あるぇ、消えないしゃくね？
もう一回踏んでみるしゃくぅ♪」

ちょ、待て！
美鶴の踏んだ甲羅は滑らかに回りながら……。
ででっ♪

「ばかやろぉぉぉぉ！」

ぐふぅ……。

・

・　・

「起きるしゃくっ」

「う……がは……」

腹を押さえつつ痛みを堪えて立ち上がる。

「まぁ、大丈夫っぽいしゃくね？
さぁ先に進むしゃくぅ♪」

何で俺ばっかり……。

・　・　・

しばらく穴に気を付けつつ先に進むとようやくゴールの旗が見えてきた。
これで帰れる……。
ようやくだ、よーやくだ。

「えいっの、ちょろろんしゃくっ」

それにしても――。

「ひゅーははーっしゃくぉー！」

『しゃく～ん』っていうジャンプの音、どうにかならんのか？

雑魚がつぶれるときも『しゃぷちっ』といった感じで……。
そういえば俺がジャンプしたときの音ってあまりよく聞いてなかったな。
どれ……。
俺はその場でジャンプしてみた。

『はの～ん』

いやだぁあああっ。
がっくりすると共に一度穴に飛び込んだ。

・　・　・

「これしゃくか？」

「ああ、それだ。
それにしがみつくことによってゴール、お家に帰れる」

目の前には一本の棒。
それに美鶴がしがみつく！
旗が降ろされて……また軽快な音楽が流れたかと思うと花火が背後に七つ上がった。

「よし、建物の中に入ろうぜ」

「しゃくしゃく」

建物の中は真っ暗闇だった。

そして頭を何かで殴られたような衝撃がしたかと思うと……。
俺達はがっくりと地面に崩れ落ちた。

・　・　・

「う……しゃく」

「ん？
　帰れたんだよ……な？」

俺と美鶴はまた何かよく分からないところで目を覚ました。
ここは？
ぴちょん、ぴちょんと地面に水滴がぶつかる音が静かに響く。
あわてて自分の上を見上げた。
白い文字で表されたこのステージの名前。

『1－2』

つづかない

しゃくでば！　スーパーミツルブラザーズ？（後書き）

小さなブラックジョークでした（そうか？

この後、波音たちはがんばってラスボス倒します。

そしてシエラを助けてお家に帰ったのでした。

しゃくでば！　嫌がらせ

「ねぇ、ねぇ、波音、波音しゃく」

んだよ……。

「……」

「しゃくしゃく」

何なのさ。

言うなら早く言えや。

「う〝ぉく思ったしゃくよ」

何を。

早く言え。

「しゃく、思ったしゃく」

「おう、おう……？」

「う〝ぉく、帰ったらきちんとしたいい子になりたいしゃく」

はあ。

何かと思ったらそんなことか。

「いいんじゃね？」

しばらくの沈黙。

「波音、波音しゃく」

いらっ。

何？

まだ何か言いたいことがあるのか？

「う〝ぉく思ったしゃくよお」

「ほう。

なにをだ？」

本当は無視したかったが無視するとうるさいからなぁ。

仕方なしに聞いてやる。

しゃーなしやな。

「僕、帰ったらきちんとしたいい子になりたいしゃく」

「さっきも言ったよな、それ。

何で改めて言い直したんだ？」

「大事なことだったからしゃく」

「……はあ」

またしばらくの沈黙。

ああ、手が痛くなってきた。

「ねぇ、波音、波音しゃくしゃく」

「なんだ……」

半ば諦め気味である。

こいつは何を言っても聞かないんだ。

「僕また思ったしゃくよ。

家に帰ったら冷蔵庫のプリンを食べたいしゃく」

……。

「確かに……な」

疲れた。

まだか？

まだなのか？

「なあなあしゃく」

「……」

「なあなあしゃくしゃく」

「……」

「なあなあしゃく！！」

うるさい。

ため息を吐きながら美鶴の顔を見た。

「なんだよ？」

「やっと僕を見てくれたしゃくね？
それはいいんしゃく。
脇に置いておくしゃく」

ホモか。

「早く言え」

「う〝ぉく達いつまでこうしてればいいんしゃくかねえ？」

そう言って美鶴は下を見た。

「……さあな」

俺も一緒に下を見る。
ぱっくりと口を開けた、崖は底が見えない。
風なんかはなくて体が冷える恐れはないが……。
岩肌に捕まっている手が痛い。
美鶴が悪ふざけをして俺の背中を小さく押すからだ。
お陰でネメシエルの甲板から落ちてしまった。
とっさに掴んだものが美鶴の足だったなんて……。
ついてないぜ。

「ごめんしゃくよぉ、波音……」

「お前が変な思い付きで俺にちょっかいかけてこなかったら今ごろは太平洋でピクニックだったのにな。」

「……しゃくぅ……」

「おらっ、落ちろ」

俺は美鶴の手をたたいた。

「しゃくっ！？
だからごめんしゃくってぇっ！！」

おまけ。

「よーやく来てくれたか……」

俺は下を見た。
巨大な戦艦が浮いている。

『まったく、何やってるんですか？
二人して』

蒼さんの声が崖に響いた。
すまぬ。
たすかってよかったぁ……。

「しゃくしゃくしゃく……」

泣くな。

助かってよかったからって泣くな。
歓喜すんな。

「よぉーし！
今から太平洋へれっつごぉぉしゃくぅっ☆」

ネメシエルが火を噴いた。
美鶴が消えた。

「……そりゃそうだわな。
お前のせいだしな、元はといえば……」

「しゃくぅぅ……」

消えてすぐに復活する。
さすがギャグキャラだ。

しゃくでば！　嫌がらせ（後書き）

いろいろと状況不明なのはしゃくでばだからです！

しゃくでば！　なん……だと？

「ケリをつけようぜ、美鶴……」

「いいしゃくよ……？
いい加減どっちが強いかを決めるしゃく」

美鶴はすらりと剣を抜いた。

「って、なんしゃくかこれはぁ！？」

茸だった。

「なんでこのタイミングで茸なんだ……？
やるじゃないか」

「ふふっ、実はこれは波音を油断させる策略しゃくよっ――！
これで貴様を倒してやるしゃくっ――！」

ほう。
おもしろい。
面白いぞしゃくばやまぁ！

「俺も貴様をこれでぶったおす！」

そういって俺は柄からパスタを抜いた。

「勝負だ！」

「しゃぁあああっ！」

茸とパスタがぶつかり合う！
飛び散る火花もとい、胞子と小麦粉！
俺も美鶴もお互い一歩も譲らないっ！
頭と頭をぶつけ合いひくことを知らないっ！

「やるじゃねぇか……おい？」

「しゃっしゃっしゃ……。
波音に負けてからヴぉくは更に精進したんしゃくよ？」

「ふはははは！
ならその自信を今ここで撃ちぬいてやろう！」

そう言って俺はパスタを縦に持ち直した。

「な、何をするんしゃく？」

「封印、解！」

パスタから強烈な光が発生した。
天井を射抜くばかりの光が美鶴と俺を包み込む。

「ふふふふ……」

「な、なん……だとしゃく」

俺の手にあるのはほかほかに茹で上がったパスタ。

「剣から鞭へと変形する武器なんて見たことも聞いたこともないしゃくよぉっ――！」

俺は笑いながら美鶴に一撃を食らわせた。

「じゃぐっ！？」

美鶴はもろにそれを右からくらい倒れる。

「何て威力しゃくかぁっ――！」

茸の剣にもついでに当たったのだろう。

茸はへにゃりと折れ曲がっていた。

「くっ、剣が……！

仕方ないしゃくねっ――！！

僕も本気で行かせてもらうしゃくよっ！

封印弐・解！」

「なんだとっ！？」

くそっ。

俺の目を射抜く強烈な光。

赤と共に殺気を纏い美鶴の手に集約していく――！

この力、まさか……！

「ポセイドンマッシュルーマー！！」

巨大な剣茸となった美鶴の剣は輝いていた。

ちぃっ……！

「行くぞ、美鶴！」

「しゃぁあああああああああ！！！」

俺達は二人にやりと笑い、手を振り下ろした――！

「うるさい」

シエラ！？

次の瞬間俺達二人は頭を上にぼすんと床に倒れていた。

最終兵器めっ――！

「何するんだよ！

せっかくいい展開だったのに！」

「そうしゃくよ！」

「なにがいい展開。

波音はゆでたパスタ持ち出すし美鶴は串にさしたしいたけ持ち出すし。

何考えてるの？」

しゅん……。

「ごめんなさい。

パスタ返します」

「しゃくぅ……。

しいたけ返すしゃくよぉ……」

「よろしい。
じゃあ調理実習再開ってことで」

☆おまけ☆

「このパスタうめぇ。
俺すげくね？」

「この茸うまいしゃく。
ヴぉくすごいしゃくね」

「「ああ！？」」

「うるさいっ！」

しゃくでば！　なん……だと？（後書き）

うわぁぁぁい！
ありがとうございましたー！

とりあえず書きたかっただけです。
ふへへ、さーせん。

しゃくでば！　なぜ

俺は美鶴に言った。

「なぜ」

と。

美鶴は黙っていた。

もう一度俺は言った。

「なぜ」

と。

美鶴は返事をしない。

美鶴……。

なんでだよ。

「なぜ」

美鶴はベットで寝ている。

安らかに……。

白いベットの中で美鶴は寝ている……。

「なぜだよ……美鶴」

なぜだろう。

俺は涙が止まらなかった。

こいつは昔からこうだった。

いつもバカなことをやって……。

美鶴……。
お前、本当に……。

「なぜ」

もう一度、もう一度だけ。
ベットにこぼれた涙を手で拭う。

「なぜ……俺のプリンを食ったんだ」

こいつ、俺のプリン食いやがった。
それで満足したのか俺のベットで寝てやがる。
ありえん。
この野朗……。

「しゃくぅぅすぷぅ……」

よし、殴る。
殴りつけるぞ。

「せーの……」

ごきっ！

「しゃぁあああああああ

食べ物の恨みは恐ろしいのだ。

しゃくでば！　なぜ（後書き）

恐ろしいのです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2021p/

しゃくでば！

2011年12月24日04時52分発行